
東松山市

杉の木遺跡

介護老人保健施設建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告

2006

医療法人 若葉会

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県のほぼ中央に位置する東松山市は、人口9万人を擁する比企地方の拠点都市です。戦国時代に松山城の城下町として「市（いち）」が開かれるようになって以来、商業都市として発展してきました。現在は、東京から電車で約1時間という地理的条件もあって、東京近郊の田園文化都市としての役割を担い、高坂ニュータウンや東武東上線高坂駅周辺の土地区画整理事業などが進められております。

毎年11月には東松山市が中心となって比企の自然を舞台に“日本スリーデーマーチ”が開催され、日本各地、世界各国から8万人を超すウォーカーが参加する日本最大のウォーキングの祭典として、多くの人々に親しまれています。

このたび医療法人若葉会では、医療を通じ地域社会に貢献するために東松山市毛塚に介護老人保健施設を建設することとなりました。予定地が、比企地域における弥生時代後期の代表的な遺跡のひとつである杉の木遺跡の範囲内にあることから、その取り扱いについて、関係諸機関が慎重に協議を重ねましたが、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の措置を講ずることとなりました。発掘調査は、埼玉県教育委員会及び東松山市教育委員会の調整により、当事業団が医療法人若葉会の委託を受けて実施いたしました。

今回の発掘調査では、弥生時代後期の集落跡をはじめとして、毛塚古墳群に含まれる3基の古墳跡、江戸時代の溝跡や土壌など多数の遺構が発見され、弥生土器、土師器、須恵器、埴輪、陶磁器などの豊富な遺物が出土しました。なかでも、円筒埴輪を利用した埴輪棺と呼ばれる副次的な埋葬施設が良好な状態で検出され、古墳時代の埋葬方法を知る貴重な成果が得られました。

本書はこれらの成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護や学術研究の基礎資料として、また、普及・啓発及び各教育機関の参考資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育委員会及び東松山市教育委員会をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力いただきました医療法人若葉会並びに地元関係者各位に対し、深く感謝申し上げます。

平成18年3月

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 福 田 陽 充

例　言

1. 本書は、東松山市大字毛塚に所在する杉の木遺跡第4次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の略号と代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

杉の木遺跡 第4次（SGNK4）
埼玉県東松山市大字毛塚字南杉の木 773-1 他
平成17年6月8日付け 教生文第2-19号
3. 発掘調査は、介護老人保健施設事業に伴う事前調査であり、埼玉県教育委員会及び東松山市教育委員会が調整し、医療法人若葉会の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第Ⅰ章の組織により実施した。
5. 発掘調査は、今泉泰之、大谷 徹が担当し、平成17年5月23日から平成17年9月30日まで実施した。
6. 整理・報告書作成作業は、平成17年12月1日から平成18年3月24日まで実施した。
7. 遺跡の基準点測量は、株式会社未央測地設計に委託した。空中写真撮影は、株式会社シン技術コンサルに委託した。
8. 発掘調査の写真撮影は発掘担当者が行い、遺物の写真撮影は大屋道則が行った。

なお、試掘調査における写真撮影は、東松山市教育委員会が行った。

9. 出土遺物の整理及び図版の作成は大谷が主に行い、縄文土器は金子直行が、石器は西井幸雄が、弥生土器は磯崎 一、渡辺清志、宅間清公が、中・近世の遺物は浅見ふみが行った。

なお、試掘調査で出土した遺物については、東松山市教育委員会から実測図の提供を受けた。

10. 本書の執筆は、第Ⅰ章-1を埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課が、縄文時代の遺物を金子、西井が、弥生時代の遺構・遺物を富田和夫、宅間が、中・近世の遺物観察表を浅見が、第Ⅴ章-1を宅間が、他は大谷が行った。
11. 本書の編集は、大谷が行った。
12. 本書に掲載した資料は、平成18年度以降、東松山市教育委員会が管理・保管する。
13. 本書の作成にあたり、下記の方々・機関から御教示・御指導・御協力を賜った。記して感謝の意を表します。（敬称略）

東松山市教育委員会 墓輪研究会
青木忠雄 江原昌俊 太田博之 柿沼幹夫
金井塙良一 佐藤幸恵 日高慎 宮島秀夫
山崎 武

凡 例

1. 本書中におけるX・Yの数値は、世界測地系（新測地系）による平面直角座標第IX系（原点：北緯 $36^{\circ} 00' 00''$ 、東経 $139^{\circ} 50' 00''$ ）に基づく座標値（m）を示し、各挿図における方位は、すべて座標北を示している。
2. 遺跡におけるグリッドは、前記座標系に基づいて設定し、 $10\text{ m} \times 10\text{ m}$ を基本グリッドとしている。
3. グリッドの名称は、北西杭を基準として、南北方向は北から順にA・B・C・・・とアルファベットを付し、東西方向は西から1・2・3・・・と算用数字を付し、A-1グリッド等の名称を付けた。
4. 遺構番号は、原則として調査時に付した番号を掲載している。
5. 本報告書における本文・挿図・表に示す遺構の略号は以下のとおりである。

P…ピット	S C…集石土壙
S D…溝跡	S J…堅穴住居跡
S K…土壙	S R…方形周溝墓
S S…古墳跡	S T…埴輪棺
S X…性格不明遺構	

6. 遺構図及び実測図の縮尺は、原則として以下のとおりである。

遺構	全体図…1/300・1/400
	住居跡・土壙…1/60
	古墳跡…1/160（遺構図）・1/80（土層断面図）・1/40（遺物出土状況図）
	埴輪棺…1/20
	溝跡…1/160・1/80
遺物	縄文土器…1/3 石器…1/3・2/3
	弥生土器…1/4（実測図）・1/3（拓影図）
	土師器・須恵器・形象埴輪…1/4
	円筒埴輪…1/5（実測図）・1/4（拓影図）
	近世遺物…1/3 銭貨…1/1

その他のものに関しては、スケール及び縮尺率等をその都度表記している。

7. 遺構断面図に表記した水準数値は、海拔標高を示しており、単位はmである。

8. 遺物観察表の表記方法は、以下のとおりである。法量の（ ）付き数値は推定値を表し、単位はcmである。

胎土は土器に含まれる鉱物等のうち、特徴的なものを示した。

A : 白色粒子 B : 角閃石 C : 石英

D : 雲母 E : 長石 F : 赤色粒子・鉄分

G : 黒色粒子 H : 白色針状物質 I : 片岩

J : 砂粒 K : 小礫

色調は、「新版標準土色帖」2002年版(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修)を基に通用表記とした。

残存率は、5%刻みで表示した。あくまでも目安としてのおおまかな全体表示である。

9. 円筒埴輪ならびに形象埴輪の観察表の表記方法は、遺物観察表とは異なるため、凡例を本文中に掲載した（67頁）。

10. 本報告書に掲載した地形図は、国土地理院発行の1/50,000、東松山市都市計画図1/10,000、及び1/2,500を使用した。

11. 文中の引用文献は、（著者 発行年）の順で表記し、その他の参考文献とともに巻末に一覧を掲載した。

目 次

序

例 言

凡 例

I	発掘調査の概要	1	3.	古墳時代後期の調査	49
1.	調査に至る経過	1	(1)	古墳跡	49
2.	発掘調査・報告書作成の経過	2	(2)	埴輪棺	70
3.	発掘調査・整理・報告書刊行の組織	2	(3)	その他の遺構と遺物	73
II	遺跡の立地と環境	3	4.	中・近世の調査	79
1.	地理的環境	3	(1)	溝跡	79
2.	歴史的環境	4	(2)	室跡	92
3.	高板台地周辺の古墳群	7	(3)	集石土壙	94
III	遺跡の概要	8	(4)	土壙	94
IV	遺構と遺物	12	(5)	ピット	105
1.	縄文時代の調査	12	(6)	調査区出土遺物	111
(1)	縄文土器	12	5.	試掘調査	112
(2)	石器	16	(1)	縄文土器	113
2.	弥生時代後期から古墳時代初頭の調査	17	(2)	弥生土器	113
(1)	住居跡	17	(3)	その他の遺物	113
(2)	炉跡	31	(4)	毛塚28号墳の調査	114
(3)	方形周溝墓	31	V	調査のまとめ	121
(4)	溝跡	33	1.	吉ヶ谷式土器をめぐる問題	121
(5)	土壙	33	2.	毛塚古墳群の提起する問題	127
(6)	調査区出土遺物	33	写真図版		

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	3	第35図 第1号方形周溝墓出土遺物	32
第2図 杉の木遺跡の位置と周辺の遺跡	5	第36図 第8号溝跡	33
第3図 高坂台地周辺の古墳分布図	6	第37図 第8号溝跡出土遺物	33
第4図 高济寺古墳出土円筒埴輪	7	第38図 第19・26・34号土壙	34
第5図 杉の木遺跡周辺の地形と調査地点	8	第39図 第19・26・34号土壙出土遺物	34
第6図 過去の調査における出土遺物	9	第40図 調査区出土弥生土器(1)	35
第7図 杉の木遺跡第4次調査区全測図	10	第41図 調査区出土弥生土器(2)	36
第8図 杉の木遺跡第3・4次調査区全測図	11	第42図 調査区出土弥生土器(3)	37
第9図 調査区出土縄文土器(1)	13	第43図 毛塚32号墳(1)	50
第10図 調査区出土縄文土器(2)	14	第44図 毛塚32号墳(2)	51
第11図 調査区出土石器(1)	15	第45図 毛塚32号墳出土遺物(1)	51
第12図 調査区出土石器(2)	16	第46図 毛塚32号墳遺物出土状況図(1)	52
第13図 第1号住居跡	18	第47図 毛塚32号墳遺物出土状況図(2)	53
第14図 第1号住居跡出土遺物	19	第48図 毛塚32号墳遺物出土状況図(3)	54
第15図 第2号住居跡	20	第49図 毛塚32号墳出土遺物(2)	55
第16図 第2号住居跡出土遺物	21	第50図 毛塚32号墳出土遺物(3)	56
第17図 第3・6号住居跡	22	第51図 毛塚32号墳出土遺物(4)	57
第18図 第3号住居跡出土遺物	22	第52図 毛塚32号墳出土遺物(5)	58
第19図 第4号住居跡	23	第53図 毛塚32号墳出土遺物(6)	59
第20図 第4号住居跡出土遺物	24	第54図 毛塚32号墳出土遺物(7)	60
第21図 第3・4号住居跡出土遺物	24	第55図 毛塚32号墳出土遺物(8)	61
第22図 第5号住居跡	25	第56図 毛塚32号墳出土遺物(9)	62
第23図 第5号住居跡出土遺物	26	第57図 毛塚32号墳出土遺物(10)	63
第24図 第6号住居跡出土遺物	26	第58図 毛塚32号墳出土遺物(11)	64
第25図 第7号住居跡	27	第59図 毛塚32号墳出土大型円筒埴輪復元図	65
第26図 第7号住居跡出土遺物	27	第60図 毛塚33号墳	68
第27図 第8号住居跡	28	第61図 毛塚33号墳出土遺物	69
第28図 第8号住居跡出土遺物	29	第62図 毛塚34号墳	69
第29図 第9号住居跡	30	第63図 毛塚34号墳出土遺物	70
第30図 第9号住居跡、第1号性格不明遺構 出土遺物	30	第64図 第1号埴輪棺	71
第31図 第10号住居跡	31	第65図 第1号埴輪棺出土遺物	72
第32図 第10号住居跡出土遺物	31	第66図 墳輪集中区遺物出土状況図	73
第33図 炉跡1・2	31	第67図 墳輪集中区出土遺物	74
第34図 第1号方形周溝墓	32	第68図 第1号性格不明遺構	75
		第69図 第1号性格不明遺構出土遺物	75

第70図	調査区出土円筒埴輪	76
第71図	調査区出土形象埴輪（1）	77
第72図	調査区出土形象埴輪（2）	78
第73図	第1号溝跡	80
第74図	第2・3号溝跡	81
第75図	第4号溝跡	82
第76図	第5・7号溝跡	83
第77図	第6号溝跡	84
第78図	第9号溝跡	85
第79図	第10号溝跡	86
第80図	溝跡出土遺物（1）	87
第81図	溝跡出土遺物（2）	88
第82図	溝跡出土遺物（3）	89
第83図	溝跡出土遺物（4）	90
第84図	第1・2号室跡	92
第85図	第1号室跡出土遺物	93
第86図	第1号集石土壤	94
第87図	土壤（1）	95
第88図	土壤（2）	96
第89図	土壤（3）	97
第90図	土壤（4）	98
第91図	土壤（5）	99
第92図	土壤出土遺物（1）	101
第93図	土壤出土遺物（2）	102
第94図	土壤出土遺物（3）	103
第95図	ピット全体図（1）	106
第96図	ピット全体図（2）	107
第97図	ピット（1）	108
第98図	ピット（2）	109
第99図	ピット（3）	110
第100図	ピット出土遺物	110
第101図	調査区出土遺物	111
第102図	試掘調査（保存地区）全測図	112
第103図	試掘調査出土遺物	113
第104図	毛塚28号墳出土形象埴輪	115
第105図	毛塚28号墳出土形象埴輪（1）	116
第106図	毛塚28号墳出土形象埴輪（2）	117
第107図	毛塚28号墳出土形象埴輪（3）	118
第108図	毛塚28号墳出土形象埴輪（4）	119
第109図	吉ヶ谷式土器の分類	123
第110図	縄文原体の構成比率	125
第111図	吉ヶ谷式・岩鼻式土器出土遺跡	126
第112図	古墳関連出土土器	128
第113図	毛塚28号墳及び桜山窓跡群出土 円筒埴輪	130

表 目 次

第1表	調査区出土石器観察表	17
第2表	第1号住居跡出土遺物観察表	38
第3表	第2号住居跡出土遺物観察表	39
第4表	第3号住居跡出土遺物観察表	39
第5表	第4号住居跡出土遺物観察表	40
第6表	第3・4号住居跡出土遺物観察表	40
第7表	第5号住居跡出土遺物観察表	40
第8表	第6号住居跡出土遺物観察表	42
第9表	第7号住居跡出土遺物観察表	42
第10表	第8号住居跡出土遺物観察表	42
第11表	第9号住居跡・第1号性格不明遺構 出土遺物観察表	43
第12表	第10号住居跡出土遺物観察表	43
第13表	第1号方形周溝墓出土遺物観察表	44
第14表	第8号溝跡出土遺物観察表	44
第15表	第19号土壤出土遺物観察表	44
第16表	第26号土壤出土遺物観察表	44
第17表	第34号土壤出土遺物観察表	44
第18表	調査区出土遺物観察表	44
第19表	毛塚32号墳出土遺物観察表	51

第20表	毛塚32号墳出土円筒埴輪計測表	63
第21表	毛塚32号墳出土円筒埴輪観察表	66
第22表	毛塚33号墳出土遺物観察表	69
第23表	毛塚34号墳出土円筒埴輪観察表	70
第24表	毛塚34号墳出土円筒埴輪計測表	70
第25表	第1号埴輪棺出土円筒埴輪観察表	73
第26表	第1号埴輪棺出土円筒埴輪計測表	73
第27表	埴輪集中区出土円筒埴輪観察表	74
第28表	第1号性格不明遭構出土遺物観察表	75
第29表	調査区出土円筒埴輪観察表	76
第30表	調査区出土形象埴輪観察表	78
第31表	第1号溝跡出土遺物観察表	91
第32表	第9号溝跡出土遺物観察表	91
第33表	第10号溝跡出土遺物観察表	91
第34表	第1号室跡出土遺物観察表	93
第35表	土壤・室跡一覧表	100
第36表	第20号土壤出土遺物観察表	103
第37表	第22号土壤出土遺物観察表	104
第38表	第23号土壤出土遺物観察表	104
第39表	第24号土壤出土遺物観察表	104
第40表	第27号土壤出土遺物観察表	104
第41表	第30号土壤出土遺物観察表	104
第42表	第40号土壤出土遺物観察表	104
第43表	第42号土壤出土遺物観察表	104
第44表	第52号土壤出土遺物観察表	104
第45表	第57号土壤出土遺物観察表	104
第46表	第58号土壤出土遺物観察表	104
第47表	ピット一覧表	105
第48表	ピット出土遺物観察表	110
第49表	調査区出土遺物観察表	111
第50表	試掘調査出土遺物観察表	113
第51表	毛塚28号墳出土形象埴輪観察表	120

図版目次

図版1	遠景（越辺川上空から）	第5号住居跡
	全景（西上空から）	第5号住居跡 炉跡
図版2	全景（真上から）	図版5 第7号住居跡
	近景（西から）	第7号住居跡 第1・2号炉跡
図版3	第1号住居跡	第8号住居跡
	第1号住居跡 第1・2号炉跡	第8号住居跡 炉跡
	第1号住居跡遺物出土状況	第9号住居跡
	第2号住居跡	第10号住居跡 炉跡
	第2号住居跡 炉跡	第1号方形周溝墓
	第3・6号住居跡	図版6 毛塚32号墳（南西から）
図版4	第3・6号住居跡遺物出土状況	毛塚32号墳北西周溝埴輪出土状況
	第3号住居跡遺物出土状況	図版7 毛塚32号墳北西周溝埴輪出土状況
	第6号住居跡遺物出土状況	毛塚32号墳南東周溝土器出土状況
	第4号住居跡	毛塚32号墳北東周溝遺物出土状況
	第4号住居跡 炉跡	毛塚32号墳北東周溝土器出土状況
	第4号住居跡遺物出土状況	毛塚32号墳北東周溝円筒埴輪出土状況

図版8	毛塚33号墳（南から） 毛塚33号墳（東から）	勾玉・紡錘車 第14・16・20・28・30・42 図
図版9	毛塚33号墳北周溝土器出土状況 毛塚34号墳（南から）	図版17 第1号住居跡 第14図5～21 第2号住居跡 第16図1～17
図版10	第1号埴輪棺（南東から） 第1号埴輪棺（南から） 第1号埴輪棺（埴輪棺除去後） 第1号埴輪棺（棺身1・2） 第1号埴輪棺（棺身3・4）	図版18 第3号住居跡、第3・4号住居跡 第18 図3～11、第21図1～9 第4号住居跡 第20図1・3～13
図版11	第1号性格不明遺構（東から） 第1号性格不明遺構（西から） 第1号性格不明遺構（凝灰質砂岩削屑出土状況） 第1号性格不明遺構（凝灰質砂岩削屑細部） 第1号性格不明遺構（土層断面）	図版19 第5号住居跡 第23図1～5・7～18・20 ～31・33～35・37～40 第7号住居跡 第26図1～5
図版12	第1号溝跡（北から） 第1号溝跡（南から） 第10号溝跡（南東から） 第10号溝跡銅製仏像出土状況 第1号集石土壤 土壤群（E-9グリッド） 第23号土壤	図版20 第8号住居跡 第28図1～16 第9号住居跡、第1号性格不明遺構 第 30図1～18
図版13	縄文土器1 第9図1～26 縄文土器2 第9図42～49、第10図61～90	図版21 弥生土器1 第40図1～3・7・8、第 41図31～45 弥生土器2 第40図5、第41図46～66・72 ・73
図版14	石器1 第11図1～17、第14図24 石器2 第12図18～23、第14図23、第20図 15、第23図42	図版22 弥生土器3 第40図12・13・23・24、第41 図67～71・74～77、第42図78～81・83～ 91 弥生土器4 第42図82・92～94・96・98・ 100・103・107～125・127・128・130・ 134・136～139
図版15	第1号住居跡 第14図1・2 第3号住居跡 第18図1・2 第6号住居跡 第24図1 調査区 第40図4	図版23 毛塚32号墳 第45図1・2 毛塚33号墳 第61図1・2
図版16	第4号住居跡 第20図2 調査区 第40図17～19・29・30 第1号方形周溝墓 第35図1 第8号溝跡 第37図1	図版24 毛塚32号墳 第49図4～7 毛塚32号墳 第50図8・9 毛塚32号墳 第52図19・20・24 図版25 毛塚32号墳 第50図10・11 毛塚32号墳 第51図12～15 毛塚32号墳 第52図25・26 毛塚32号墳 第53図29 図版26 毛塚32号墳 第52図16・18・23 毛塚32号墳 第53図27・30・32・34 毛塚32号墳 第54図35・38～40 図版27 第1号埴輪棺 第65図1～5 埴輪集中区 第67図1

- 毛塚32号墳 第54図37
- 毛塚32号墳 第53図31・33
- 毛塚32号墳 第63図1
- 図版28 毛塚32号墳 第58図84～86
- 調査区円筒埴輪 第70図1～5
- 調査区人物埴輪 第71図6
- 第1号性格不明遺構 第69図1
- 図版29 毛塚32号墳 第52図17・21・22、第55図50～55・57～60、第56図62・64・66
- 図版30 毛塚32号墳 第54図36・46、第55図56・61、第56図63・65・67～72
- 図版31 毛塚32号墳 第54図41～45・47～49、第57図73～79
- 埴輪集中区 第67図2～4
- 図版32 人物埴輪 第71図1～5・7～13
- 馬形埴輪・不明形象埴輪 第72図14～20
- 図版33 第10号溝跡 第81図15・18
- 第20号土壤 第92図2・9
- 第24号土壤 第93図14
- 磁器 第92図8、第93図17～19
- 陶器碗 第81図16、第94図25、第100図5
- 土器・炻器 第80図1・10、第81図19、第93図20
- 図版34 第9号溝跡 第80図8・9
- 第10号溝跡 第81図14・17
- 第27号土壤 第93図16
- C-9グリッドピット8 第100図2
- 羽口（第1号溝跡） 第80図2
- 泥面子・土鍤 第103図14、第101図4
- 銅製仏像（第10号溝跡） 第83図40
- 錢貨 第80・83・93・94・101図
- 図版35 鉄製品 第83図33・35～38、第92図5～7・10・11・13、第93図21、第101図1・2
- 銅製品 第81図13、第100図1、第101図3、第83図34、第85図3、第92図4
- 図版36 板碑 第92図12、第80図3、第83図29・30
- ・32
- 砥石 第82図22～24、第92図3、第100図3
- 図版37 第1号室跡（石製品） 第85図1・2
- 石臼 第81図11、第82図26・28
- 図版38 試掘調査前（北東から）
- 1・2トレンチ連結部（西から）
- 2トレンチ北側（南から）
- 2トレンチ南側（南から）
- 埴輪集中区（E-8グリッド）
- 埴輪集中区出土状況
- 第1号性格不明遺構須恵器出土状況
- 5・6トレンチ（北西から）
- 図版39 毛塚28号墳西周溝（南から）
- 毛塚28号墳西周溝（北から）
- 毛塚28号墳遺物出土状況
- 毛塚28号墳女子人物埴輪
- 毛塚28号墳馬形埴輪脚部
- 毛塚28号墳西周溝（北から）
- 毛塚28号墳遺物出土状況（北から）
- 毛塚28号墳遺物出土状況（北東から）
- 図版40 毛塚28号墳男子人物埴輪 第105図1
- 図版41 毛塚28号墳女子人物埴輪 第105図2
- 図版42 毛塚28号墳人物埴輪 第105図3～9、第106図10～15
- 毛塚28号墳馬形埴輪 第106図16～23・25、第107図27～32、第108図34・35
- 図版43 毛塚28号墳馬形埴輪頭部 第107図26
- 毛塚28号墳馬形埴輪鞍 第106図24
- 毛塚28号墳馬形埴輪脚部 第107図33
- 毛塚28号墳馬形埴輪尻部 第108図36
- 毛塚28号墳馬形埴輪脚部 第108図38

I 発掘調査の概要

1. 調査に至る経過

埼玉県教育委員会では、民間開発事業によりその保存に影響が及ぶ埋蔵文化財を適切に保護するため、県内市町村教育委員会に対し、専門職員の配置や発掘調査体制の整備などを積極的に指導してきた。

しかしながら、大規模又は突発的な開発事業に係り緊急に埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査の実施が必要となり、地元教育委員会がこれに即応することが困難な場合については、当該市町村教育委員会からの要請にもとづき、県教育委員会として支援を行ってきたところである。

平成16年6月、東松山市大学毛塚字南杉ノ本地内における介護老人保健施設建設に際し、医療法人若葉会及び地権者の代理人から、東松山市教育委員会に当該地における埋蔵文化財の所在の有無について照会がなされた。

市教育委員会は、当該地は杉の木遺跡（No.34-083）に該当し、隣接地では毛塚28号墳が発掘調査されており、事業地には埋蔵文化財の所在の可能性が高く、埋蔵文化財の所在確認調査が必要である旨を伝えた。

平成16年12月、事業主である医療法人若葉会理事長 川口 茂氏より、東松山市教育委員会教育長あて、「埋蔵文化財所在確認調査依頼」が提出された。

市教育委員会では、平成17年3月に確認調査を実施し、同地内より古墳跡、土坑跡、溝跡などの遺構及び遺物を検出した。そのため平成17年3月17日付け東松生教発第0317003号で「埋蔵文化財所在確認調査依頼」に対する回答を概ね以下のとおり伝え遺跡の保存について協力を求めた。

1. 今回の確認調査地においては、現況より約20～40cmの深さから古墳跡4基、円筒埴輪棺1基、住居跡16軒、土坑跡、溝跡などが確認されている。

2. 事業実施にあたっては、保護層を確保し、遺構に影響を及ぼさないよう保護されたい。遺構に影

響を及ぼす場合には、記録保存の措置が必要となる。

回答を伝えた医療法人若葉会との協議の結果、計画地全面に保護層を確保しての事業の実施は難しく、全面的な事業計画の変更は不可能であるため発掘調査を実施することとなった。市教育委員会では発掘調査の実施について協議を行ったが、市教育委員会では発掘調査に対応することが困難なことから県教育委員会あてに発掘調査の実施に関する支援の要請を行った。県教育委員会は要請を受け入れ、実施に向け調整がされた。

平成17年4月、事業主から市教育委員会に「埋蔵文化財発掘調査依頼」が提出され、発掘調査の実施について協議を重ね、発掘調査は財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施することとなり、平成17年5月9日付けで4者による「介護老人保健施設建設事業予定地に係る埋蔵文化財の取扱いに関する協定書」が締結された。

医療法人若葉会は平成17年4月25日付けで文化財保護法第93条の規定による発掘届を提出し、県教育委員会教育長は平成17年5月2日付け教生文第3-57号で「発掘調査」の指示を行った。

発掘調査は平成17年5月23日から9月30日までの予定で実施することとなった。

その後、医療法人若葉会より東松山市教育委員会あてに一部設計の変更が伝えられ、協議が行われた。これを受けて、平成17年8月22日付けで、4者による「介護老人保健施設建設事業予定地に係る埋蔵文化財の取扱いに関する協定書」の一部を変更する協定書」が締結された。

財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から県教育委員会あて、文化財保護法第92条の規定にもとづく届けが提出された。これに対し、県教育委員会からの指示通知は平成17年6月8日付け教生文第2-19号で行った。

（埼玉県教育局生涯学習部生涯学習文化財課）

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

杉の木遺跡の発掘調査は、平成17年5月23日から平成17年9月30日まで実施した。面積は2,510m²である。

5月23日から重機による表土除去作業とともに、併行して調査事務所等の設営を行った。6月1日から調査を開始し、補助員による遺構確認作業に着手し、順次、遺構の精査を実施した。遺構確認と精査の結果、弥生時代後期の竪穴住居跡10軒、古墳時代後期の古墳跡3基などが検出された。

遺構精査の後、遺物出土状況や遺構の写真撮影および図面作成を行い、遺跡の記録保存に万全を期した。調査中、台風7号、11号の接近により大雨に見舞われたが、8月29日に空中写真撮影を実施し、無事現地調査を完了した。その後、調査区内の安全を確保し、9月上旬に発掘機材の撤収及び事務所等を撤去して、すべての作業を終了した。

(2) 整理・報告書の作成

杉の木遺跡の整理事業は、平成17年12月1日から平成18年3月24日まで行った。

12月1日から、出土遺物の水洗・注記、接合・復元作業および写真や図面整理を開始した。遺構図については、第二原図を作成し、スキャナーで読み込んだものをコンピューターでデジタルトレスした。

遺物については、弥生土器、埴輪の順で接合に着手した。円筒埴輪は予想以上の接合率のため、粘り強い補助員の努力により数多くの個体が復元された。その後、探拓・実測を行い、順次遺物図のトレスを開始した。

統一して遺物写真の撮影を行い、図面・写真・本文の割付作業と原稿執筆を進めて編集作業に着手した。2月中旬に大部分の作業を完了させて、印刷業者を選定し、校正作業を経て、平成18年3月に報告書を刊行した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（平成17年度）

理事長 福田 陽充

副理事長 飯塚 誠一郎

常務理事兼管理部長 保永 清光

（管理部）

管理部副部長 村田 健二

主 席 高橋 義和

主 席 宮井 英一

主 任 長瀧 美智子

（8月まで）

主 任 福田 昭美

主 事 菊池 久

主 事 海老名 健

主 事 岩上 浩子

（8月から）

主 事 結城 淑恵

（3月）

（調査部）

調査部長 今泉 泰之

調査部副部長 坂野 和信

主席調査員 鶴持 和夫

（調査第二担当）

主席調査員 金子 直行

（資料整理第二担当）

統括調査員 大谷 徹

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

杉の木遺跡は、東武東上線高坂駅の南西約700mの東松山市大字毛塚字南杉の木773-1に所在する。

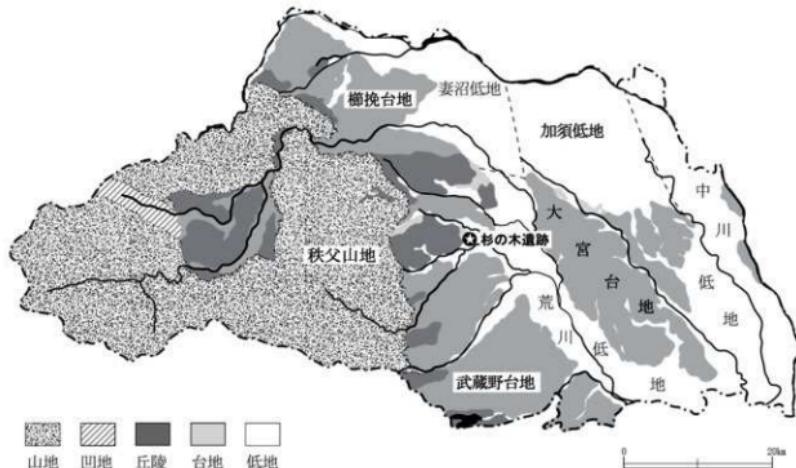
東松山市は、埼玉県の中央部に位置し、市域の大半が外秩父山地につらなる丘陵や台地からなり、さらに東流する都幾川とその支流によって形成された沖積地によって、これら丘陵・台地が南北に大きく二分されている。北部は比企丘陵・松山台地から、南部は岩殿丘陵・高坂台地からなり、起伏に富んだ複雑な地形を呈し、豊かな自然環境を育んでいる。

当遺跡は東松山市の南辺にあたり、越辺川を境に坂戸市と接し、地形的には高坂台地の中央やや西寄りに位置している。高坂台地は、岩殿丘陵の東方につらなる、都幾川と越辺川にはさまれた洪積台地で、沖積地に半島状に突き出した形をしている。台地北縁は急崖によって縁取られ、南縁は比較的緩やかな斜面をなし、南北方向に湾入する支谷を随所に見ることができる。遺跡の南側には岩殿丘陵に源を発す

る九十九川が丘陵と台地を画するように流れ、越辺川へと合流し、さらに東方で大きく蛇行する都幾川に合流して、中少の河川を合わせながら荒川低地へと流れ込んでいる。

こうした河川交通の要衝に位置することから高坂台地周辺には数多くの遺跡が分布しており、古より人々の暮らしの舞台となっていたことが、考古学的な知見から裏づけられている。

今次調査区は、南面する標高27~29mの緩斜面部に立地しており、調査区の南側には珍しい彩色の石仏、薬師如来坐像を安置する薬師堂が隣接している。周辺の微地形は、北に毛塚川が開削した狭小な支谷が東方から北方へ入り込み、東へ延びる舌状台地を形成している。台地南縁は水田面との比高差約7mの急崖となっており、眼下に越辺川によって形成された広大な沖積地を眺望することができる見晴らしのよい高台に立地している。



第1図 埼玉県の地形図

2. 歴史的環境

ここでは遺跡の位置する高坂台地とその周辺の歴史的環境について概観したい（第2図）。

高坂台地に遺跡が形成されるのは縄文時代からで、代正寺遺跡で縄文時代前期の住居跡が1軒、東縁部に位置する東形遺跡から前期の住居跡2軒、台地北西部にある月並遺跡から中期の住居跡が2軒検出されている。周辺部では岩殿丘陵に位置する駒堀遺跡で早期～後期までの土器、都幾川左岸の松山台地にある岩の上遺跡から中期の住居跡、雉子山遺跡から後期の住居跡が検出されている。現状では、総じて縄文時代の遺跡は少ないという傾向は指摘できよう。

弥生時代に至ると遺跡数は確実に増加する。前期の遺跡は未発見であるが、中期後半になると代正寺遺跡に宮ノ台期の住居跡と方形周溝墓からなる大規模な集落が出現する。この集落は櫛描文系土器（岩鼻式）を採用しつつ、後期前半まで継続することが確認できる。支谷をはさんで南側に位置する大西遺跡からは縄文を多用する吉ヶ谷式期の集落が営まれている。吉ヶ谷式土器は岩鼻式に後続するという研究から、大きくは代正寺遺跡から大西遺跡へと集落が移動したと推定されている（松本2003）。

最近、代正寺遺跡の北側に広がる沖積地から弥生時代の遺跡が発見された。錢塚遺跡、反町遺跡がそれである。錢塚遺跡からは櫛描文系土器（岩鼻式）を使用した土器棺墓、反町遺跡からは中期後半の集落と、後期前半の集落及び方形周溝墓・土器棺墓からなる墓域が発見された。台地上のみならず、直下の低地部（自然堤防上）にも集落が確認されたことは、今後の弥生時代の集落研究に新たな問題を投げかけたといえよう。

櫛描文系土器（岩鼻式）を出土した遺跡は、都幾川左岸の附川遺跡、雉子山遺跡がある。吉ヶ谷式期の集落は本遺跡を始め、根平遺跡、駒堀遺跡、高坂三番町遺跡や諏訪山古墳群29号墳・33号墳からも出土している。特に、高坂三番町遺跡からは吉ヶ谷期の住居跡が數十軒発見されたという。また、沖積

地に位置する錢塚・城敷遺跡、反町遺跡からも吉ヶ谷式土器を伴う弥生時代終末～古墳時代初頭頃の集落が調査され、高坂台地周辺は「弥生銀座」とも形容すべき、県内屈指の弥生時代集落の稠密分布地域であることが次第に明らかになりつつある。

古墳時代に至っても高坂台地周辺には多数の遺跡が営まれた。代正寺遺跡からは古墳時代前期の集落と方形周溝墓、大西遺跡から古墳時代前期～中期の集落、下寺前遺跡からは古墳時代前期～後期の集落が検出されている。沖積地にある錢塚・城敷遺跡、反町遺跡からも古墳時代前期～後期の大規模な集落が発見されており、台地上よりもむしろ稠密な遺構の存在が想定される。

これらの遺跡は奈良・平安時代においても継続して営まれる場合が多い。高坂台地上には大門遺跡で該期の集落が調査されているが、台地上には今のところ大規模な集落が展開している様相は見られない。古墳時代と同様に、錢塚遺跡など沖積地に大規模な集落が営まれている可能性が高く、沖積地の動向に注意する必要があろう。

高坂台地周辺は中世において小代氏の本拠地として知られ、推定小代氏館跡が存在する。隣接する代正寺遺跡からは中世の溝跡や柵列が調査され、小代氏館に関連する「牧」に比定する説も提出されている（江原1996）。台地北縁の都幾川を臨む地には「高坂氏館跡」があり、土塁と空堀が残っている。台地の崖縁を利用した東西170m、南北230mの方形（菱形）館で、高坂刑部の居館と伝えている。高坂氏館跡の南に位置する高坂式番町遺跡では戸井跡や溝跡が調査された。青磁画花文碗や蓮弁文碗、常滑三筋壺、てづくね皿など13～14世紀にかけての遺物が検出され、館跡や中世集落が広範囲に形成された可能性が指摘されている（江原2005）。

このように高坂台地周辺には弥生時代以降、奈良・平安時代、中世に至るまで多数の遺跡が形成されている。台地上にある諏訪山古墳群や高坂古墳群のみ

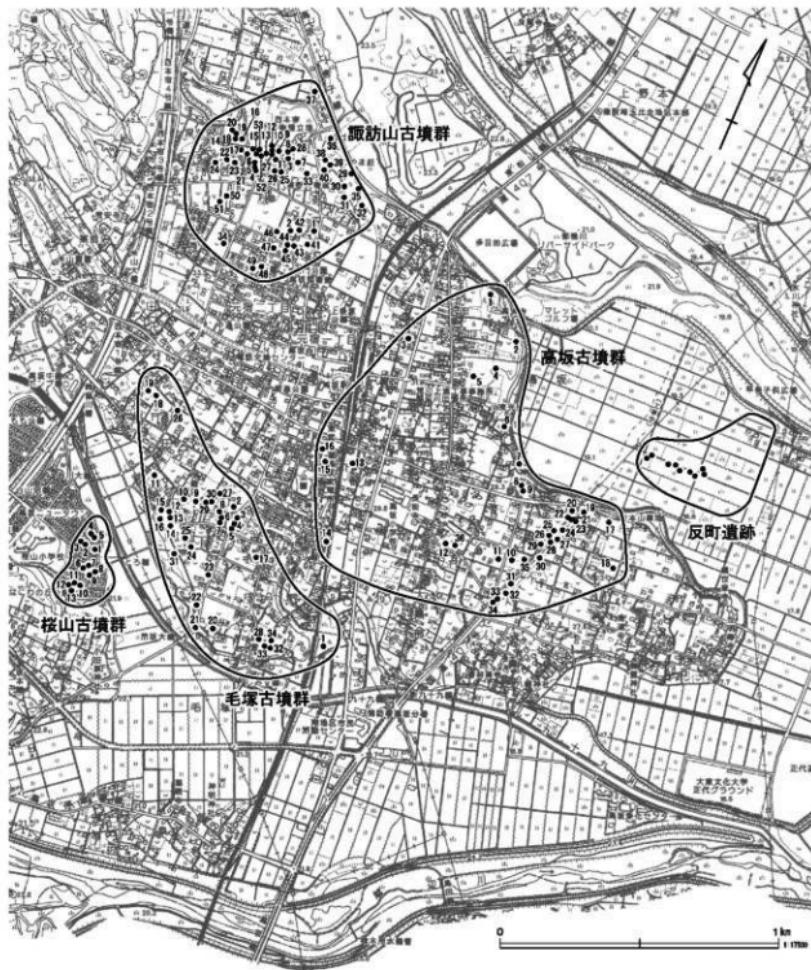


1 杉の木遺跡 2 大西遺跡 3 下守衛塚跡 4 代正寺遺跡 5 小代氏經跡 6 東形遺跡 7 高坂~番町遺跡 8 高坂武番町遺跡 9 高坂三番町遺跡 10 高坂氏經跡 11 大門遺跡 12 月並遺跡 13 銀家遺跡 14 城敷遺跡 15 反町遺跡 16 舞台遺跡 17 桜山空庭跡 18 田木山遺跡 19 大塚原遺跡 20 緑川遺跡 21 立野遺跡 22 痢場遺跡 23 岩の上遺跡 24 妙子山遺跡 25 附川遺跡 26 畠田遺跡 27 五領遺跡 28 山王墓遺跡 29 四熊遺跡 30 斯木村鬼塚古墳 31 古前道遺跡 32 下下道遺跡 33 下山遺跡 34 古渡根岸屋遺跡 35 天狗川遺跡 36 横岸孫背神社古墳 37 正近船形遺跡 38 正直玉作遺跡 39 おくま山古墳 40 姦清水遺跡 41 天神山古墳 42 横琴塚古墳 43 折扇 17号墳 44 上松木遺跡 45 観音寺遺跡 46 若森遺跡 47 中原遺跡 48 八幡遺跡 49 吉見百穴横穴墓群 50 松山城跡 51 西吉見桑里遺跡 52 大行山遺跡 53 久米田古墳群 54 久米田遺跡 55 かぶと原古墳 56 和佐越塚古墳群 57 山の越古墳 58 三ノ森地遺跡 59 宝地遺跡 60 木曾免遺跡 61 附島遺跡 62 南塙塚古墳 63 勝山古墳 64 勝山古墳 65 勝山古墳 66 勝山古墳 67 勝山古墳遺跡

第2図 杉の木遺跡の位置と周辺の遺跡

ならず最近では沖積地にも古墳群の存在が知られており（反町遺跡）、その生活の舞台として、またその生産基盤として、さらには墓域としても土地利用されていたことが判明した。都幾川・越辺川な

どの河川とそれらによってもたらされた肥沃な冲積土壌の存在とその積極的な開発によって、長期に亘って遺跡が営まれ、繁栄したと考えることができる。



第3図 高坂台地周辺の古墳分布図

3. 高坂台地周辺の古墳群

次に、杉の木遺跡に包括される毛塚古墳群を中心として、高坂台地周辺の古墳群について概観してみたい（第3図）。

毛塚古墳群は、九十九川を望む台地南縁に展開する30基以上の円墳で構成された古墳群である。毛塚川によって開折された馬の背状の台地頂部に立地する毛塚1号墳をはじめ、直径約23mの毛塚2号墳、墳頂に浅間様を祀る毛塚20号墳などが比較的規模の大きなものである。今までに調査の実施された古墳の数は少ないが、杉の木遺跡の調査の進展に伴い、古墳跡の発見が相次いでいる。

平成8年（1996）に直径42mの円墳、毛塚27号墳が調査され、周溝から円筒埴輪片、形象埴輪片（人物・馬）、土師器、須恵器などが出土し、6世紀後半の築造と推定されている。また、平成11年（1999）の第3次調査でも毛塚28号墳が調査されている。なお、今回の第4次調査でも新たに3基の古墳跡の所在が確認されるとともに、高坂台地周辺では初めて埴輪棺が検出された。

高坂古墳群は、高坂台地中央から東部にかけて広く分布する古墳群である。都幾川を望む台地東縁部北端に位置する前方後円墳の高済寺古墳（高坂1号墳）は、高坂氏館跡の土壘として二次的に利用され、墳形や規模などに不明な点が多い。築造時期は明らかではないが、後円部西側から採集された円筒埴輪（第4図）から6世紀前半代に築造された可能性が高い。現存する古墳では、高坂神社古墳（高坂9号墳：35m）、払田神社古墳（高坂13号墳：30m）などが大型の円墳である。

このほか国道407号線バイパスの建設に伴って調査された代正寺遺跡では16基の古墳跡（高坂19～34号墳）が調査され、5世紀後半から6世紀前半に營まれた古式群集墳の実態が明らかにされた。また、周辺の小代氏館跡、高坂武番町遺跡、高坂三番町遺跡などでも古墳跡が発見されており、台地上一帯に濃密な分布を示していることが予想される。なお、



第4図 高済寺古墳出土円筒埴輪

台地内陸部の下寺前遺跡では7世紀代の切石積み横穴式石室をもつ古墳跡が2基検出されている。

諏訪山古墳群は、都幾川を望む台地北縁に位置する古墳群で、総数53基を数える。全長45mの4世紀前半の前方後方墳である諏訪山29号墳の築造を契機に、全長68mの前方後円墳、諏訪山古墳（諏訪山35号墳）が4世紀後半に築造される。5世紀前半代の首長墳の存在が明確でなく、大塚古墳（高坂37号墳）などがその候補にあげられるが、系譜が一時断絶してしまう可能性も考えられる。再び、5世紀後半には短甲を出土したと伝えられる円墳の諏訪山33号墳が築造され、Bc種ヨコハケの円筒埴輪を出土している。

5世紀後半になると中小の円墳からなる古式群集墳の築造が、周辺の古墳群とともに一齊に開始される。青銅製鈴付腕輪を出土した諏訪山1号墳、2基の粘土櫛の検出された諏訪山2号墳などが營まれた。また、前方後円墳の可能性のある富士浅間神社古墳（諏訪山36号墳）も採集された円筒埴輪からこの時期の築造と考えられる。やがて6世紀後半には無袖型横穴式石室を採用する諏訪山4号墳が築造され、埴輪が消滅した7世紀前半には諏訪山3号墳が築造されている。

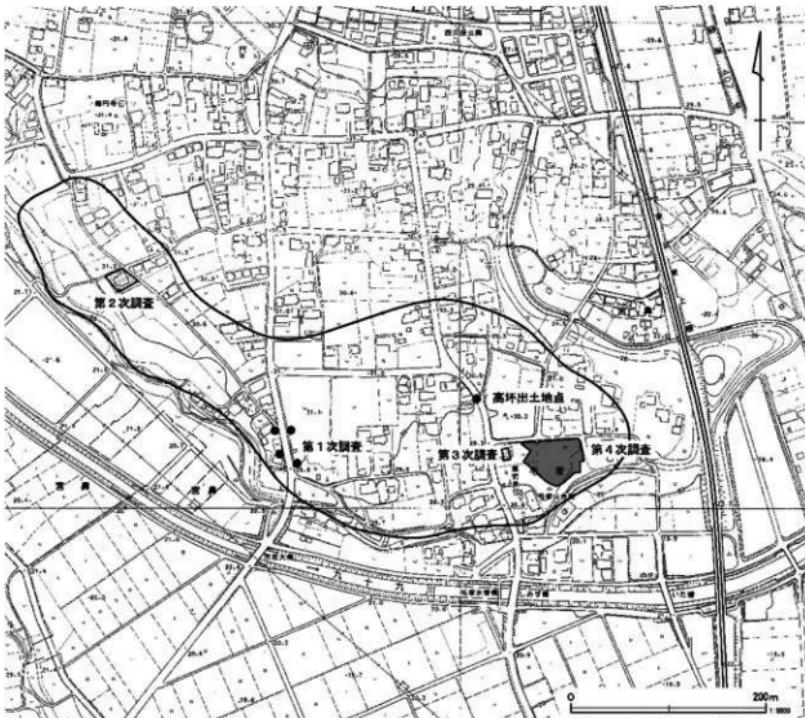
さらに、最近の調査によって都幾川の形成した沖積低地に所在する反町遺跡でも、前方後円墳を含む古式群集墳の実態が明らかにされつつあり、今後の調査の進展が期待される。

III 遺跡の概要

杉の木遺跡が最初に注目されたのは、昭和35年（1960）5月、道路改良工事中に焼土や炭化物などと一緒に弥生土器が発見されたことに始まる。

この第1次調査は、路面および側溝にかかる限られた範囲であったが、弥生時代後期の住居跡4軒が発見され（小峰1963）、このうち焼失住居と考えられる1号住居跡から吉ヶ谷式の壺形土器（第6図1）が出土した。口縁部の下位に、いかにも耳のような小孔のある突起が左右につくことから「耳付土器」とも呼ばれ、杉の木遺跡を代表する土器として学史的にも著名である（註1）。

その後、昭和62年（1987）には、宅地造成に伴い第2次調査が東松山市教育委員会によって実施され、古墳時代前期の住居跡3軒、古墳跡（毛塚31号墳）1基、溝跡2条、柱穴群などが調査された（埼玉県教育委員会1987）。また、平成11年（1999）には農業用倉庫建設に伴い第3次調査が、同じく市教育委員会によって実施された。調査の結果、弥生時代後期の住居跡2軒、古墳の周溝跡（毛塚28号墳）1基、土墳2基が検出され、弥生時代後期を中心とする集落跡と古墳時代後期の古墳群からなる複合的な遺跡であることが明らかにされた（宮島ほか2003）。



第5図 杉の木遺跡周辺の地形と調査地点

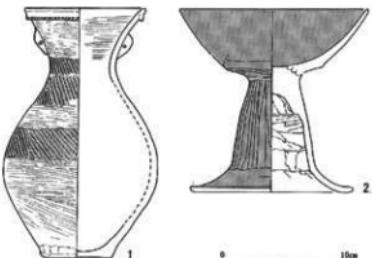
こうした調査成果をふまえながら今回の第4次調査が実施された。検出された遺構は、弥生時代後期の住居跡10軒、炉跡2基、土壙3基、溝跡1条、古墳時代前期の方形周溝墓1基、古墳時代後期の古墳跡（毛塚32・33・34号墳）3基、埴輪棺1基、性格不明遺構1基、近世以降の溝跡9条、室跡3基、集石土壙1基、土壙57基、ピット78基である。

住居跡は、弥生時代後期前半の岩鼻式土器を中心とする第8号住居跡のほかは、大半が後期後半の吉ヶ谷式土器を出土している。平面形態は長方形、隅丸長方形、隅丸方形など多様な方角を示し、4本の主柱穴と複数の地床炉をもつ。遺物は住居の壁際から出土するものが多く、壺、無縫壺、壺、高坏、鉢、甑などのほかに、土製勾玉、紡錘車、石器などが出土している。

古墳跡は、調査区のほぼ中央に第32号墳と第33号墳の2基が並列し、さらに第33号墳の北側に隣接して第34号墳が検出された。第32号墳は墳丘径約20mの比較的大型の円墳で、周溝の南側の一部を掘り残して陸橋部が設けられていた。墳丘部は後世の削平を受け滅失していたが、北西周溝からは墳丘から落ち込んだ状態で円筒埴輪や朝顔形埴輪がまとまって出土した。また、周溝底面の2箇所から土師器坏が伏せられた状態で出土している。さらに、北周溝の外側壁面に横穴を掘り込み、その内部に4本の円筒埴輪を用いた埴輪棺が埋設されていた。埴輪の破片を用いて、両端部や透孔・合わせ目が入念に塞がれていた。第33号墳は第32号墳よりも一回り小型の円墳で、埴輪はほとんど出土しなかったが、周溝から土師器坏が出土している。

これらの古墳の築造年代は、出土した土器や埴輪などの特徴から6世紀前半から後半を中心とするものと考えられる。遺跡西方約700mには、須恵器や埴輪を生産した桜山窯跡群が位置していることから、埴輪の需給関係の解明が今後の大きな課題である。

近世以降の遺構としては、古墳と重複する溝跡のほか、調査区東半部を中心に室跡、集石土壙、土壙、



第6図 過去の調査における出土遺物

ピット跡などが検出された。このうち第1号溝跡と第10号溝跡には拳大から人頭大の円碟が多量に投棄されており、土地の境界を明確にすることを意図した区画溝と考えられる。また礫に混在して、板碑、石臼、砥石、陶磁器、錢貨、貝殻が出土しているほか、小型の銅鏡製仏像など宗教関連の遺物もみられ注目される。今回の調査地点の東には、江戸時代の毛塚村におかれた旗本横田氏の地役代官坂本家の屋敷地が隣接していることから、この屋敷地との有機的な関連をもった遺構群の一部と想定される。

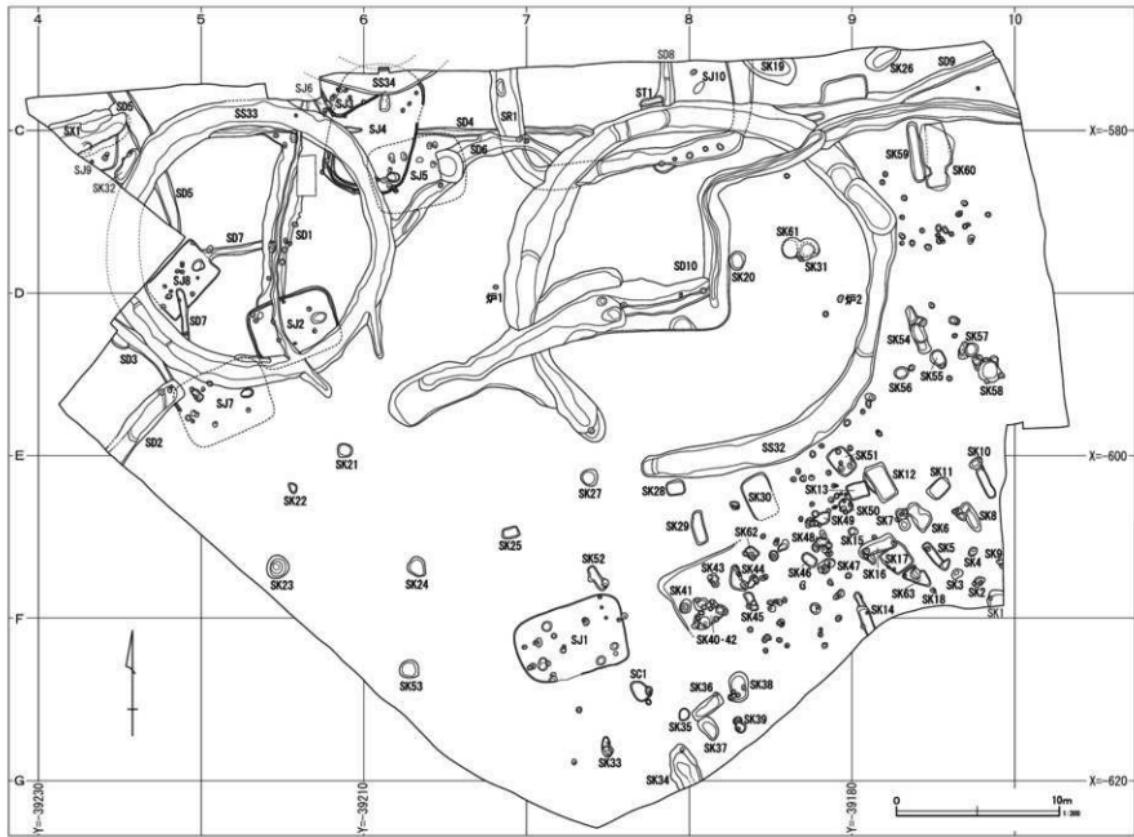
なお、発掘資料ではないが第4次調査地点の北側で、昭和30年頃、芋穴を掘った際に出土した土師器高坏（第6図2）が大切に保管されているので紹介しておきたい。

高坏は坏部の大半を欠損しているが脚部はほぼ完存し、外面および坏部内面が赤彩される。脚部外面は光沢のある幅広のナデを丁寧に施す。脚部の形態などに和泉的な要素を残しており、鬼高I式でも古い段階に位置づけられる（註2）。

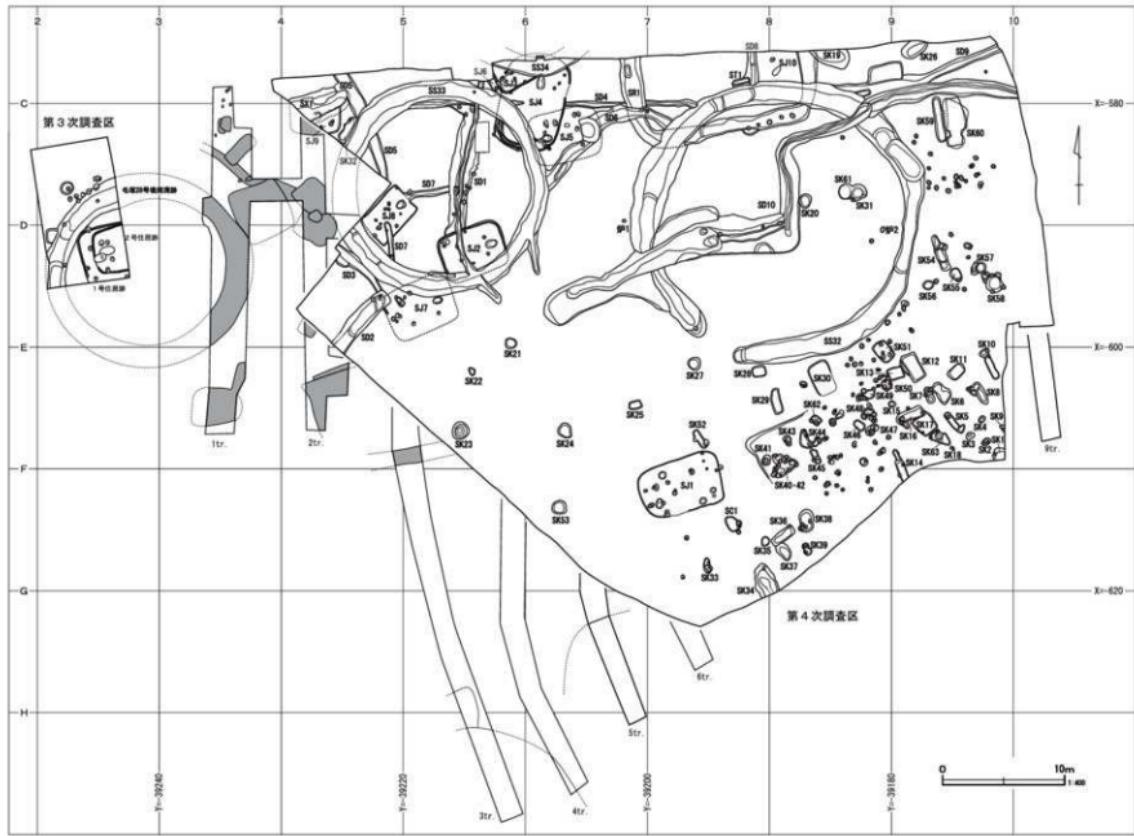
註

- (1) 第6図1の壺に関しては、従来、「新編埼玉県史資料編2」など口唇部上端にキザミのある図が掲げられている。今回再実測にあたり観察した結果、キザミはないものと判断した。再実測に関しては東松山市教育委員会に便宜を図っていただいた。
- (2) 関口唯男氏のご高配により紹介させていただいた。

第7図 杉の木遺跡第4次調査区全測図



第8図 杉木遺跡第3・4次調査区全測図



IV 遺構と遺物

1. 繩文時代の調査

今回の調査では、縄文時代の遺構は確認されなかったが、毛塚 32 号墳の周溝などを中心とする後世の遺構から、繩文土器や石器などが出土した。

(1) 縄文土器 (第 9・10 図)

遺跡の包含層からは、縄文時代早期初頭から後期初頭にかけての土器群が出土している。

第 I 群土器

早期の土器群を一括する。

第 I 類 (1 ~ 7)

燃系系土器群を一括する。1 は若干肥厚する口縁部が外傾する器形で、口唇部に単節 L R 繩文を一段施文し、口縁部文様帶に L R 繩文を縦位施文した後、屈曲部に同原体を縁取り状に押捺する。井草 I 式に比定される。

2 は角頭状の口唇部がやや外傾気味に立ち、口唇外端部が面取り状の若干の段階部を形成する。口唇上には単節 R L を一段、口唇外端部には若干斜行する R L を一段、胴部には縦走の R L 繩文を施文する。井草 II 式から夏島式古段階にかけての位置づけが与えられる。

3、4 は緻密な胎土に石英・長石類を多く含み、細かな R L 繩文を施文することから、井草式土器の胴部に比定される。

5 ~ 7 は角頭状の口唇部が内湾気味に開く器形を呈し、口縁部に 1 条の沈線をめぐらす、燃系系土器群終末期の東山式に比定される土器群である。赤褐色から暗赤褐色を呈し、石英・長石類を多く含む。第 2 類 (8、9)

山形押型土器を一括する。8 は胴部破片で、縦位に密接する山形文を施文する。9 は外反する口縁部付近の破片で、口縁裏面に横位の山形文を施文する。両者とも灰白色を呈し、砂粒をやや多く含んでおり、判然としないが埴沢式もしくは普門寺式に比定されよう。5 ~ 7 の東山式に伴う可能性が高い。

第 3 類 (10 ~ 16)

早期後半の条痕文系土器群を一括する。いずれも貝殻条痕文を施文するもので、内外両面に明瞭な条痕文を施文するものは少なく、裏面に条痕ではなく擦痕状の整形を施すのが特徴的である。含まれる纖維は少なく、全体的に赤褐色を呈することから、条痕文系土器群前半期に位置づけられ、野島式～鶴ガ島台式に位置づけられる可能性が高い。

第 II 群土器

前期の土器群を一括する。

第 I 類 (17 ~ 40)

纖維を含む前期中葉の土器群で、黒浜式及びそれに並行する土器群を一括する。

17 ~ 24 は爪形文で主体的にモチーフを描く土器群である。17 は緩い波状線が大きく開く深鉢形土器の口縁部大型破片で、口縁の波状に沿って爪形文と平行沈線文を交互に施文するものである。胴部は爪形文のみで区画し、地文は無文である。18、22 が同一個体で、有尾式の影響を受けた黒浜式と認識されるものである。

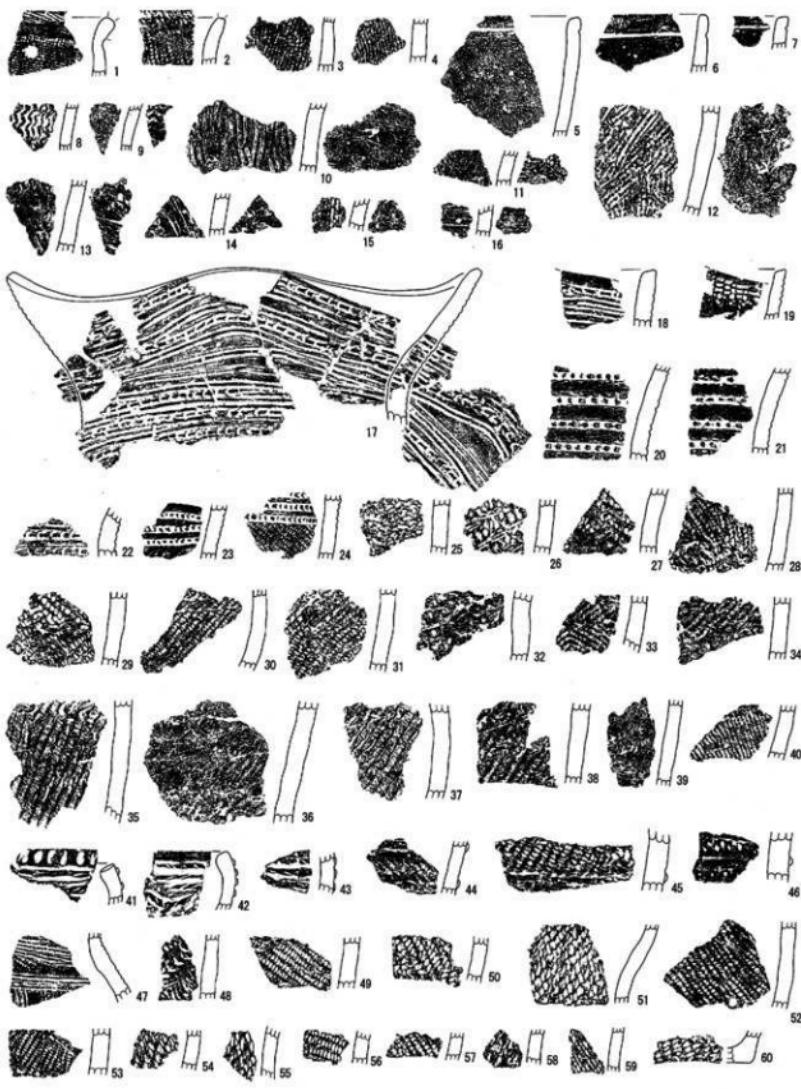
19 は緩い波状線を呈し、櫛歯状工具による列点状刺突文を口縁部に施文するもので、有尾式に比定することができる。

20・21・23・24 は爪形文を横位多段施文する胴部破片で、黒浜式に比定される。24 は胴部地文に単節 R L 繩文を横位施文する。

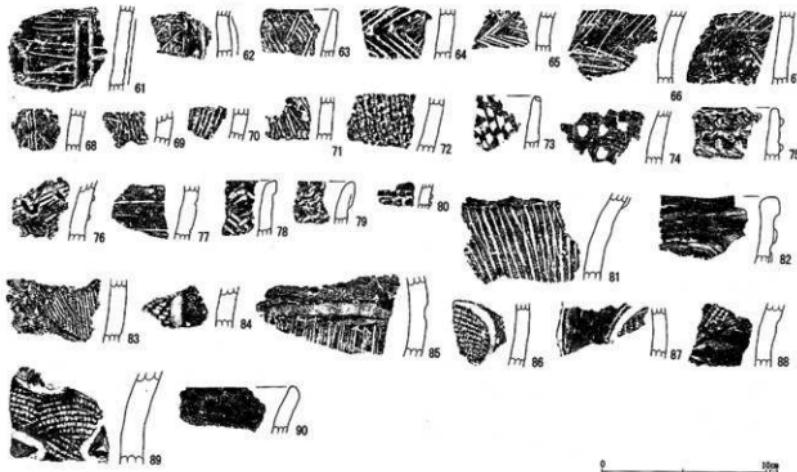
25 ~ 40 は地文繩文のみ施文する胴部破片で、原体は 25・27 が単節 R L、26 が R L + 2 r の第 2 種付加条繩文、28・29 は 2 節の非結束羽状繩文、30・31 が単節 L R、30 ~ 32 は単節 L R、33 は 1 節の非結束羽状繩文、34 ~ 39 は無節 L、40 が無節 R である。いずれも黒浜式に比定される。

第 2 類 (41 ~ 60)

前期後半の無纖維土器である諸磯 b 式土器群を一



第9図 調査区出土繩文土器（1）



第10図 調査区出土縄文土器（2）

括する。

41～46は浮線文系土器群で、41・42が口縁部破片、他は胴部破片である。41～43は浮線上に刻みを施すもので、44～46は縄文を施す。41の口唇部には、押圧状の刻みを施し、44・46は地文に単節R L、45はL Rを施す。諸磯b 2式に比定される土器群である。

47は靴先状を呈する、諸磯b 3式土器の口縁部破片で、条線文で区画文と渦巻文を施し、地文に単節R Lを施す。

48は半截竹管の刺突文状の爪形文と無節縄文を併施する胴部破片で、浮島式系の要素と思われるが、時期不詳である。胎土からは、前期末の可能性もある。

49～60は縄文のみ施す破片で、原体は49・50・52・56・57・60が単節R L、51・53～55・58がL R、59が無節Rで、60は底部破片である。いずれも諸磯b式に比定される土器群である。

第3類（61～72）

諸磯c式に比定される土器群である。61・62は貼

付文系土器群で、61は横位平行沈線地文上に、縦位の棒状貼付文を垂下する。62は頸部の文様帶部分で、半截竹管の格子目沈線地文上に、縦位の貼付文を施す。

63～71は平行沈線もしくは条線文地文の土器群で、63は口縁部破片である。格子目沈線文、横位羽状沈線文、縦位区画沈線文などを施す。

72は結節浮線文系土器で、1点のみの出土である。
第4類（73～80）

前期終末の十三菩提式及びそれに平行する土器群を一括する。73・74は器面に刺突文を施すもので、73は角状で連続押引状の刺突文を、74は三角状の刺突文をランダムに施す。

75・76は横位の波状浮線文を施すもので、75は摘み整形で小波状を呈するやや太めの隆帯状浮線文を、口縁部に横位施し、地文に細かいL Rを単節施す。76は斜行平行沈線地文上に、無加飾の波状浮線を貼付するもので、胴部の地文には単節R Lを施す。両者とも大木式の要素をもつもので、76は諸磯c式に平行する可能性もある。

77は胸部に間隔を開けた横位沈線を施文するもので、明確にし得ないが、胎土、整形、色調から前期終末の土器群に類似する様相がうかがえ、この時期に比定したものである。

80は小破片であるが、結節浮線文を施文するもので、諸磯c式とは異なる。

第III群土器

中・後期の土器群を一括する。

第1類 (81～88)

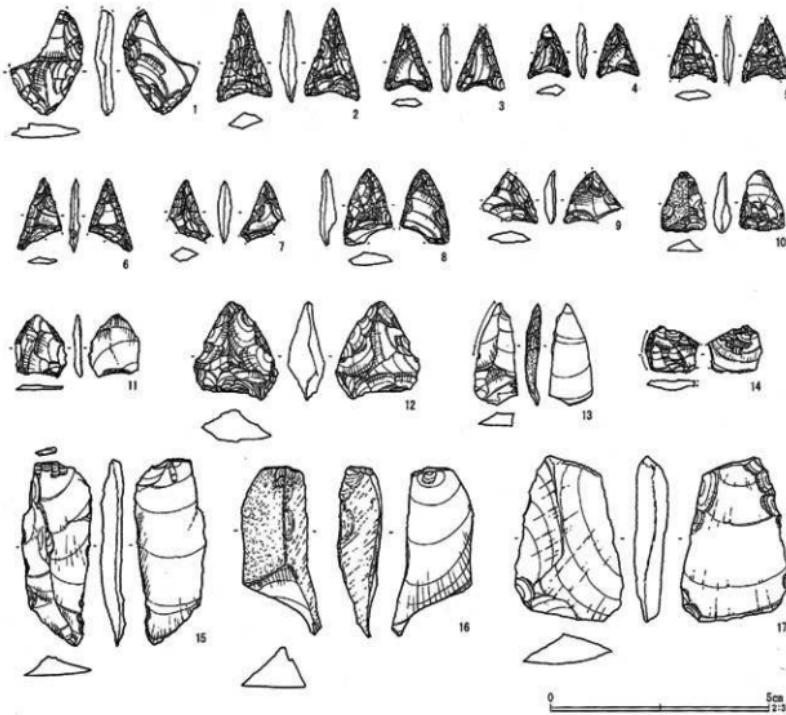
中期後半加曾利E式土器群を一括する。81は隆帯で頸部を区画する加曾利E I式のキャリバー系土器で、胸部地文に燃糸Rを施文する。

82～85は加曾利E III式土器で、82は口縁部文様帯をもつキャリバー系土器である。口縁部の内湾が緩く、低隆帶で区画を施す。84は磨消懸垂文を垂下する胸部破片で、地文に単節LRを施文する。

83は連弧文系土器の胸部破片で、2本沈線間を磨り消す無文帯で連弧文を描き、地文に条線文を施文する。

85は口縁部に無文帯を区画し、胸部に条線を施文する浅鉢土器で、加曾利E III式に比定される。

86～88は加曾利E IV式土器で、沈線の曲線的磨消繩文区画内に、網文を充填施文するものである。原体は全て単節LRである。



第11図 洪積層出土石器(1)

89は沈線の磨消繩文によるJ字もしくは円形モチーフ内に、単節L R繩文を充填施文するもので、後期初頭の称名寺式に比定されよう。

90は頸部で括れ、無文口縁部が開く深鉢土器の口縁部破片で、後期前葉に比定されるものと思われる。

(2) 石器 (第11・12図)

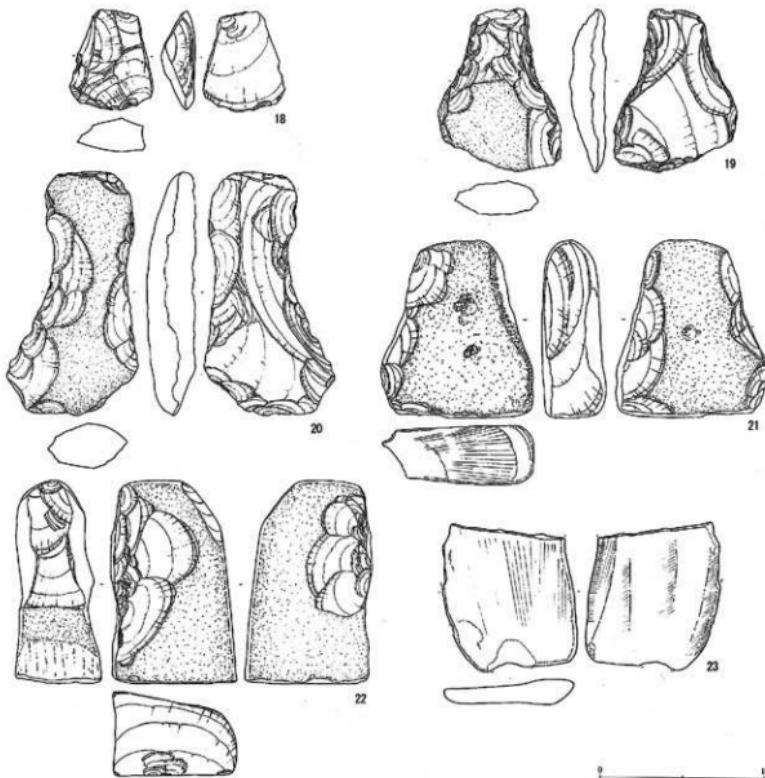
尖頭器 (1)

裏面に素材剥片の主要剥離面を残し、周縁に調整加工が施されている。正面は素材剥片と90°異なる方向からの剥離面がみられる。上位方向からの衝撃

によって上半部を大きく欠損している。

石鎌 (2~12)

石鎌が比較的まとまって出土している。1~7は基部の抉りが浅く、鎌身が二等辺三角形である。3~5は先端に使用によると思われる衝撃剥離痕が観察される。6・7は脚部を欠損している。8は下半部を欠損するが、裏面右基部が一部観察できることから、石鎌として分類した。9は脚部及び先端部を欠損しており、実測図の置き方に躊躇を覚えるが、幅広で基部の抉りの浅い形状に復元して考えた。



第12図 調査区出土石器 (2)

10・11は調整加工が部分的であるが、先端が尖る形状から平基の一群と考えられる。12は器厚があり調整加工が粗雑であることから未製品と思われる。

加工痕のある剥片 (13・14)

13はいわゆるチョコレート頁岩を素材とし、右側縁先端に調整加工が施されている。このためナイフ形石器の可能性も考えたが、基部に加工が施されていない点や全体の作りから、縄文時代の石器と判断した。左側縁に使用によると思われる微細な剥離痕が見られる。14は小形横広剥片の一部に調整加工が施されており、削器的な使われ方をされたものと思われる。

剥片 (15～18)

縦長の剥片が数点出土している。15はチャート製で正面を構成する面の剥離方向が主要剥離面と同じである。16は黒曜石製で正面に自然面を残している。17・18はホルンフェルス製で、一部二次加工が施されており、利器として利用されたものと思われる。

打製石斧 (19・20)

19は正面に自然面、裏面に分割面を大きく残し、周縁から剥離加工が施されている。基部の正面は加工が入念に施されており、形状は「コ」の字を呈している。刃部は外湾しながら幅広になっている。20

第1表 調査区出土石器観察表 (第11・12図)

番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	出土位置
1	尖頭器	3.2	2.3	0.6	3.2	チャート	SS32
2	石鎌	2.9	1.7	0.5	1.5	チャート	SS32
3	石鎌	2.0	1.4	0.3	0.8	チャート	C-66
4	石鎌	1.7	1.5	0.3	0.6	赤玉	D-4G
5	石鎌	2.0	1.4	0.3	0.7	黒曜石	SS32
6	石鎌	2.2	1.2	0.3	0.6	チャート	SS32
7	石鎌	1.8	1.2	0.4	0.7	チャート	SS32
8	石鎌	2.3	1.5	0.5	1.3	赤玉	SS32
9	石鎌	1.8	1.7	0.4	0.8	チャート	SS32
10	石鎌	1.9	1.4	0.5	0.9	黒曜石	SS32
11	石鎌	1.9	1.6	0.2	0.9	チャート	SS32
12	石鎌	3.0	2.6	1.1	5.6	チャート	SS33
13	加工痕のある剥片	3.1	1.3	0.4	1.7	頁岩	SK20
14	加工痕のある剥片	1.4	1.6	0.3	0.8	赤玉	SS32
15	剥片	5.6	2.2	0.7	7.6	チャート	SS33
16	剥片	5.1	2.4	1.3	10.9	黒曜石	SS32
17	剥片	5.1	3.3	1.0	19.0	ホルンフェルス	SS33
18	剥片	6.1	5.0	2.0	64.4	ホルンフェルス	SS33
19	打製石斧	10.0	7.5	2.2	155.4	ホルンフェルス	SD1
20	打製石斧	15.0	8.0	3.0	348.5	ホルンフェルス	SS33
21	スタンプ形石器	10.9	9.3	3.9	579.8	閃緑岩	SS33
22	スタンプ形石器	12.5	7.7	5.3	768.0	頁岩	SS33
23	砥石	9.1	8.2	2.0	125.7	安山岩	SD1

は正面に自然面、裏面に分割面を残し、周縁からの剥離加工が両面に施されている。基部に浅い抉りがあり、刃部は円刃を呈している。

スタンプ形石器 (21・22)

21は両側面が剥離加工と敲打調整によって整えられている。底面は摩耗痕がみられる。22は亜角柱状の礫を分割したもので、調整加工は左側縁からのみ施されている。

砥石 (23)

23は上半部を欠損する。摩耗は裏面の側縁部に集中しており、使用方法に関わるものと思われる。

2. 弥生時代後期から古墳時代初頭の調査

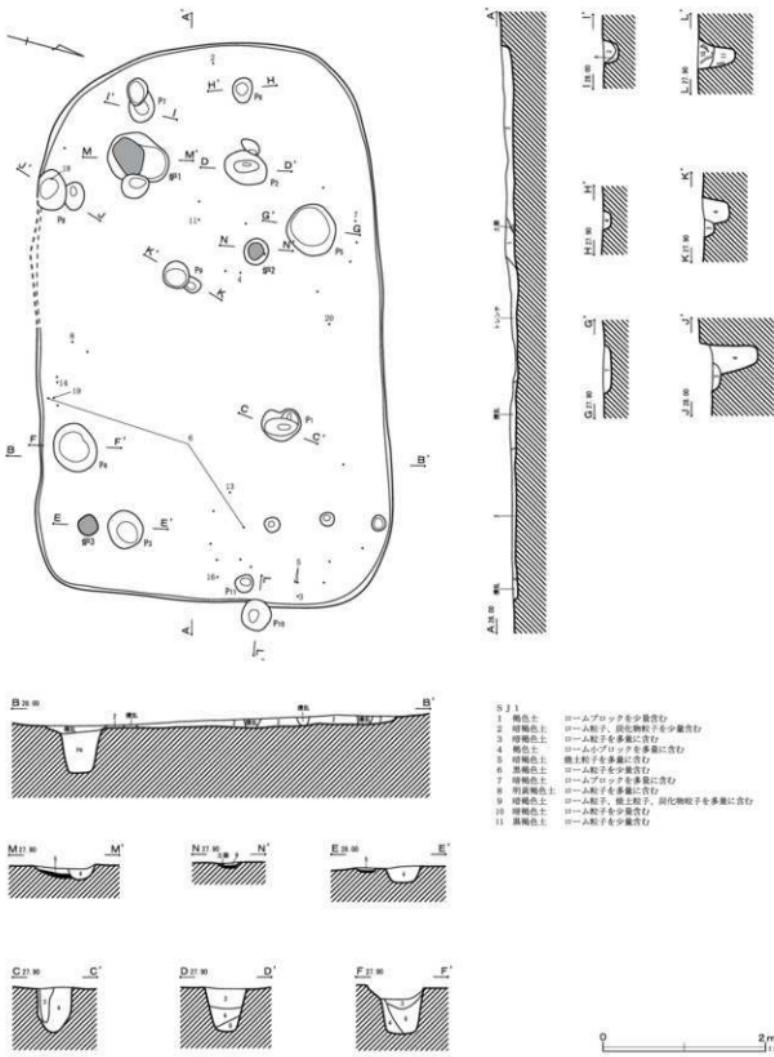
(1) 住居跡

第1号住居跡 (第13図)

調査区中央南側のE-7、F-6・7グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸長6.80m、短軸長4.38m、深さは0.08mである。主軸方位はN-75°-Eを指す。

床面は起伏があり一定しないが、全体によく踏み

固められていた。また床面レベルは、地形に沿い南に向かって若干低くなっている。炉跡は3箇所検出された。規模から第1号炉跡が主炉、第2・3号炉跡が副炉と考えられる。第1号炉跡は楕円形の地床炉で、規模は長径0.76m、短径0.59m、深さ0.08mである。底面は被熱していた。第2号炉跡は円形、規模はそれぞれ0.32×0.31×0.04m。第3号炉跡



第13図 第1号住居跡

は円形で規模は $0.24 \times 0.23 \times 0.04$ m である。

ピットは 11 本検出された。P 1・P 2・P 4・P 8 は配置と深さから主柱穴に相当しよう。また東壁に接する P 11 は埋土中から甕、壺、高环などの破片が出土しており、壁外貯蔵穴の可能性がある。

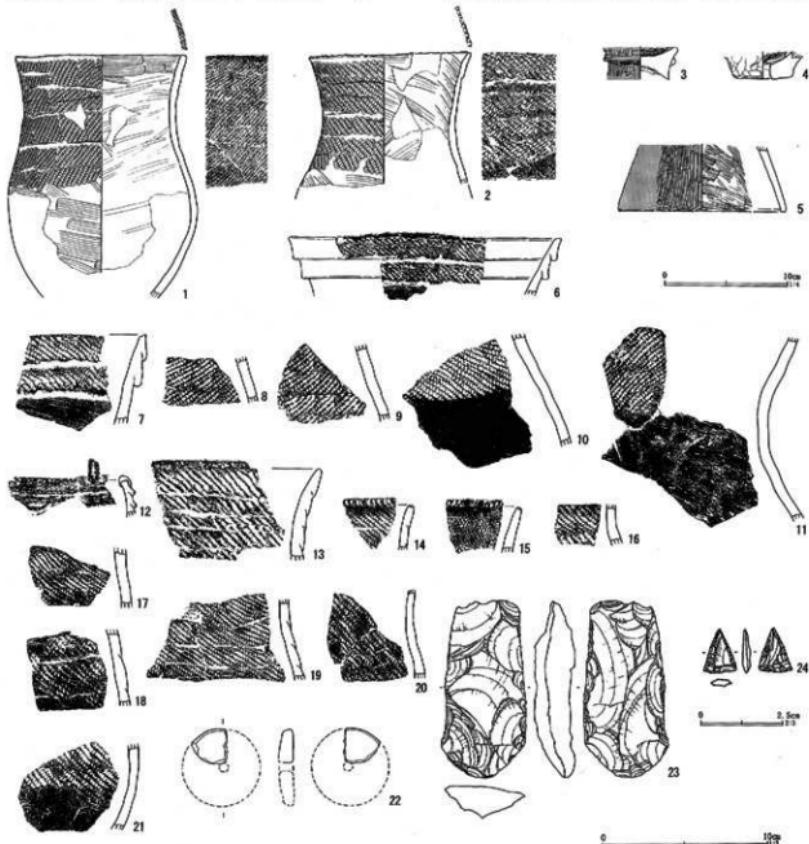
出土土器は、吉ヶ谷式の壺、甕、高环、瓶がある（第 14 図）。

壺は口縁部に輪積痕の段差を残し、その上に繩文を施文する。口唇部下端にはキザミをもたない（6・

7）。10・11 は頸部から胴部上半の破片であるが、頸部の屈曲が強く、甕との分別は容易である。

甕は、段差を残さない輪積痕上に繩文を施文するタイプが主体となる。繩文施文はほぼ輪積み痕の幅に沿うもの（13）と輪積痕とは関係なく施文するものの二者がある。口唇部は繩文施文（1）、木口状工具のキザミ（2・13）、ヘラ状工具のキザミ（14）などバラエティがある。

高环は脚部が直線的に延びるもの（3）と八の字



第 14 図 第 1 号住居跡出土遺物

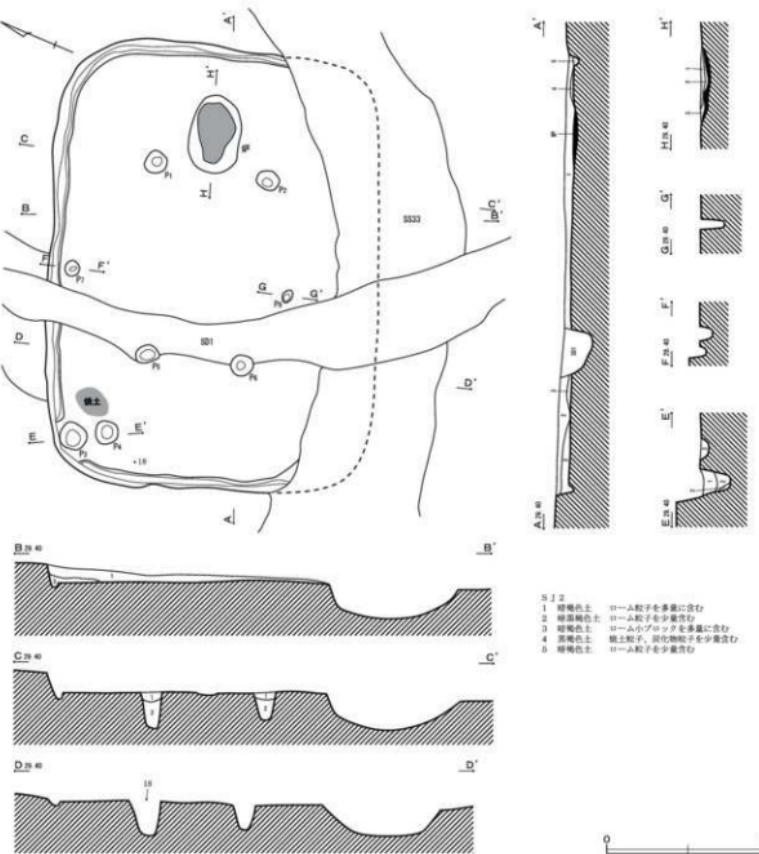
状に開く大型品（5）が認められる。

22は土製錘車の破片である。断面薄台形を呈するると考えられる。23は短冊形の打製石斧で、刃部は円刃である。長さ10.8cm、幅5.2cm、厚さ2.5cm、重さ126g。石材はホルンフェルスである。24の石鎌は平基で正三角形を呈する。素材剥片の剥離面を残し、周縁加工を施す。長さ1.3cm、幅0.95cm、厚さ0.25cm、重さ0.3g。石材はチャートである。

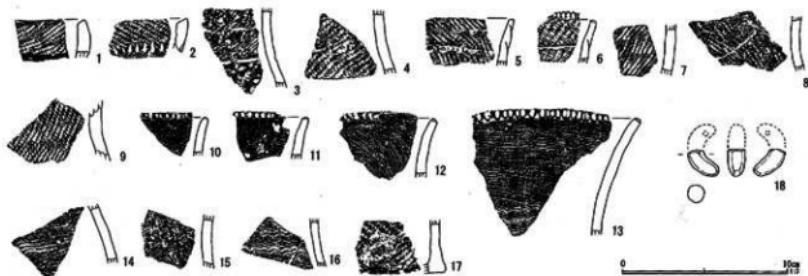
第2号住居跡（第15図）

調査区西側のC・D-5グリッドに位置し、第33号墳と第1号溝跡の搅乱を受けていた。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸長5.34m、短軸長3.60m（残存値）、床面までの深さ0.26mである。主軸方位はN-70°-Eを指す。

床面は概ね平坦で、全体に硬く踏み固められていた。炉跡は長軸ライン上の東壁に寄った位置に設け



第15図 第2号住居跡



第16図 第2号住居跡出土遺物

られていた。楕円形の地床炉で、底面は被熱している。規模は長径0.93m、短径0.62m、深さ0.11mである。そのほかに北西隅部の床面上に焼上が分布する箇所が認められたが、床面に被熱痕はなかった。ピットはP1・P2・P5・P6が主柱穴と考えられる。また北西隅部のP3は位置的に貯蔵穴と考えられる。壁溝は深さ5~10cmで、北西隅部を除きめぐっていた。

出土遺物は、西壁際の床直上から土製勾玉の破片が出土しただけで、全体に少なく、すべて破片である(第16図)。

1~9・17は吉ヶ谷式土器である。出土器種は壺・無頸壺・甕、ミニチュアである。壺は折り返し口縁の下端にキザミをもつ(2)。甕は段差のみられない輪積痕をもつものが主体である。

10~16は岩鼻式の甕である。擦痕状のハケメで器面調整をした後で櫛描文を施文する特徴がある。10~12は岩鼻式に一定量認められる無文甕であろう。また、12のように口唇部のキザミが断続的に施されるのも岩鼻式に認められる特徴である。

18は土製勾玉で、頭部を欠損する。

第3号住居跡(第17図)

調査区北端のB-5・6グリッドに位置する。第34号墳に削平され、第4・6号住居跡を切っていることが判明した。平面形は楕円(長)方形と推定される。残存規模は長軸長1.84m、短軸長1.58m、床面までの深さは0.25mである。主軸方位はN-

65°-Eを指す。

床面は概ね平坦で、全体に硬く踏み固められていた。炉跡は検出されなかった。ピットは8本検出されたが、柱穴配置は不明確である。壁溝は深さ5~10cmで、確認部分では全周していた。

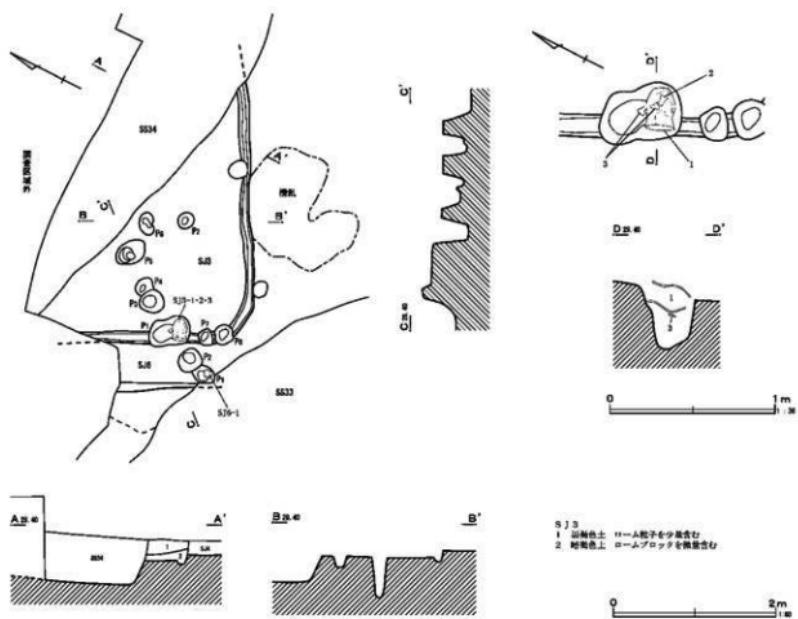
吉ヶ谷式期の住居跡で、出土器種は壺、甕がある(第18図)。壺は折り返し口縁上に網文を施し、下端にキザミがないものである(3)。甕は、輪積痕をもたないもの(1)と段差のない輪積痕をもつものが認められる。胴下半部はハケ調整だけのもの(2・8)、ハケ調整後ナデを施すもの(1)が認められる。甕(1・2)と壺(3)はP1内に落ち込むような状態で出土した。1の甕は底部を欠損しており、意図的な穿孔(破碎)の可能性もある。

9~11は岩鼻式の無文甕で、混入であろう。

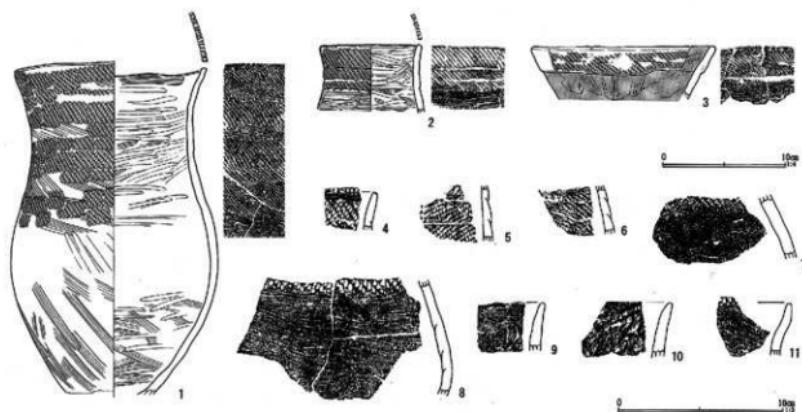
第4号住居跡(第19図)

B・C-5・6グリッドに位置する。重複する第5・6号住居跡を切り、第3号住居跡・第33・34号墳に削平されていた。平面形は楕円長方形で、規模は長軸長7.62m、短軸長5.22m(残存値)である。主軸方位はN-16°-Eを指す。

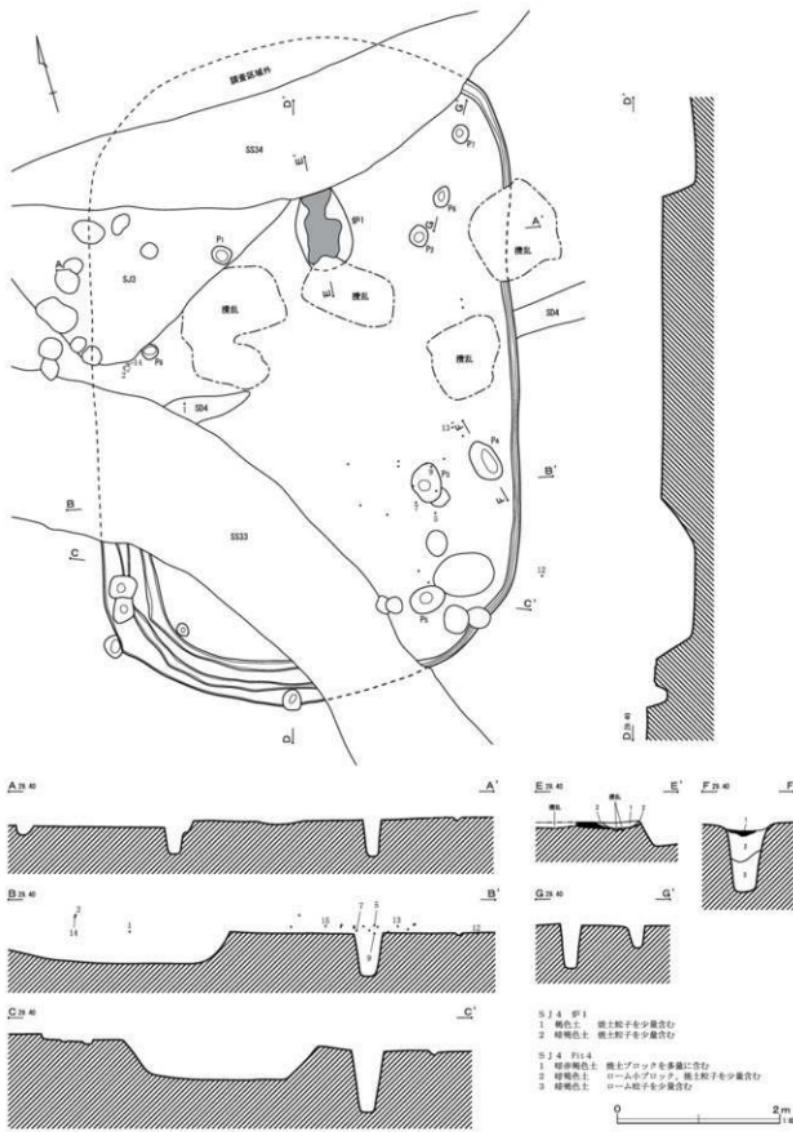
床面はほぼ露出し、後世の攪乱によって大きく壊されていた。炉跡は長軸線上の中心から北に寄った位置に設置される。楕円形の地床炉で底面は被熱していた。規模は長径0.94m、短径0.66m、深さ0.05mである。ピットは多数検出されているが、帰属は不明確である。P1~P3は主柱穴と考えてよ



第17図 第3・6号住居跡



第18図 第3号住居跡出土遺物



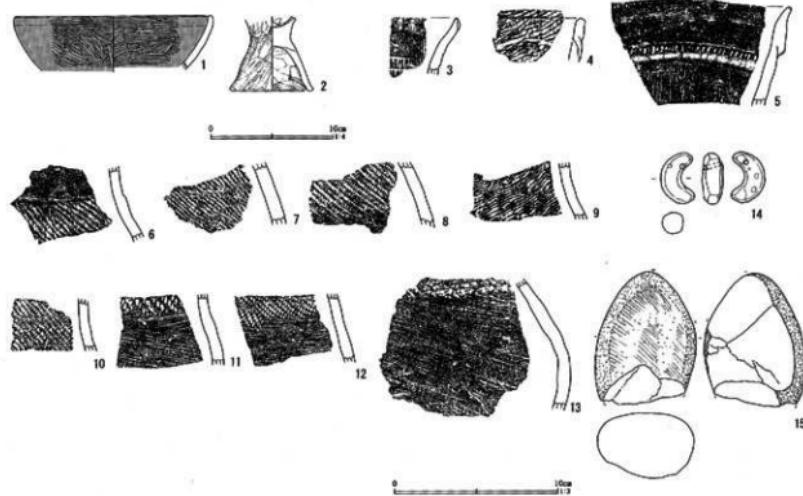
第19図 第4号住居跡

かろう。P 5 は深度もあり、主柱穴と考えても良い規模であるが、対応する位置に柱穴は検出できなかった。また、P 4 の上面には焼土が堆積し、被熱痕が認められることから、建て替に伴い埋め戻された可能性もある。壁溝は西壁部で不明瞭であったが、残存部でも深さ 5 cm と浅い。南西隅部では二重にめぐる箇所があり、前述の建て替えを示唆する。遺物は第 3 号住居跡南隅部と接する箇所から高环脚部と土製勾玉が伴出したほか、南東部の覆土中から吉ヶ谷式の壺、甕などの破片が出土した。

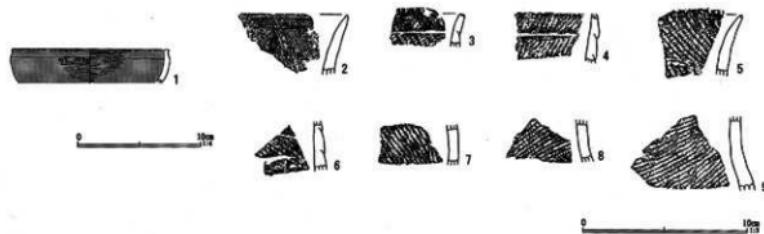
吉ヶ谷式期の住居跡で、出土器種は壺、甕、高环

がある（第 20 図）。壺は幅の広い折り返し口縁の下端にキザミを施す大型品である（5）。甕は輪積痕を残さないものが主体である。胴下半部はハケ調整のみのものが多い。高环は环部の外面を赤彩するものの（1）と、脚部の短いもの（2）が出土している。

その他、土製勾玉（14）と磨石（15）がある。土製勾玉は完形で C 字形を呈し、孔は小縫に阻まれ斜めに穿孔されている。磨石は P 4 から出土した。下半部を欠損し、正面に僅かに摩耗痕がみられる。長さ 8.1 cm、幅 6.2 cm、厚さ 4.25 cm、重さ 268.5 g。石材は砂岩である。



第 20 図 第 4 号住居跡出土遺物

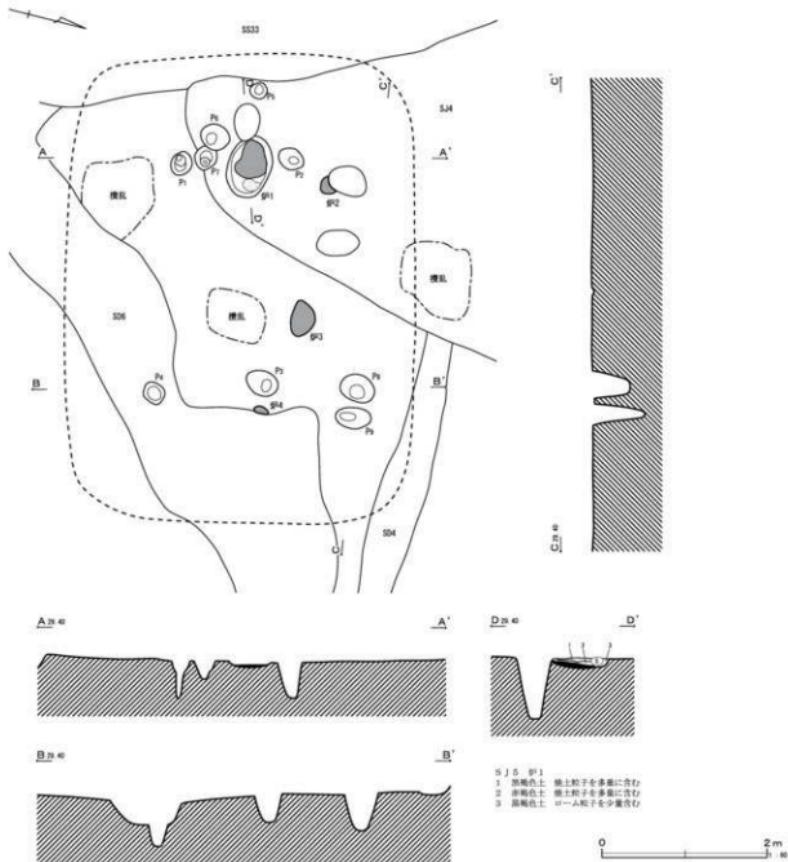


第 21 図 第 3・4 号住居跡出土遺物

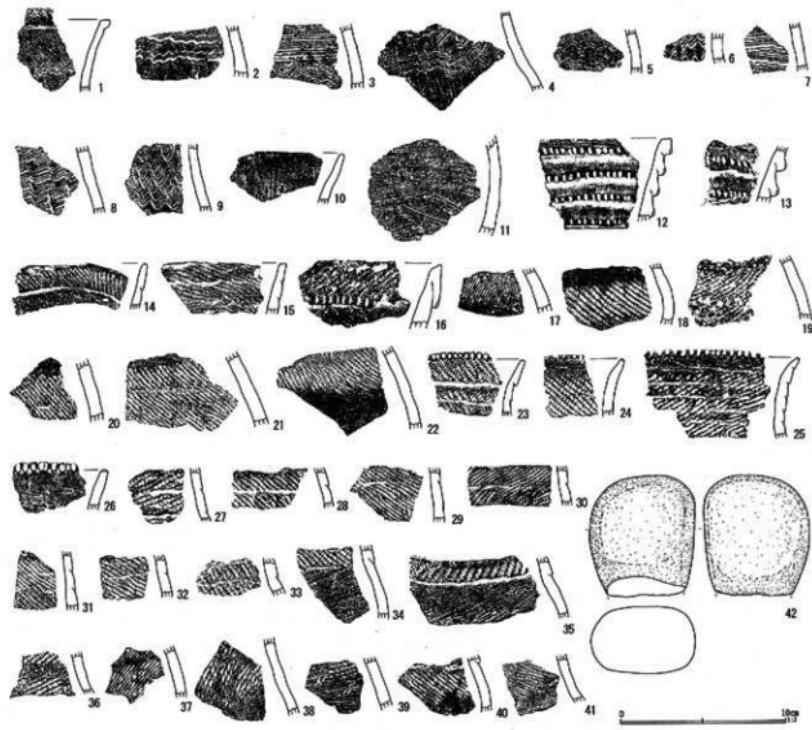
第5号住居跡（第22図）

調査区北側のC-6グリッドに位置し、第4号住居跡・第33号墳・第4・6号溝跡などに切られ、遺存状態は悪い。平面形は不明であるが、おそらく隅丸長方形となる。規模は長軸長3.98m、短軸長2.55m（残存値）であるが、 5.65×4.25 m程度の規模と推定される。主軸方位はN-79°Eを指す。

炉跡は4箇所検出された。主炉は第1号炉跡で、規模は長径0.75m、短径0.52m、深さ0.08m。底面は良く被熱しており、手前には枕石が設置されていた。枕石は炉に面した部分が被熱による赤色化が顕著であった。第2～4号炉跡としたものは明確な掘り込みをもたず、床面（底面）が被熱していただけであった。なお、炉の周辺を中心に床面が硬化し、



第22図 第5号住居跡



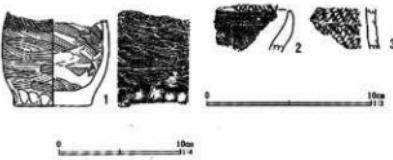
第23図 第5号住居跡出土遺物

硬く踏み固められていた。

出土土器は吉ヶ谷式を主体とし、若干の岩鼻式が混じっていた(第23図)。器種は壺、甕がある。壺は数段の段差のある輪積痕下端にキザミを施すもの(12・13)や、折り返し口線上に縞文を施し、下端にキザミを施すもの(16)や段差のない輪積痕上に縞文を施すもの(14・15)がある。

甕はやや段差のある輪積痕上を輪積痕の幅に合わせて縞文を施文する(23・28・34・35)、輪積痕に関係なく施文するもの(25・27・29~33)が認められる。胴下部はハケ調整のみが多い。1~11・26は岩鼻式土器で、混入であろう。

このほかに覆土中から下半部を欠損する磨石(42)が出土した。被熱のため赤化し、一部亀裂が入っている。長さ7.4cm、幅6.5cm、厚さ4.7cm、重さ319.7g。石材は砂岩である。住居に伴うものと考えられる。



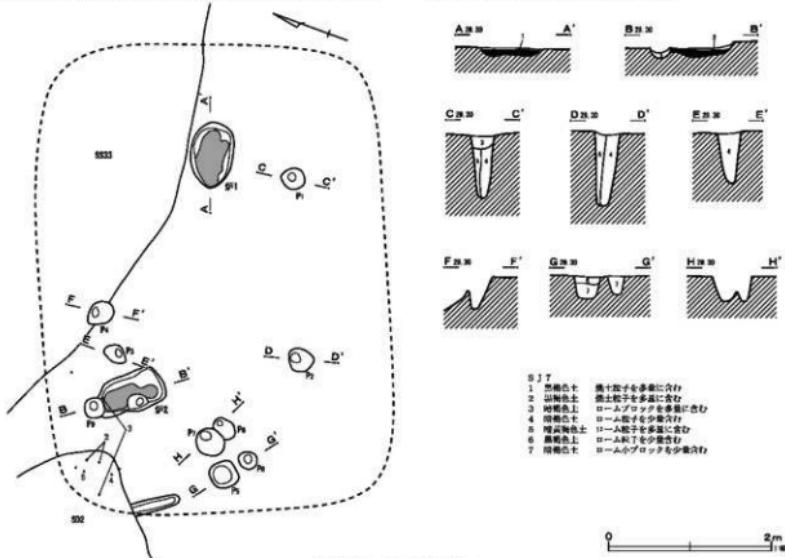
第24図 第6号住居跡出土遺物

第6号住居跡（第17図）

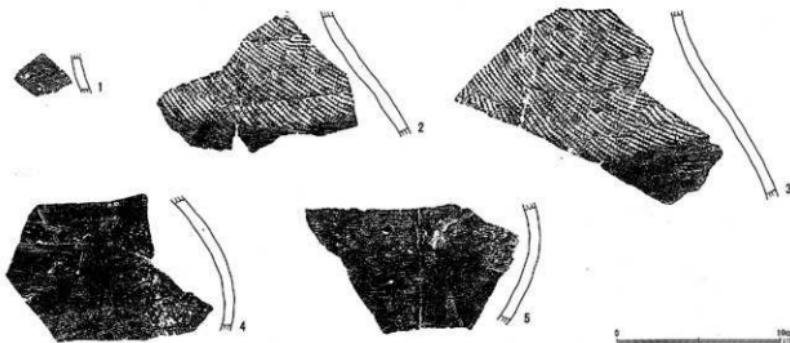
調査区北端のB-5グリッドに位置する。第3・4号住居跡、第33号墳、第1号溝跡の擾乱を受け、遺存状態は極めて悪い。西壁部がかろうじて検出されたのみで、詳細な規模は不明とせざるを得ない。確認された床面はおおむね平坦で、周溝はない。第

3号住居跡との床面レベル差は明確であったが、第4号住居跡とはほとんど同一レベルである。

出土遺物はP1の上面から小型甕が出土しただけで總じて少ないが、吉ヶ谷式期の住居跡と推定した。第24図1・3は吉ヶ谷式の甕である。2は覆土から出土した岩鼻式の無文甕である。



第25図 第7号住居跡



第26図 第7号住居跡出土遺物

第7号住居跡（第25図）

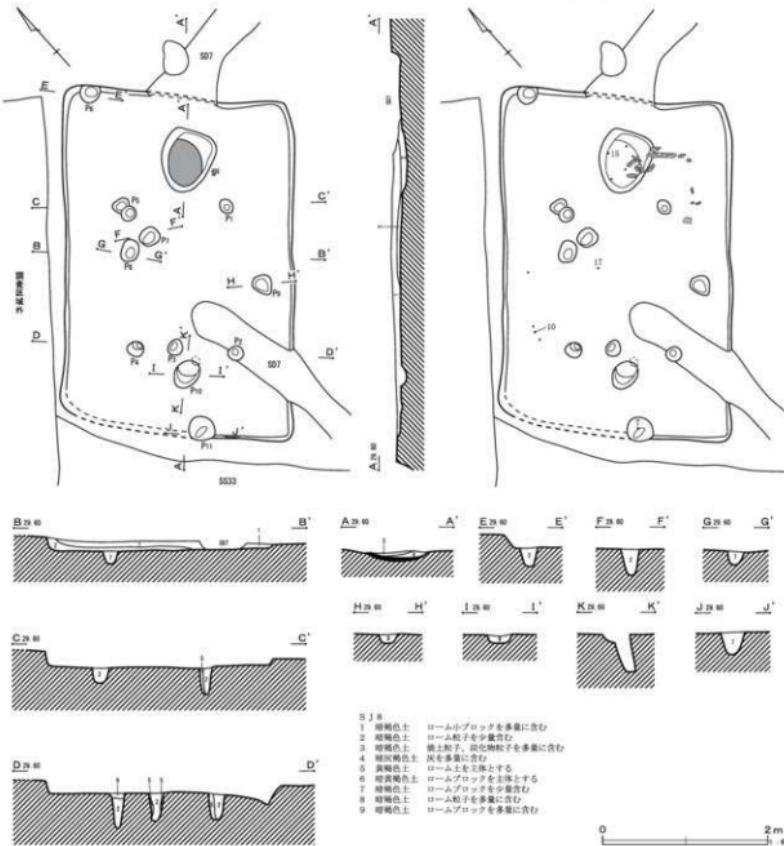
調査区西側のD-4・5グリッドに位置する。第33号墳の南側に地床炉が2基検出され、住居跡の存在が判明した。第2号住居跡の南西側に接して位置することになるが平面形や規模は不明確である。

第1号炉跡は楕円形で長径0.79m、短径0.52m、深さ0.02m、底面は厚く被熱していた。第2号炉跡は不整楕円形で、規模は長径0.76m、短径0.48m、深さ0.25mである。第1号炉跡とほぼ同様の規模

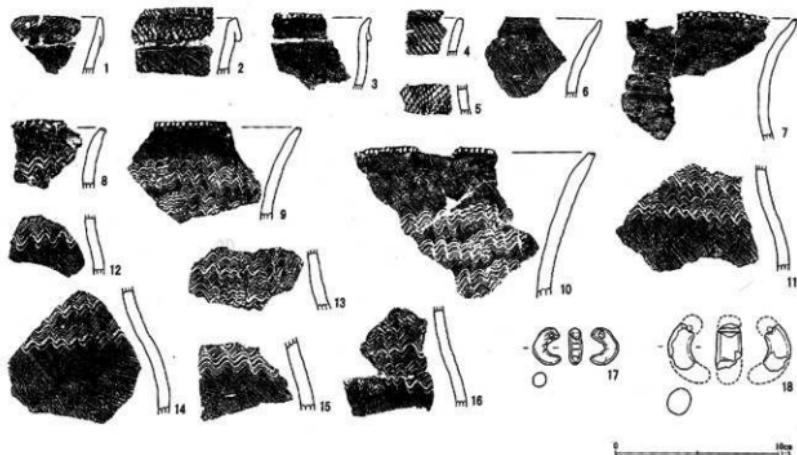
をもち、底面は厚く被熱していた。

ピットは9本検出され、P1～P3は主柱穴と考えられる。また、すでに床面が露出していたため周溝の有無ははっきりしないが、第2号溝跡に接する西壁部分に周溝の痕跡と思われる溝が確認された。

出土遺物は少なく、第2号溝跡の埋土中に流れ込んだ状態で僅かに出土した（第26図）。1は岩鼻式の壺の頭部破片である。2～5は同一個体で大形の壺。縹文の特徴から南関東系の土器であろう。



第27図 第8号住居跡



第28図 第8号住居跡出土遺物

第8号住居跡（第27図）

調査区西側のC-4・5、D-4グリッドに位置する。第33号墳の墳丘下にあり、第7号溝跡によつて切られていた。平面形は長方形で、規模は長軸長4.20 m、短軸長2.82 m、深さ0.09 mである。主軸方向はN-43°-Eである。

床面はやや起伏がある。全体に硬く踏み固められており、周溝はない。炉跡は長軸線上の北東壁寄りの位置にあり、上面には炭化材が散在していた。火災住居の可能性も高い。炉跡の平面形は不整形で、長径0.76 m、短径0.62 m、深さ0.09 m。底面は良く被熱しており、厚く赤色化していた。

ピットは11本検出された。配置や深さからP1～P5が主柱穴となる可能性をもつ。P10は斜向ピットであるが、梯子穴となるか否か明確にはできなかった。

出土遺物は総じて少ない（第28図）。1～5は吉ヶ谷式土器である。いずれも覆土出土であることから混入であろう。6～16は岩鼻式の甕で住居に伴うものと判断した。6・7は無文甕である。8～16は櫛描波状文を施したものである。擦痕状のハケで

調整した後、文様を頸部のくびれ部を中心にして描く。波高が高いものが多い。口縁部内外面を強くヨコナデするものが多く認められる。16・17は土製勾玉である。17は小型のC字形を呈する。18は両端部を欠損し、孔の一部を遺存している。

第9号住居跡（第29図）

調査区北西端のC-4グリッドに位置する。第1号性格不明遺構に削平されており、南東隅部付近のみを遺存した。平面形は隅丸（長）方形と推定され、残存規模は東西長2.46 m、南北長2.04 m、深さ0.13 mである。ピットは2本検出され、P1は主柱穴の可能性がある。床面から東壁にかけて炭化物と焼土が堆積しており、火災を受けた可能性がある。

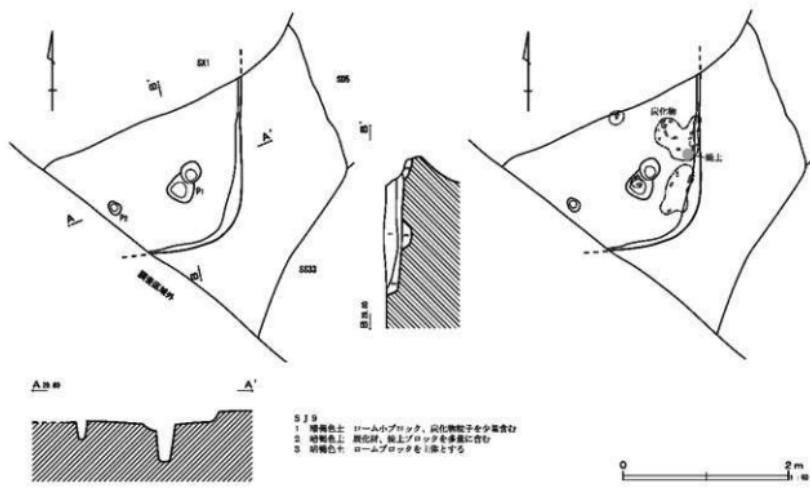
出土遺物は総じて少ない（第30図）が、重複する第1号性格不明遺構の埋土中に混入した状態で弥生土器がまとまって出土しており、第9号住居跡に帰属する可能性が高いことから合わせて説明する。

本住居跡に伴う遺物としては吉ヶ谷式土器が1点出土している（1）。2～18は第1号不明遺構にかかる位置から出土した吉ヶ谷式土器（2～13）と岩鼻式土器（14～18）である。2は高坏で口唇部にキ

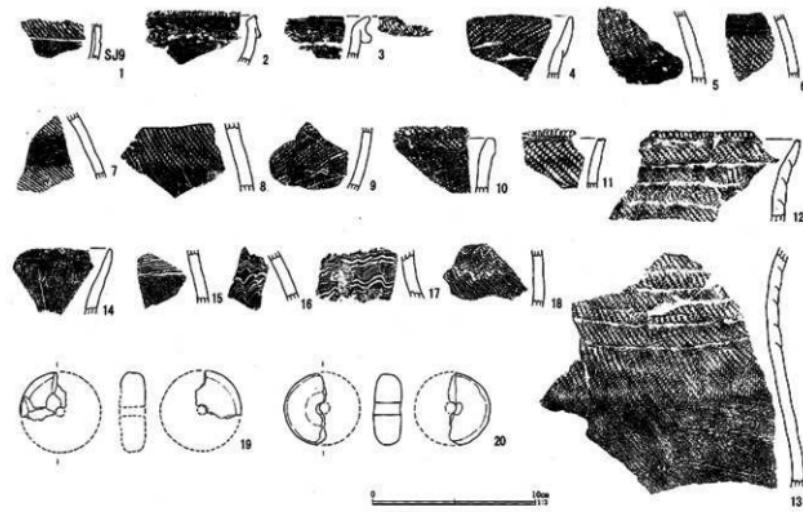
ザミを施す。3～10は壺である。4は内外面無文部を赤彩する。5～8は外面無文部を赤彩する。7は胴上半部で二帯以上の網文帯がめぐる。11～13

は壺。12・13は同一個体で、段差のない輪積痕上を輪積痕に關係なく繩文を施文している。

14は無文壺の口縁部破片である。15～18は壺胴



第29図 第9号住居跡



第30図 第9号住居跡、第1号性格不明遺構出土遺物

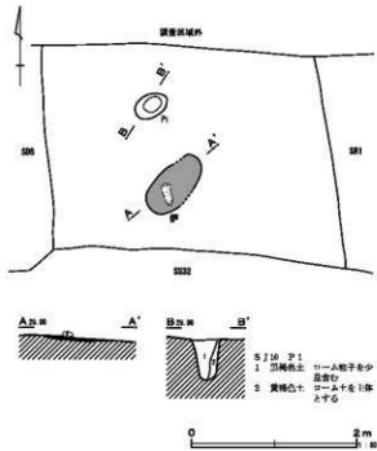
上半部から頸部にかけての破片である。波高の低いもの(15)もみられる。19・20は土製筋錠車である。両方とも断面長方形を呈する。

第10号住居跡(第31図)

調査区北端のB-7・8グリッドに位置する。第1号方形周溝墓、第32号墳、第8号溝跡に削平され、規模等の詳細は不明である。

付属施設は炉跡とピットが検出されたのみである。炉跡は平面形が梢円形の地床炉で、規模は長径0.84m、短径0.45mで底面の被熱面が露出していた。炉の中からは枕石と考えられる石が検出されたが、原位置を留めていない可能性がある。枕石は筋錠形の河原石を用い、表面が被熱により赤色化していた。

出土遺物はわずかで、高坏の脚部(第32図1)と瓶の破片(2)が出土している。吉ヶ谷式期の住居跡と考えておきたい。



第31図 第10号住居跡



第32図 第10号住居跡出土遺物

(2) 炉跡

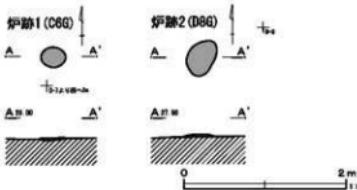
弥生時代の住居跡の掘り込みは概して浅く、後世の搅乱によって壁が削平されてしまい、炉や柱穴のみしか確認できない住居もあった。そのため単独で検出された2基の焼土ピットについても住居跡の可能性も考えられるが、出土遺物がなく性格は特定できなかった。

炉跡1(第33図)

C-6グリッドに位置する。被熱硬化は認められず、住居跡の炉と比較するとやや軟質である。径30×25cmの梢円形の掘り込みで、断面は皿状で浅い。近接する古墳の周溝へ弥生土器が流れ込んでいることからすれば、該期の可能性がある。

炉跡2(第33図)

調査区東側のD-8グリッドに位置する。周囲には近世の土礫群が所在する。被熱硬化は認められず、住居跡の炉と比較するとやや軟質である。径45×32cmの梢円形の掘り込みで、断面は皿状で浅い。該期の遺構が周囲に希薄であることからすれば、近世の火処の可能性も考えられよう。



第33図 炉跡1・2

(3) 方形周溝墓

第1号方形周溝墓(第34図)

調査区北端のB-C-6~8グリッドに位置する。第32号墳、第4・6号溝跡に削平され、第10号住居跡よりも新しい。北半は調査区外に延びている。東西長16.32m、南北残存長は7.44m、方台部長は9.60m×6.00m(残存値)である。主軸方位はN-81°-Eを指す。

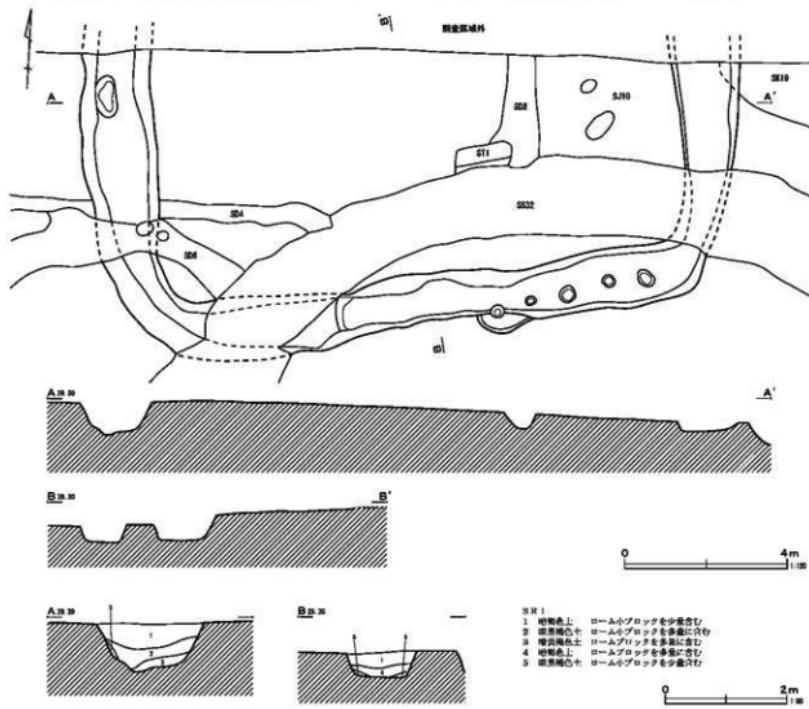
残存部の周溝は全周する。溝幅は1.10m~1.90m、

深さは0.25～0.80mで、西周溝が深く東周溝が浅くなっている。埋土にはロームブロックが多く含まれ、人為的な埋戻しの可能性も考えられる。

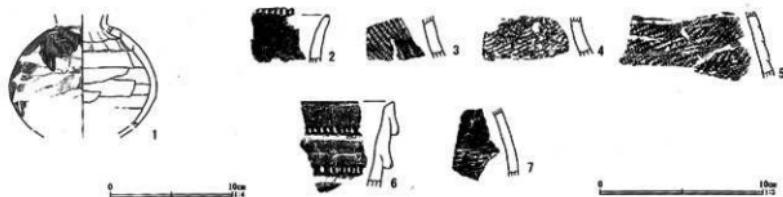
出土遺物は少ない(第35図)。1は土師器小型壺である。底部と口縁部を欠き、胴部に細かいハケメ

調整が施される。古墳時代前期の所産と考えられる。

2～7は混入と考えられる弥生土器である。2は梯描波状文と口唇部にキザミをもつ岩鼻式の壺。3～7は吉ヶ谷式土器で、3～5は壺、6・7は壺である。6は輪横痕の下端にキザミを施す。



第34図 第1号方形周溝墓



第35図 第1号方形周溝墓出土遺物

(4) 溝跡

第8号溝（第36図）

第32号墳及び第1号埴輪棺に切られ、北端は調査区外に延びている。規模は確認長2.72m、溝幅0.70~1.05m、深さ0.35mである。

出土遺物は、弥生土器、埴輪が少量出土したにすぎない。第37図1は赤彩された弥生土器の小型壺である。胴部中位より上を欠損するため全体の器形は不明である。外面は縦位のヘラミガキを丁寧に施し、内面は木口状工具によりナデを施す。

性格については不明確であるが、方形周溝墓の可能性も考えられる。

(5) 土壙

第19号土壙（第38図）

調査区北端のB-8グリッドに位置する。第1号方形周溝墓の東溝と重複し、切られる。北西半分が調査区外に延びるため全体は不明であるが、平面形は梢円形と推定される。長径3.30m、短径2.00m、深さ0.48mである。主軸方向はN-61°-Wである。

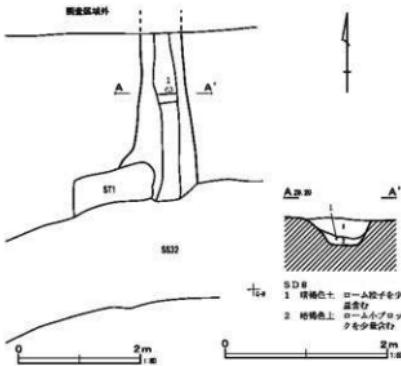
出土遺物は少ない（第39図1~4）。吉ヶ谷式の壺、甕が出土した。弥生時代の土壙と考えられる。

第26号土壙（第38図）

調査区北東部のB-9グリッドに位置する。北側が調査区外に延びるため全体は不明であるが、平面形は梢円形と推定される。規模は長径2.34m、短径1.28m、深さ0.25mである。主軸方向はN-57°-Eである。出土遺物は弥生土器の破片が少量出土した。第39図5は吉ヶ谷式土器の壺口縁部である。突帯状の輪積痕上にヘラ状工具でキザミを施し、外面を赤彩する。

第34号土壙（第38図）

調査区南端のF-G-7・8グリッドに位置し、調査区内では斜面部の最も低い地点に立地する。南側が調査区外に延びるため全体は不明であるが、平面形は梢円形と推定される。規模は長径2.57m、短径1.77m、深さ0.86mである。



第36図 第8号溝跡



第37図 第8号溝跡出土遺物

遺物は、弥生土器の破片が比較的多く出土しており（第39図6・7）、吉ヶ谷式の壺・高坏を図示した。7は外面に赤彩を施した高坏の脚部である。弥生時代に帰属する可能性もある。

(6) 調査区出土遺物

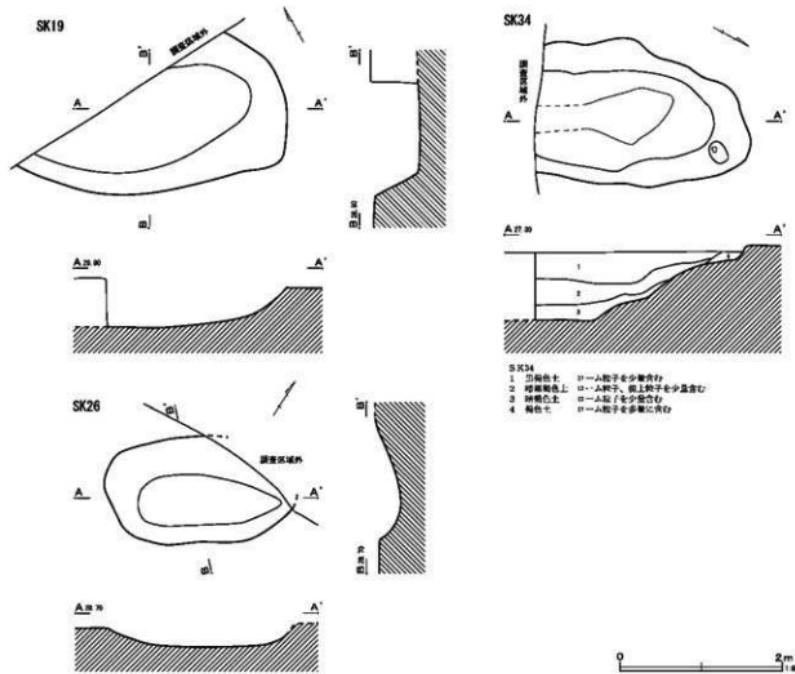
住居跡同様に吉ヶ谷式土器と岩鼻式土器が出土している（第40~42図）。

1~4・6・9~11・31~44・46~57・59~60・73~75は吉ヶ谷式の壺である。2・3は所謂耳付土器である。4は頸部が細い小型の壺であろう。31~38は段差のある輪積痕の下端にキザミを施すものである。輪積痕の段数も1段（折り返し口縁状のものを含む）や2段あるいはそれ以上に及ぶものもある。39~41輪積痕上に繩文を施し、下端を刻むものである。39・40は輪積痕が1段であるが、41は2段以上であると思われる。43は折り返し口縁上に繩文が施文されるが、下端にキザミをもたないも

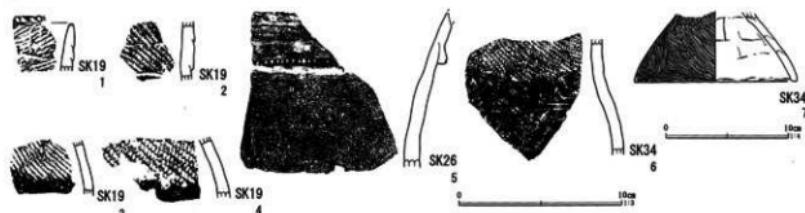
のである。44・46は口縁部を折り返すが縄文を施文しない。47～57・59～69・73～75は頸部から胸部にかけての破片である。縄文が沈線区画されるもの(49・50・54・55)、2～3帯の縄文帯をもつもの(51～53・56・57)、幅広の縄文帯をもつもの(65・68)

がみられる。6・9～11は壺底部で底径の小さいもの(6)、大型のもの(11)が存在することからある程度の法量差が認められる。

7・45は無類壺である。7は折り返し口縁下端に細かいキザミが施される。45は折り返し口縁下端が



第38図 第19・26・34号土壤



第39図 第19・26・34号土壤出土遺物

沈線状に浅く窪む。

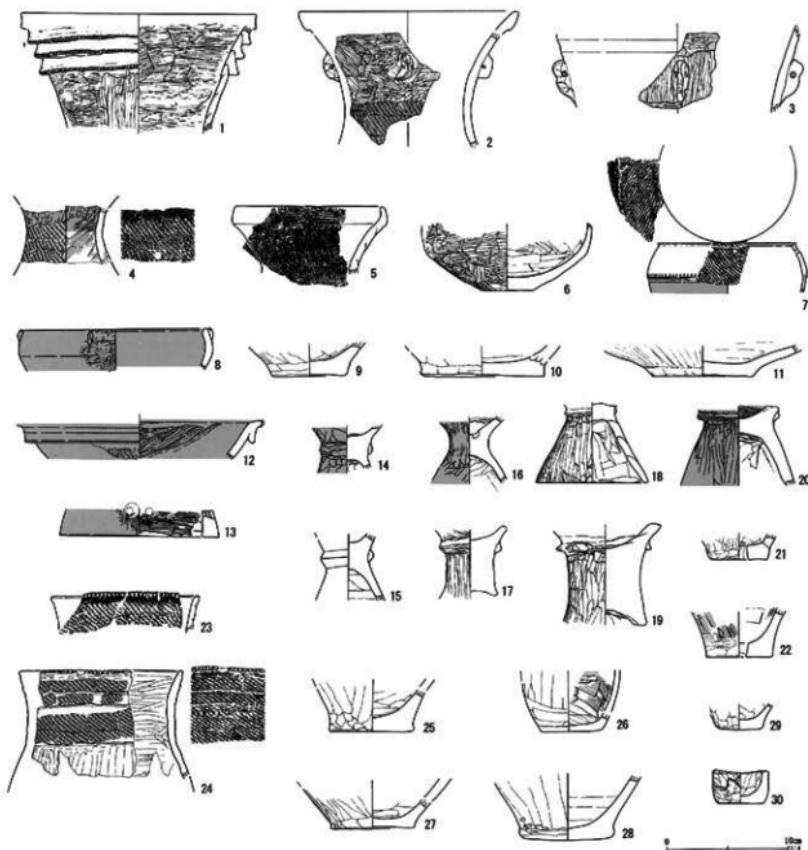
8・12・14～19・78～80は高坏である。坏部が内湾するもの(8)、輪積痕をもつもの(12・78～80)がみられる。特に79・80は下端にキザミをもち、特徴的な口唇部である。脚部は接合部に突帶をもつものともたないものがある。17・18のように脚部が中実のものも認められる。

13は、類例はみられないが器台と考えたものであ

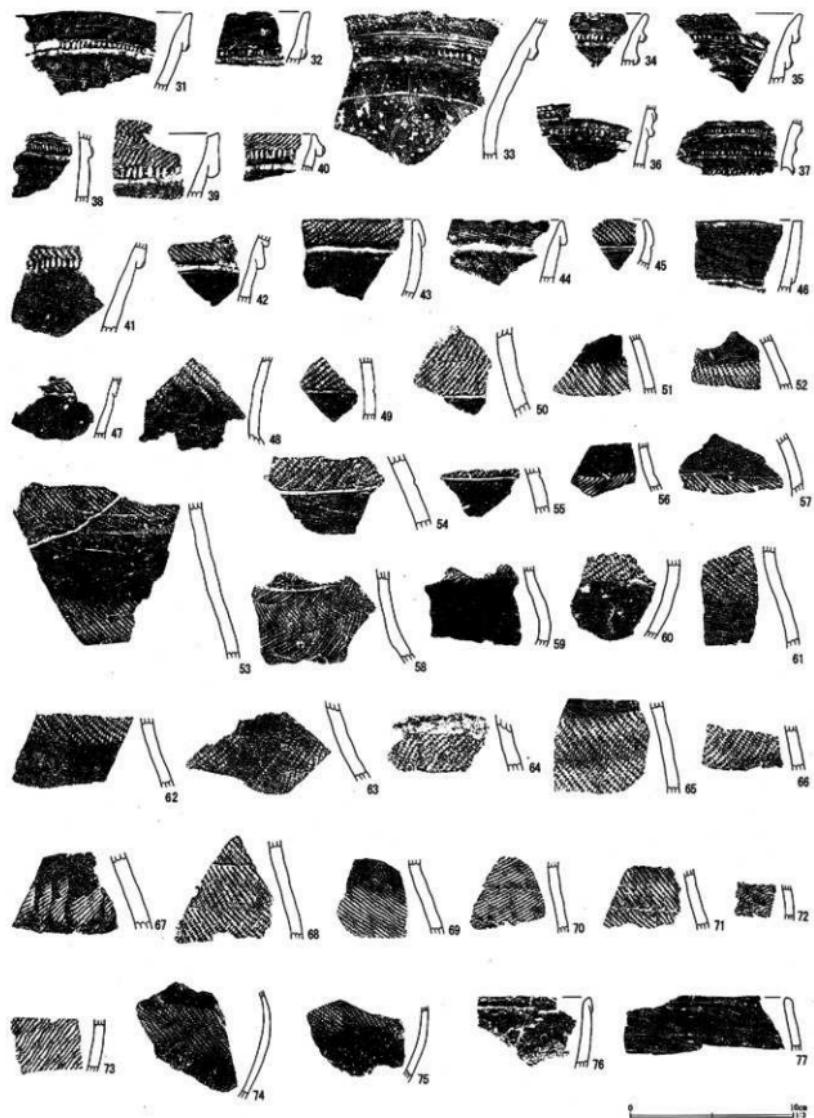
る。精製された胎土である。

21・22は焼成前穿孔による単孔の瓶で、文様はなく、内外面にナデ調整を施す。

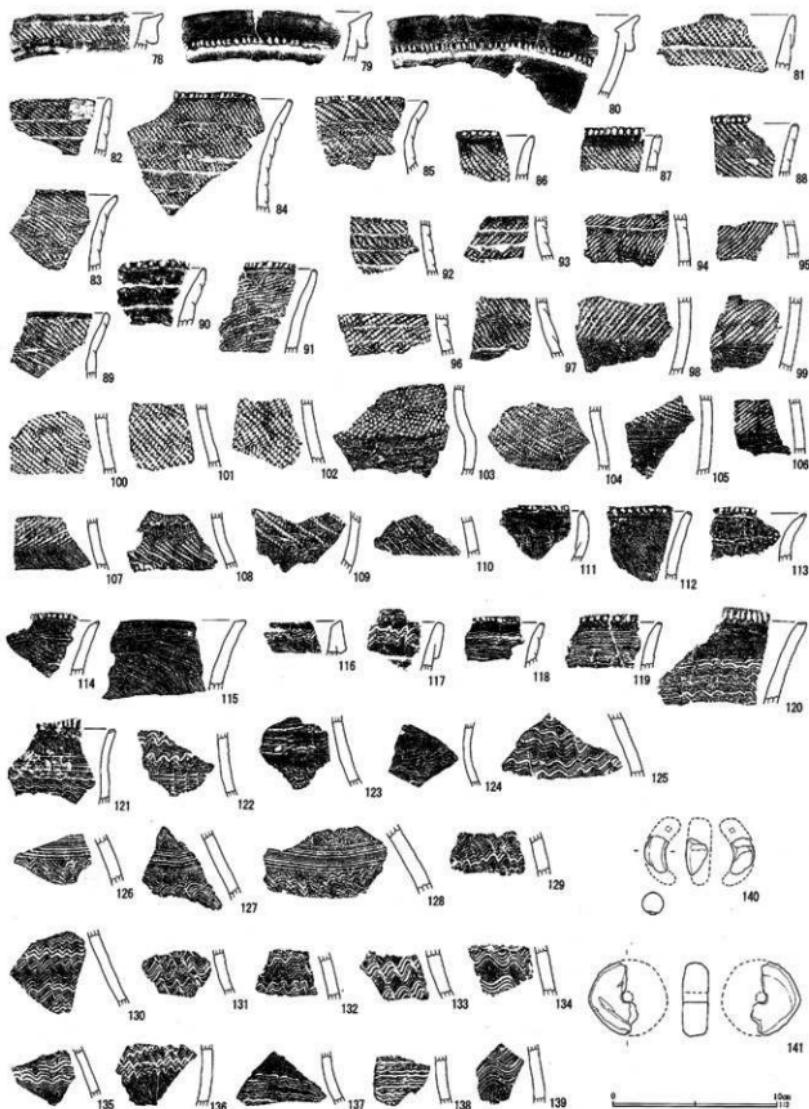
2・3～28・81～107は壺である。23・24・86・87は口縁部直下に狭い無文帯をもつ。段差のない輪積痕をもつものは92・93のように輪積痕の幅に合わせて縄文施文するものも認められるが、多くは輪積痕に関係なく縄文を施文している。



第40図 調査区出土弥生土器(1)



第41図 調査区出土弥生土器(2)



第42図 調査区出土弥生土器（3）

底部はほぼ水平のもの(25・26)上げ底気味のもの(27)、丸みをもつもの(28)などバラエティがみられる。

29・30はミニチュア土器である。30は外面に簡略化した波状文をめぐらす。

5・111～125・129～139は岩鼻式土器である。5は無文壺と思われる。111～115は無文壺である。115を除き口唇部にキザミを施す。116・117は壺で、折り返し口線上に波状文を施す。118～125・129～139は甌である。121・122は頸部に簾状文と波状文

が施される。波状文は波高が低いもの(118～120・137・138)、波形が乱れたもの(132・136)がある。

70～72はS字状結節文が施文されることから南関東系であろう。108～110は東関東系であろう。126～128は同一個体で、関東西部から東海地方に出自が求められる土器であろう。

140は土製勾玉の小破片である。141は土製紡錘車である。2分の1を欠損し、断面長方形を呈する。ミガキ調整を施す。

第2表 第1号住居跡出土遺物観察表(第14図)

番号	器種	部位	縄文	赤彩	色調	胎土	特徴	備考
1	壺	口縁～胴部	LR		明褐	A・B・C・G	内面頸部以下ナデ、口縁部付近横ハケ。外面ハケ調整後、縄文を施す。縄文は段差のない輪積痕上を輪積痕の軸に関係なく上から下へ施す。口唇部や丸みをもつ縄文が施文される。	ピット10 口径14.0cm、最大径15.4cm、残存高19.9cm
2	甌	口縁～胴部	RL		明黄褐	A・B・C・G	内面ハケ調整後横ナデ。外面段差のあまりない輪積痕上を輪積痕の軸に関係なく、横方向に縄文を施す。口唇部丸みをもつ、木口状工具でキザミを施す。口唇部直下無文帯あり。	No.29 口径13.2cm、残存高11.1cm
3	高坏	接合部		内外面赤彩	黄橙	A・G	内外面丁寧なミガキ。接合部に断面三角形の突帯が巡る。	No.13 接合部径5.9cm
4	瓶	底部			橙	B・C・F・H	内面ハケ調整後ナデ。外面指揮さえ痕明顯。底部中央よりやや外側に位置に穿孔。焼成前穿孔。	No.27 覆土 単孔底径4.8cm
5	高坏	脚部		外面赤彩	明黄褐	A・G	内面ハケ調整。外面縦ミガキ。底部端部平坦である。	No.14・15 覆土 脚部径13.7
6	壺	口縁部	RL		にぶい黄橙	A・C・G	内面横ミガキ。外面段差のある輪積痕上に輪積痕の軸で横方向に下から上へ縄文を施す。閉端部分が見える。口唇部内ソギ氣味。	No.18・38 口径22.3mm
7	壺	口縁部	RL		にぶい黄褐	A・C・G	内面横ミガキ。外面段差のある輪積痕2段。下段輪積痕上に縄文を施す後、最上段を積み上げている。頸部はハケ調整後縦ミガキ。口唇部は内ソギ氣味である。	No.2
8	壺	頸～脚部上半	LR		黄橙	B・C・E・G	内面横ハケ。外面横方向に縄文を施す。	No.34
9	壺	頸～脚部上半	LR		黄橙	B・C・E・G	内面横ハケ。外面横方向に上から下へ縄文を施す。	覆土 同一個体
10	壺	脚部	RL	外面無文部赤彩	橙	A・C・G	内面横ハケ。外面ハケ調整後横方向に上から下へ縄文を施す。赤彩部分はハケ調整後ミガキ。	ピット10
11	壺	頸部	LR		にぶい黄橙	B・C・G	内面ハケ調整後、横ナデ。外面横方向に上から下へ縄文を施す。肩部下斜位ミガキ。	No.25・34
12	高坏	口縁部			明赤褐	A・G	内面横ミガキ。外面突帯上にヘラ状工具でキザミ。口唇部頭部、縫長な貼り付け文あり。	ピット10
13	甌	口縁部	RL		明黄褐	A・D・G	内面横ミガキ。外面段差のない輪積痕上を輪積痕に関係なく横方向に上から下へ縄文を施す。口縁部木口状工具でキザミを施す。	No.16
14	甌	口縁部	RL		にぶい黄褐	A・C・G	内面横ナデ。外面輪積痕に関係なく縄文施す 口縁部直下横ナデ 口唇部ヘラ状工具でキザミ。	No.36
15	甌	口縁部		擬縄文	明黄褐	C・F・G	内面横ハケ。外面輪積みの痕跡が僅かに残る。口縁部直下横ナデ 口唇部ヘラ状工具でキザミ。口縁部直下内外面に指揮さえの跡が残る。	覆土
16	甌	頸部	RL		明褐	A・G	内面斜位ハケ調整。外面縫かに輪積の痕跡が残る。横方向に下から上へ縄文を施す。	No.23
17	甌	脚部上半	RL		褐灰	A・G	内面斜位ナデ調整。外面横方向に下から上へ縄文を施す。	No.41
18	甌	頸～脚部上半	RL		にぶい黄褐	C・D・F・H	内面斜位ハケ調整。外面段差のない輪積痕上を輪積痕の軸に関係なく横方向に縄文を施す。	No.32
19	甌	頸～脚部上半	RL		にぶい黄褐	A・C・G	内面ハケ調整後横ナデ。外面段差のない輪積痕上を輪積痕の軸に関係なく横方向に上から下へ縄文を施す。	No.39
20	甌	頸部	RL		にぶい黄褐	F・G・H	内面ナデ調整。外面横方向に下から上へ縄文を施す。	No.6

番号	器種	部位	縞文	赤彩	色調	胎土	特徴	備考
21	甕	胴部	R L		褐灰	A・C・G	内面横ナデ。外面ハケ調整後、横方向に下から上へ縞文を施文。	覆土
22	土製 筋鉢車			にぶい赤褐		A・C・H	断面低台形。直径(4.7)cm、厚さ0.9cm、孔径(0.6)cm。重量4.1g。20%残存。ナデ調整。	覆土

第3表 第2号住居跡出土遺物観察表 (第16図)

番号	器種	部位	縞文	赤彩	色調	胎土	特徴	備考
1	無頸甕	口縞部	L R	内外面赤彩	明黄褐	A・C・G	内面横ミガキ。外面折り返し口縞部分に縞文を施文。縞文を施文後折り返し口縞の下端の段差を無くすため横ナデがされている。口縞部内ソギ状である。	覆土
2	甕	口縞部	R L		明黄褐	A・B・D	内面剥落。外面折り返し口縞部分に縞文を施文。下端を木口状工具でキザミを施す。口縞部内ソギ状である。	覆土
3	甕	頸部	L r		橙	A・E・G	内面ハケ調整。外面縞文施文後細線を描く。全体的に剥落が激しい。	覆土
4	甕	頸部	L R		浅黄橙	A・C・G	内面横ナデ。外面横方向に上から下へ縞文を施文。	覆土
5	甕	口縞部	R L		灰黄褐	A・B・G	内面横ナデ。外面段差のない輪積痕上を輪積痕に關係なく横方向に下から上へ縞文を施文。	覆土
6	甕	口縞部	L R		褐灰	A・C・D	内面横ナデ。外面段差のあるない輪積痕上を輪積痕の幅に沿って横方向に下から上へ縞文を施文。口唇部木口状工具でキザミを施す。	灰 I 覆土
7	甕	胴部	L R	にぶい黄褐	A・C・F・G		内面斜位ナデ。外面横方向に上から下へ縞文を施文。	覆土
8	甕	頸部	R L		赤褐	A・B・C・E・G	内面横ナデ。外面横方向に縞文を施文。	覆土
9	甕	頸部	R L		明褐	A・B・G	内面横ナデ。剥落が激しい。外横方向にから下へ縞文を施文。	覆土
10	甕	口縞部		にぶい黄褐	A・B・G		内面外ハケ調整後横ナデ。口唇部ヘラ状工具によるキザミを施す。	覆土 岩鼻式無文甕
11	甕	口縞部			黄橙	A・B・G	内面外ハケ調整後横ナデ。口唇部ヘラ状工具によるキザミを施す。	覆土 岩鼻式無文甕
12	甕	口縞部			灰黄褐	A・C・D・G	内面外ハケ調整。口唇部木口状工具によるキザミを断続的に施す。	覆土 岩鼻式無文甕
13	甕	口縞部			褐	A・C・G	内面外斜位ハケ調整。外面頸部に櫛描波状文施す。口唇部はや丸みを帯びる状工具でキザミを施す。	覆土
14	甕	頸部上半		にぶい褐	A・E・G		内面横ナデ。外面6本一単位の櫛描波状文を施文。	覆土
15	甕	頸部			橙	C・G	内面横ナデ。外面4本一単位の櫛描波状文を施文。	覆土
16	甕	頸部		にぶい褐	A・B・E		内面剥落が激しく調整不明。外面4本一単位の櫛描波状文を施文。	覆土
17	ミニチュア		L R	にぶい橙	B・G		内面横ナデ。外面原体の施文方向を変え羽状状文風にしている。	覆土
18	土製勾玉				赤褐	A・F・H	残存長2.1cm、径1.0cm、重量2.7g。50%残存。ナデ調整。	No.1 床底

第4表 第3号住居跡出土遺物観察表 (第18図)

番号	器種	部位	縞文	赤彩	色調	胎土	特徴	備考
1	甕		R L		黄橙	B・C・F・H	内面ハケ調整後、横ナデ。外面横方向に下から上へ縞文を施文。無文部ナデ。口唇部平坦で木口状工具でキザミを施す。	No.2 口径15.8cm、最大径17.0cm、残存高27.2cm
2	甕		R L	にぶい黄褐	B・F・G・H		内面ミガキ。外面段差がない輪積痕上を輪積痕の幅で下から上へ縞文を施文。口唇部平坦で木口状工具でキザミを施す。	No.5 口径8.5cm、最大径8.8cm、残存高5.4cm
3	甕	口縞部	R L	内面・外面 無文部赤彩	明黄褐	B・F・H	内面横ミガキ。外面折り返し口縞上に横方向に縞文を施文。口唇部や丸みを帯びる。	No.3-4(ピット5) 口径8.5cm、最大径8.8cm、残存高4.5cm
4	甕	口縞部	R L	にぶい黄褐	A・B		内面横ナデ。外面段差のない輪積痕上をほぼ輪積痕の幅で縞文を下から上へ施文。口縞部直下横ナデ。口唇部に木口状工具によるキザミを施す。	覆土
5	甕	頸部	L R		明褐	A・B・F・G	内面斜位にハケ調整後横ミガキ。外面段差のない輪積痕上を輪積痕に關係なく縞文を施文。一部斜位に縞文を施文。	覆土
6	甕	頸部	R L		浅黄橙	C・F	内面斜位にハケ調整後横ミガキ。外面段差のない輪積痕上を輪積痕に關係なく縞文を施文。一部斜位に縞文を施文。	覆土
7	甕	頸部上半	R L		橙	E・G	内外面横ナデ。横方向に縞文を施文。	覆土

番号	器種	部位	縞文	赤彩	色調	胎土	特徴	備考
8	壺	胴部上半	R L		褐	B・D・F・H	内面ハケ調整後、横ナデ。外面ハケ調整後、横方向に縞文を施文。	覆土
9	壺	口縲部			にぶい褐	A・B・G	内面横ナデ。外面ハケ調整後ナデ。	覆土
10	壺	口縲部	L r		橙	A・B・D	内面ハケ調整後横ナデ。外面ナデ調整後縞文施文。口唇部丸みを帯びる。	覆土
11	壺	口縲部			明赤褐	A・E・G	内外面ハケ調整。口唇部ヘラ状T工具によりキザミを施す。	覆土 岩島式無文壺

第5表 第4号住居跡出土遺物観察表（第20図）

番号	器種	部位	縞文	赤彩	色調	胎土	特徴	備考
1	高环	II縲部		内外面赤彩	浅黄橙	A・B・C・G	内外面丁寧なミガキ。口唇部丸みをもつ。	No.20 H径15.2cm
2	高环	脚部			にぶい黄橙	A・B・C・G	内面ハケ削除後ナデ。外面ナデ。	No.23 脚部径6.9cm。残存高6.0cm。接合部径3.2cm
3	壺	口縲部			にぶい黄橙	A・C・D・G	内面横ナデ。外面縞位にハケ調整。口唇部木口状工具によりキザミを施す。II唇部外ソギ状である。	覆土：無文壺
4	壺	口縲部	L r		明黄褐	A・B・G	内面剥落。外面輪削痕が残る。ほぼ輪削痕の軽度縞文を施文する。	覆土：
5	壺	口縲部		内外面赤彩	黄橙	B・C・F・G	内面ハケ調整後縞文ミガキ。外面輪削痕と口唇部に木口状工具でキザミを施す。頭部縞ミガキ。	No.16
6	壺	頭部	R L	内面赤彩	橙	A・D・G	内面横ミガキ。外面ハケ調整後縞文施文。頸大部ミガキ。	
7	壺	脚部	R L		にぶい橙	A・B・F・G	内面横ナデ。外面横方向に上から下へ縞文を施文。	No.7
8	壺	脚部上半	R L		にぶい橙	C・E・G	内面横ナデ。外面横ハケ後、横方向に上から下へ縞文を施文。	覆土
9	壺	脚部	L r		にぶい黄橙	A・G・H	内面横ナデ。外面横方向に上から下へ縞文を施文。	No.9
10	壺	頭部	R L		褐灰	A・D・G	内面横ナデ。外面横方向に下から上へ縞文を施文。	覆土
11	壺	脚部上半	R L		褐灰	B・F・H	内面横ハケ。外面横ハケ後、縞文施文。	覆土
12	壺	脚部上半	R L		にぶい黄橙	C・F	内面横ナデ。外面横ハケ後、縞文を施文。	No.17
13	壺	脚部上半	自縲部 縲		灰黄褐	A・C・G	内面ハケ調整後ナデ。外面斜位にハケ後、縞文を施文。	No.12
14	上製勾玉				明赤褐	A・C・G	長3.1cm、幅2.0cm、厚1.2×1.3cm、重量6.4g。 完存。ナデ調整。	No.21

第6表 第3・4号住居跡出土遺物観察表（第21図）

番号	器種	部位	縞文	赤彩	色調	胎土	特徴	備考
1	高环	II縲部		内外面赤彩	明黄褐	A・B・H	内外面ミガキ。口縲部短く鋸歯状とする。口唇部平坦である。	B5G 口径13.0cm
2	壺	口縲部			橙	A・E・G	内面ハケ調整後横ナデ。口唇部鋸く上方にのびる。	B5G 岩島式無文壺
3	壺	口縲部	R L		褐	G・H	口縲部内外面ハケ調整。口唇部ヘラ状T工具によりキザミ。口縲部直下無文の輪削痕が一枚ある。	B5G
4	壺	II縲部	L R		黄橙	A・E・G	内面横ナデ。外面前や縞位のある輪削痕上に輪削痕の軽度縞文を施す。	B5G
5	壺	II縲部	R L		橙	C・H	内外面ハケ調整。外面横方向に上から下へ縞文を施文。口唇部直下無文の輪削痕上によりキザミを施す。	B5G
6	壺	口縲部～頭部	R E	内面赤彩	にぶい橙	A・F・H	内面横ミガキ。外面段差のない輪削痕上に輪削痕の軽度縞文を施す。	B5G
7	壺	脚部	R L		にぶい黄橙	A・B・E・G	内面横ナデ。外面横方向に縞文を施文。	B5G
8	壺	脚部	L R		にぶい黄橙	A・B・F	内面剥落が激しい。外面横方向に縞文を施文。	B5G
9	壺	脚部	L R		橙	F・H	内面横ミガキ。外面横方向に上から下へ縞文を施文。	B5G

第7表 第5号住居跡出土遺物観察表（第23図）

番号	器種	部位	縞文	赤彩	色調	胎土	特徴	備考
1	壺	II縲部			橙	A・B・G	内面横ナデ。外面斜位にハケ調整後、5本一単位の擦波状文を施す。口縲部丸み帶びて外方に強く屈曲する。平坦な口縲部に擦波状文を施す。	覆土

番号	部位	縞文	赤彩	色調	胎土	特徴	備考
2	壺 頸部			橙	A・E・G	内面ハケ調整後、横ナデ。外側輪郭波状文を施文。	覆土
3	壺 頸部上半			暗赤褐	C・G	内面輪郭が激しい。外側輪郭による平行線と波状文を交互に描く。	覆土
4	壺 頸部		にぶい赤褐	A・C・G		内面ハケ調整後、横ナデ。外側縦位にハケ調整後、6本一単位の輪郭波状文を施文。	覆土
5	壺 頸部上半		灰褐	A・G		内面ハケ調整後、横ナデ。外側縦位にハケ調整後、8本一単位以上の輪郭波状文を施文。	覆土
6	壺 頸部		にぶい橙	A・G		内面横ナデ。外而3本一単位以上の輪郭波状文を施文。	覆土
7	壺 頸部上半		橙	A・D・G		内面横ナデ。6本一単位の輪郭波状文を施文。	覆土
8	壺 頸部		暗赤褐	A・G		内面横ナデ。外而6木一単位の輪郭波状文を施文。	覆土
9	壺 頸部		暗赤褐	A・G・H		内面ハケ調整後、横ナデ。外而5木一単位の輪郭波状文を施文。	覆土
10	壺 口縁部		にぶい赤褐	A・C・G		内外面ハケ調整後、口縫部直下を横ナデ。口唇部丸みを帯びる。	覆土
11	壺 頸部		明褐	A・F・G		内面ナデ。外面ハケ調整。	覆土
12	壺 口縁部	内外面赤彩	橙	A・C・G		内面ハケ調整後横ミガキ。外面段差のある輪郭底下端にヘラ状工具でキザミを施す。	覆土
13	壺 口縁部付近		にぶい褐	A・G		内面横ミガキ。外面段差のある輪郭底下端を木口状工具でキザミを施す。	覆土
14	壺 口縁部	R L 内外面赤彩	にぶい褐	A・H		内外面無文部ミガキ。外側輪郭底上に横方向に縞文を施文。	覆土
15	壺 口縁部	R R 内面赤彩	にぶい黄澄	A・H		内面横ミガキ。外面段差のない輪郭底上を輪郭底に關係なく横方向に縞文を施す。口縫部角底状を呈する。	覆土
16	壺 口縁部	L R	黄橙	E・G		内面横ミガキ。外側折り返し口縫部分に縞文を施文。下端を木口状工具でキザミを施す。口唇部内縮状。	覆土
17	壺 頸部上半	L r 外面赤彩	橙	A・C・G・H		内面ナデ。外而赤影後、縞文を施文。	覆土
18	壺 頸部上半	R L 外面無文部赤彩	明黄褐	C・F・H		内面横ナデ。外面赤彩部分横ミガキ。横方向に縞文を施文。	覆土
19	壺 頸部上半	L R 外面無文部赤影	明黄褐	A・B・G		内面横ナデ。外面横方向に縞文を施文。	覆土
20	壺 頸部上半	R L	橙	A・C・G		内面ハケ削整後、横ナデ。外面横方向に縞文を施文。覆土 No.34と同一個体	覆土
21	壺 頸部上半	R L		橙	G	内面横ナデ。外面横方向に横方向に上から下へ縞文を施文。	覆土
22	壺 頸部上半	R L	にぶい黄橙	F・H		内面横ミガキ。	覆土
23	壺 口縁部	R L	にぶい黄橙	A・D・E・G		内面ハケ調整後、横ナデ。外側縞文を施文。丸みのある口唇部に木口状工具によりキザミを施す。	覆土
24	壺 口縁部	R L	にぶい褐	G・H		内面横ミガキ。外側縦方向に縞文を施文。口唇部下端ナデ。口唇部ヘラ状工具によりキザミを施す。	覆土
25	壺 口縁部	L r	橙	A・F・G		内面横ナデ。外面段差のない輪郭底上を輪郭底に關係なく横方向に縞文を施す。口縫部ヘラ状工具によりキザミを施す。	覆土
26	壺 口縁部		にぶい褐	A・B・G		内外面横ナデ。丸みのある口唇部にヘラ状工具でキザミを施す。覆土 岩鼻式無文變	覆土
27	壺 頸部	L R	にぶい橙	A・C・G		内面ハケ調整後、横ナデ。外面段差のない輪郭底上に輪郭底と關係なく縞文を横方向に施す。	覆土
28	壺 頸部上半	R L	褐	B・G		内面横ナデ。外面段差のある輪郭底上を輪郭底の軸で縞文を施す。	覆土
29	壺 頸部	R L	橙	A・C・G		内面ミガキ。外面段差のない輪郭底上を輪郭底に關係なく横方向に縞文を施す。	覆土
30	壺 頸部	L R	にぶい黄褐	F・H		内面横ナデ。外面段差の輪郭底上を輪郭底に關係なく横方向に縞文を施す。	覆土
31	壺 頸部	R L	にぶい褐	A・D・G		内面横ナデ。外面段差のない輪郭底上に輪郭底に關係なく横方向に上から下へ縞文を施す。	覆土
32	壺 頸部	R L	にぶい橙	F・G		内面ハケ調整後、横ナデ。外面段差のない輪郭底上を輪郭底に關係なく横方向に上から下へ縞文を施す。	覆土
33	壺 頸部	R L	にぶい褐	A・D・G		内面ハケ調整後、横ナデ。外面段差のない輪郭底上に縞文を横方向に施す。	971
34	壺 頸部上半	R L	にぶい橙	A・B・G		内面横ナデ。外面輪郭底上に縞文を施す。無文部ハケ施す。	覆土

番号	器種	部位	縄文	赤彩	色調	胎土	特徴	備考
35	壺	胴部上半	L R		にぶい黄楓	A・E・G・H	内面横ナデ。外面無文ハケ調整、輪積痕の幅に合わせて横方向に縄文を施す。	覆土
36	壺	頸部	L R		灰褐	A・G	内面ナデ。外面横方向に縄文を施す。	覆土
37	壺	胴部上半	L r		楓	A・B・G	内面横ナデ。外面横方向に縄文を施す。	覆土
38	壺	胴部上半	L r		暗褐	A・G	内面横ナデ。外面横方向に縄文を施す。	覆土
39	壺	胴部上半	L r		にぶい黄楓	A・C・F・H	内面ハケ調整後、ナデ。外面斜位にハケ調整。横方向に縄文を施す。	覆土
40	壺	胴部上半	R L		にぶい黄楓	G・H	内面横ナデ。外面横方向に縄文を施す。	覆土
41	壺	胴部上半	R L		褐灰	A・G	内面横ナデ。外面斜位にハケ調整。横方向に縄文を施す。	覆土

第8表 第6号住居跡出土遺物観察表（第24図）

番号	器種	部位	縄文	赤彩	色調	胎土	特徴	備考
1	壺	胴部～底 部			明黄楓	A・F・H	内面ハケ調整後ナデ。外面斜位にハケ調整後、横方向に縄文を施す。	No.1 最大69.3 cm. 底径6.5cm. 残存高7.7cm
2	壺	口縁部			暗褐	A・G	内外面ハケ調整。口唇部木口状工具によりキザミ。	覆土 岩鼻式 文様
3	壺	頸部	R L		にぶい褐	F・H	内面ハケ調整後、横ナデ。外面段差のない輪積痕上に輪積痕に關係なく、横方向に縄文を施す。	ピットI

第9表 第7号住居跡出土遺物観察表（第26図）

番号	器種	部位	縄文	赤彩	色調	胎土	特徴	備考
1	壺	頸部			暗赤楓	A・G	内面横ナデ。外面ハケ調整後、6本一単位の櫛描文を施す。	ピット6
2	壺	頸部	R L		楓	A・D・G・H	内面ハケ調整後、横ナデ。外面閉縫の見える縄文を横方向に上から下へ縄文を施す。無文面ハケ調整後ナデ。	No.4・6
3	壺	頸部	R L		楓	A・D・G・H	内面ハケ調整後、横ナデ。外面閉縫の見える縄文を横方向に上から下へ縄文を施す。無文面ハケ調整後ナデ。	No.2・9 23・45
4	壺	胴部			楓	A・D・G・H	内面ハケ調整後、横ナデ。外面ハケ調整後、ナデ。	No.7
5	壺	胴部			楓	A・D・G・H	内面ハケ調整後、横ナデ。外面ハケ調整後、ナデ。	No.5

第10表 第8号住居跡出土遺物観察表（第28図）

番号	器種	部位	縄文	赤彩	色調	胎土	特徴	備考
1	壺	口縁部	L r		にぶい黄楓	A・C・H	内面ハケ調整。外面折り返し口縁上に縄文を施す。無文部ハケ調整。口唇部尖る。	覆土
2	壺	口縁部	R L		楓	A・C・D・G	内面横ナデ。外面折り返し口縁上に縄文を施す。無文部斜位にハケ調整。口唇部内ソギ状である。	覆土
3	鉢	口縁部			明黄楓	A・C・G	内面横ナデ。外面折り返し口縁上を強く擦くナデ。口縁部短く外反し尖る。端部にヘラ状工具によりキザミ。	覆土
4	壺	口縁部	R L		褐	A・H	内面横ナデ。外面横方向に上から下へ縄文を施す。口唇部丸みをもち、端部に縄文を施す。	覆土
5	壺	胴部上半	L R		楓	A・G	内面横ナデ。外面横方向に縄文を施す。	覆土
6	壺	口縁部			暗褐	B・G	内面横ナデ。外面斜位にハケ調整後。口縁部直下横ナデ。口縁部級受け口状に立ち上がる。	No.122 岩鼻式 無文縄
7	壺	口縁部			黒褐	A・F・G	内外面ハケ調整。内外面口縁部直下横ナデ。端部から緩やかに外反し丸みをもつ口縁部に至る。口唇部ヘラ状工具によりキザミ。	No.6・110 岩鼻式 無文縄
8	壺	口縁部			楓	A・B・G	内面斜位にハケ調整。外面ハケ調整後、4本一単位の櫛描波状文を施す。	覆土
9	壺	口縁部			明赤楓	A・G	内面ハケ調整後、口縁部直下横ナデ。外面斜位にハケ調整後、頸部に8本一単位の櫛描波状文を上から下へ施す。内外面口縁部直下強くナゲ。口唇部尖り氣味でヘラ状工具によりキザミを施す。	覆土
10	壺	口縁部			にぶい黄楓	A・G	内面ハケ調整。外面斜位にハケ調整後、頸部に6本一単位の櫛描波状文を上から下へ施す。内外面口縁部直下強くナゲ。口唇部尖り氣味でヘラ状工具によりキザミを施す。	No.2・覆土
11	壺	胴部上半			褐灰	A・D・G・H	内面斜位にハケ。外面斜位にハケ調整後、5本一単位の櫛描波状文を上から下へ施す。	覆土

番号	器種	部位	縞文	赤彩	色調	胎土	特徴	備考
12	甕	胴部上半			褐灰	A・B・G・H	内面ハケ調整後、横ナデ。外面斜位にハケ調整後、7本一単位の櫛描波状文を上から下へ施文。	覆土
13	甕	胴部上半			黒褐	A・C・G・H	内面ハケ調整後、横ナデ。外面斜位にハケ調整後、6本一単位の櫛描波状文を施文。	覆土
14	甕	胴部上半			褐灰	A・B・G・H	内面斜位にハケ調整。外面斜位にハケ調整後、4本一単位の櫛描波状文を上から下へ施文。	覆土
15	甕	胴部上半		にぶい黄褐	A・D・G	内面ハケ調整後、横ナデ。外面ハケ調整後、5本一単位の櫛描波状文を上から下へ施文。	No.11	
16	甕	胴部上半			褐灰	A・C・G・H	内面ハケ調整後、横ナデ。外面斜位にハケ調整後、7本一単位の櫛描波状文を上から下へ施文。	ピット6・覆土
17	土製勾玉				赤褐	A・C・G・H	長2.2 cm、幅1.7 cm、径0.8 × 0.8 cm、重量2.1 g、No.5	残存。ナデ調整。
18	土製勾玉				赤褐	A・C・H	径1.4 × 1.6 cm、重量5.8 g、50%残存。ナデ調整。	覆土

第11表 第9号住居跡・第1号性格不明遺構出土遺物観察表（第30図）

番号	器種	部位	縞文	赤彩	色調	胎土	特徴	備考
1	甕	胴部上半	R L		褐	A・G	内面剥落。外面横沈線後、縞文を施文。	覆土
2	高坏	口縁部		内外面赤彩	浅黃橙	B・G・H	内外面ミガキ。口縁部折り返し状で下端と口唇部へラウ工具でキザミ施す。	覆土
3	甕	口縁部	L R	にぶい黄褐	A・B・C・G	内面横ナデ。口縁部折り返し状で突帯部分にヘラ工具でキザミを施す。口唇部内ソギ状で、縞文を施文する。	覆土	
4	甕	口縁部	L R	内外面赤彩	橙	C・F・H	内面ナデ。外面段差のない輪横痕上を輪横痕に関係なく縞文を横方向に施文。口唇部尖る。	覆土
5	甕	胴部上半	R L	外面赤彩	灰褐	F・G・H	内面横ナデ。外面縞文を横方向に施文後、赤彩部分を横ミガキ。	C4G 再利用
6	甕	胴部上半	R L	外面無文部 赤影	明褐	A・C・G	内面横ナデ。外面横方向に縞文を施文後、赤彩部分横ミガキ。	C4G
7	甕	胴部上半	R L	外面赤彩	明黃褐	B・G	内面ナデ。外面横方向に縞文を施文後、赤彩部分横ミガキ。	C4G
8	甕	胴部上半	R L	赤彩痕	明黃褐	C・D・F・H	内面横ナデ。外面横方向に縞文を施文。無文部ハケ調 整ナデ。	覆土
9	甕	胴部上半	L R	にぶい褐	A・C・G	内面ナデ。外面横方向に縞文を施文。S字状結節が部分的に施される。	覆土	
10	甕	口縁部	R L		黒褐	A・C・D・G	内面横ナデ。口縁部の肥厚した部分と端部に縞文を施文する。無文部はノケ調整。	覆土
11	甕	口縁部	R L	にぶい黄褐	A・F・H	内面横ナデ。外面横方向に縞文を施文。口唇部丸みをもつ端部にヘラキザミを施す。	C4G	
12	甕	口縁部	R L		黒褐	B・C・G	内面ハケ調整後、横ナデ。外面やや段差のある輪横痕上に輪横痕の縦で縞文を横方向に施文。口唇部や丸みをもちラウ工具でキザミを施す。上から3番目の輪横痕上に連続する弦縞文がみられる。	覆土
13	甕	頭部～胴部			褐	A・B・D・G	内面胴部下半ハケ調整。外面ハケ調整後縞文を施文。輪横痕上に輪横痕の縦で下から上へ縞文を施す。	No.1・C4G・覆土
14	甕	口縁部			橙	A・B・G	内面横ナデ。外面縞ハケ調整後、口唇部直下横ナデ。指頭痕が明瞭である。口唇部や丸みを帯びる。	覆土 岩鼻式無文甕
15	甕	胴部上半		明赤褐	A・B・G	内面ハケ調整後、横ナデ。外面斜位にハケ調整後、6本一単位の櫛描波状文を反時計周りに施文。	覆土	
16	甕	胴部上半			明褐	A・F・G	内面ナデ。外面5本一単位の櫛描波状文を施文。	覆土
17	甕	頭部		明赤褐	B・C・G	内面ナデ。外面7本一単位の櫛描波状文を施文。	C4G	
18	甕	胴部上半		にぶい褐	A・B・G	内面ナデ。外面斜位にハケ調整後、6本一単位の櫛描波状文を上から下へ施文。	覆土	
19	土製 筋縫車			明赤褐	A・C・F・H	断面長方形。直径(4.9) cm、厚さ1.5 cm、孔径(0.6) cm、重量8.9 g、25%残存。ナデ調整。	覆土	
20	土製 筋縫車			明赤褐	A・C・F・H	断面長方形。直径4.5 cm、厚さ1.7 cm、孔径(0.7) cm、重量18.7 g、50%残存。ミガキ調整。	覆土	

第12表 第10号住居跡出土遺物観察表（第32図）

番号	器種	部位	縞文	赤彩	色調	胎土	特徴	備考
1	高坏	脚部			黄橙	B・C・G	内面輪横痕明瞭。外面横ミガキ。	覆土 接合部径4.2cm
2	甕	底部			橙	A・B・G	内外面ナデ。焼成前穿孔。	覆土 底径5.4cm

第13表 第1号方形周溝墓出土遺物観察表（第35図）

番号	器種	部位	縄文	赤彩	色調	胎土	特徴	備考
1	壺	胴部			橙	A・B・C・G	内面ハケ調整後、ナデ。頸部輪積痕が明顯に残る。外 面ハケ。	南溝 最大径 12.1cm
2	壺	口縁部			黒褐	A・C・D・G	口縁部外面縁ナデ。頸部に柳浦波状文を施す。頸部 から外反し口縁部に至る。口唇部は丸みをもつ端部に 木口状工具によりキザミを施す。	覆土
3	壺	頸部	R L		にぶい黄楓	F・H	内面横ナデ。外表面横方向に縄文を施す。	覆土
4	壺	胴部上半	L R		にぶい褐	A・F・G	内面横ナデ。外表面横方向に縄文を施す。	覆土
5	壺	胴部上半	L R		黒褐	B・C・G	内面横ナデ。外表面段差のない輪積痕上を輪積痕に關係 なく横方向に縄文を施す。	覆土
6	壺	口縁部		内外赤彩	橙	C・F・G・H	内面横ミガキ。外表面段差のある輪積痕の下端に木口状 工具でキザミを施す。口唇部内ソギ状。	覆土
7	壺	胴部		外面赤彩	明褐	B・G	内面横ナデ。外表面ハケ調整後ミガキ。	覆土

第14表 第8号溝跡出土遺物観察表（第37図）

番号	器種	部位	縄文	赤彩	色調	胎土	特徴	備考
1	壺	底部		外面赤彩	明黄楓	A・B・F・H	内面ハケ調整後、ナデ。外面縦ミガキ。	Nal 底径5.3cm

第15表 第19号土壤出土遺物観察表（第39図）

番号	器種	部位	縄文	赤彩	色調	胎土	特徴	備考
1	壺	口縁部	L r		明黄楓	A・E・F・G	内面横ナデ。外表面段差のない輪積痕上を輪積痕に關係 なく横方向に縄文を施す。口唇部やや丸みをもち、端 部に木口状工具によるキザミを施す。	覆土
2	壺	口縁部付 近	R L		黄楓	A・F・G	内面横ナデ。外表面や段差のある輪積痕上に輪積痕の 幅で横方向に下から上へ縄文を施す。	覆土
3	壺	頸部	R L	外面無文部 赤彩	明黄楓	A・C・G	内面横ナデ。外表面横方向に縄文を施文後、赤彩部分ミ ガキ。	覆土
4	壺	胴部上半	R L		にぶい黄楓	B・G	内面横ナデ。外表面横方向に縄文を施文後、赤彩部分ミ ガキ。	覆土

第16表 第26号土壤出土遺物観察表（第39図）

番号	器種	部位	縄文	赤彩	色調	胎土	特徴	備考
5	壺	口縁部付 近		外面赤彩	橙	C・F・H	内面ハケ調整後、横ナデ。外面と突帶状の輪積痕上に ヘラ状工具でキザミを施す。	覆土

第17表 第34号土壤出土遺物観察表（第39図）

番号	器種	部位	縄文	赤彩	色調	胎土	特徴	備考
6	壺	胴部上半	R L		明赤楓	A・B・G	内面横ナデ。外表面ハケ調整後、横方向に縄文を施す。 無文部はミガキを施す。	覆土
7	高坏	口縁部		外面赤彩	明赤楓	A・B・C・G	内面ナデ。外表面縦ミガキ。口唇部平底。	覆土 脚部径 13.3cm

第18表 調査区出土遺物観察表（第40～42図）

番号	器種	部位	縄文	赤彩	色調	胎土	特徴	備考
1	壺	口縁部付 近			橙	B・C・F・H	内面横ミガキ。外表面輪積痕端部に木口状工具でキザミ を施す。頸部ハケ調整後、ミガキ。	D76 復元口径 19.2cm
2	壺	頸部	R L		にぶい楓	B・G	内面ハケ調整後、横ナデ。外表面横方向に上から下へ縄 文を施す。頸部やや曲がった耳状突起が付く。單穿孔。 無文部ミガキ。	SS32 復元口径 18.0cm
3	壺	頸部			黄楓	A・B・E・F・G	内面横ナデ。外表面頸部に肉厚で縱長の耳状突起が付く。 單穿孔。無文部ミガキ。	S010(C86) 耳付
4	壺	頸部	R L	外面頸部 上半以上を 赤彩	にぶい黄楓	A・B・G	内面ハケ調整後、ミガキ。外表面横方向に下から上へ縄 文を施す。その後無文部ミガキ。頸部に穿孔達の中路 がある。	SS33 最大径 7.4cm、残存高 4.7cm
5	壺	口縁部			橙	A・B・G	内外面ハケ調整。口縁部受口状で端部は丸みをもつ。	SS32-Na258 口 径12.3cm
6	壺	底部			橙	A・G・H	内面ハケ調整後、横ナデ。外表面横ミガキ。小振りの底 部で側部下位が最大径となる所謂無花果形の器形を呈 する。	SS33 底径4.2cm 最大径14.0cm、 残存高5.5cm
7-a	無頸壺	口縁部	R L	外面赤彩・ 口唇部内面 赤彩	楓	B・C・F・G	内面ハケ。外表面縁部に縄文帯。横方向に上から下へ 施す。下端にヘラ状工具でキザミを施す。口唇部内ソ ギ状。一対の径3mmの焼成前穿孔がある。外側から 内側へ穿孔。	SS33 口径11.3 cm

番号	器種	部位	繩文	赤彩	色調	胎土	特徴	備考
7-b	無脣壺	口縁部	R L	外面赤彩・ 口唇部内面 赤影	橙	B・C・F・ G	内面ハケ。外面口縁部に纏文帯。横方向に上から下へ施文。下端にヘラ状工具でキザミを施す。口唇部内ソギ状。	SD1・C56 №36 と同一個体
8	壺	口縁部		内外面赤彩	橙	A・G・H	内面横ミガキ。外面横ミガキ。縦長の浮文が付く。口唇部内ソギ状である。	SS32 口径15.1 cm, 最大径15.9 cm
9	壺	底部		明黄褐	A・D・G		内外面ハケ調整。	SD6(C66) 底径 6.0cm
10	壺	底部			橙	A・G	内外面ハケ調整後ナデ。内面にバッタ状の剥落がある。	SD10 背系統 底径10.1cm
11	壺	底部		にぶい橙	A・B・G		内外面ハケ調整後ナデ。底部中央部分が最も厚みがある。	SS32 底径8.3 cm
12	高壺	口縁部		内外面赤彩	橙	A・C・G	内外面ミガキ。口縁部は水平に屈曲し、短く外方にのびる。	SS33
13	器台	脚部		外面赤彩	黄橙	C・F・H	内面ハケ調整。外面縦ミガキ。焼成後外側から穿孔される。	SD2 底径13.0 cm
14	高壺	接合部		内外面赤彩	明黄褐	A・C・G・ H	内面ナデ。外面ミガキ。接合部に突帯が巡る。	SD5 接合部径 4.3cm
15	高壺	接合部			橙	B・C・G	内外面ミガキ。接合部に突帯が巡る。磨減が激しい。	SS32 接合部径 4.4cm
16	高壺	接合部		外面赤彩	明赤褐	B・F・G	内面ミガキ。外面縦ミガキ。接合部分に剥落が見られる。	SS33 接合部径 3.6cm
17	高壺	接合部			明黄褐	B・G	外面縦ミガキ。接合部に突帯が巡る。	SD1(C56) 接合 部径5.1cm
18	高壺	脚部		内面赤彩	明黄褐	A・B・C・ G	内面ナデ。外面ハケ調整後、縦ミガキ。接合部に突帯が巡る。	CT6 脚部径9.3 cm, 接合部径 4.2cm
19	高壺	口縁部			明黄褐	A・B・G	外面縦ミガキ。接合部に突帯が巡る。	SD1 接合部径 7.8cm
20	高壺	接合部		内外面赤彩	浅黃橙	B・F・H	内面ナデ。外面ミガキ。接合部に突帯が巡る。	SD6(C66) 接合 部径6.7cm
21	瓶	底部			橙	C・F・H	内外面ナデ。穿孔は、やや歪んだ円形で、底部中央部分に穿たれている。焼成前穿孔である。	表採 底径4.7 cm
22	瓶	底部			橙	A・B・G	内外面ナデ。穿孔は、やや歪んだ円形で、底部中央部分に穿たれている。焼成前穿孔である。	SD1 底径5.4cm
23	甕	口縁部	R L	褐	C・F・H		内面ミガキ。外面横ミガキ。口縁部直下に無文部あり。	SS32 口径12.1 cm
24	甕	口縁部～ 頸部	R L	褐	A・B・G		内面横ナデ。外面輪郭線上にほぼ輪積痕の幅に合わせて纏文を施す。口縁部ヘラ状工具でキザミ。口縁部直下に無文部あり。	SS32 口径13.4 cm, 最大径14.2 cm, 残存高8.8cm
25	甕	底部		にぶい黄橙	A・B・G		内外面ハケ調整後、ナデ。	SD1(C56) 底径 6.9cm
26	甕	底部		褐	A・B・G		内外面ハケ調整後、ナデ。底部と胴部の接合部分は非常に滑らかである。	SS34 №3 底径 5.0cm
27	甕	底部		にぶい黄橙	B・D・G		内外面ナデ。	SD10(C86) 底 径6.8cm
28	甕	底部		にぶい黄褐	A・C・G		内外面ハケ調整後、ナデ。底部外面やや丸みをもつ。	G76 底径7.7cm
29	ミニチュア			にぶい黄橙	A・C・H		手捏。底部凹凸がみられる。	SS32 底径3.8 cm, 残存高2.1cm
30	ミニチュア			にぶい黄橙	A・B・G		手捏。口縁部角頭状になる。簡略化した波状文を施す。	BS6 口径4.6cm, 底径3.8cm、高 度2.7cm
31	壺	口縁部		明黄褐	A・B・G		内面ハケ調整後、横ナデ。外面ハケ調整後ナデ。口縁部折り返し下端に木口状工具でキザミを施す。口縁部や丸みを帯びる。	SS32
32	壺	口縁部付 近		内外面赤彩	にぶい橙	A・B・C・ F・H	内面横ミガキ。口縁部折り返し下端にヘラ状工具でキザミを施す。	SS32
33	壺	口縁部		内面赤彩	黄橙	C・F・H	内面横ミガキ。外面ミガキ突带上にヘラ状工具でキザミを施す。	SD6(C66)
34	壺	口縁部			黄橙	C・E・G	内面横ナデ。外面ナデ。突带上に木口状工具でキザミを施す。口縁部丸みをもつ。	SS34
35	壺	口縁部		にぶい黄橙	A・F・G		内面ハケ調整後ミガキ。外面ミガキ。段差のある輪積痕下端にヘラ状工具でキザミを施す。	C66
36	壺	口縁部付 近		内外面赤彩	浅黃橙	A・G	内面横ミガキ。外面突带上に木口状工具でキザミを施す。	SS32

番号	基種	部位	範文	赤彩	色刷	胎土	特徴	備考
37	壺	口縁部付近		内面赤彩	にぶい橙	B・F・II	内面横ミガキ。外面ミガキ。突帶上にヘラ状工具によりキザミを施す。	C4G
38	壺	口縁部付近		内外面赤彩	橙	A・B・F・G・H	内外面ミガキ。突帶上を木口状工具でキザミを施す。	B6G
39	壺	口縁部	L R		黄橙	B・C・E・G	内面横ナデ。外面口縁部折り返し、下端にヘラ状工具でキザミを施す。口縁部端面に羅文を施す。	B6G
40	壺	口縁部		内面赤彩	橙	A・C・G	内面横ミガキ。外面口縁部折り返し下端にヘラ状工具でキザミを施す。口軒部を尖らせる。	B6G
41	壺	口縁部		外面赤彩	橙	A・B・E・G	内面横ナデ。外面ナデ。折り返し口縁上に羅文を、下端をヘラ状工具でキザミを施す。口軒部外ソギ状。	B6G
42	亞	口縁部付近	R L	内外面赤彩	橙	A・G	内面横ミガキ。外側横ミガキ。段差のある輪横底上を輪横模様の縦に沿って羅文を横方向に施す。	SS32
43	亞	口縁部	L R		橙	D・F・G	内面横ナデ。外側横ナデ。折り返し口縁上に横方向に羅文を施す。口縁部は丸みを帯びる。	SD10(C5G)
44	表	口縁部			にぶい橙	A・G	内面横ケタ。外面ハケ調輪後横ナデ。口縁部は折り返し端部は尖る。	SS33
45	無縫壺	口縁部	R L		黄橙	A・F・H	内面横ナデ。外面口縁部に羅文帯。下端を沈線で区画する。無縫部前ミガキ。	SS33
46	壺	口縁部		内外面赤彩	橙	A・B・G	内面ハケ調輪後、縦ミガキ。外面ハケ調輪後横ミガキ。表採折り返し口縁。口容角部頭状。	
47	壺	胴部	R L	内外面赤彩	明黄褐	A・G	内面横ミガキ。外面輪縁紙上に羅文を施す。	C4G
48	壺	胴部	R L		風呂	A・G	内面横ナデ。外面赤方向に羅文施文後、ミガキ。部分的にBの圧痕がみられる。	
49	壺	胴部上半	L R		橙	C・G	内面ナデ。外面羅文施文後、沈線区画。	SS33
50	壺	胴部	L R	外面赤彩	浅黄橙	A・C・G	内面横ナデ。外面羅文施文後、沈線区画。赤彩部分ミガキ。	SS32
51	壺	胴部上半	R L	外面赤彩	浅黄橙	B・C・H	内面横ナデ。外面羅文施文後、赤彩部分ミガキ。	SS34
52	壺	胴部上半	R L		にぶい橙	C・E・G	内面横ナデ。外面横方向に羅文施文後横ナデ。	SS33(O6G)
53	壺	胴部上半	R L		橙	B・C・G・H	内面横ナデ。外面二帯の帶羅文、羅文施文後無文部横ナデ。	SS33
54	壺	胴部中位	I, R	外面赤彩	浅黄橙	A・G・H	内面ナデ。外面羅文施文後、沈線区画。赤彩部分横ミガキ。	SD1・C5G No.36と同一個体
55	壺	胴部中位	L R	外面赤彩	黄橙	A・B・C・G	内面横ナデ。外面羅文施文後沈線区画、赤彩部分ミガキ。	SS33
56	壺	胴部	L R	外面赤彩	橙	B・F・H	内面横ナデ。外面羅文施文後、赤彩部分ミガキ。	SS32
57	壺	胴部中位	R L	外面赤彩	橙	C・F・H	内面ハケ調輪後、横ナデ。外面羅文施文後、赤彩部分横ミガキ。	
58	壺	胴部		羽状		B・G	内面横ナデ。外面取上端を横沈線、下端を扇面状で区画しその間に羽状羅文を施す。	SD9(B6G) 南関東系か
59	壺	胴部上半	L R	外面赤彩	にぶい橙	A・B・D・G	内面横ナデ。外面横方向に羅文を施文後、ミガキ。	覆土
60	壺	胴部上半	L R	外面赤彩	にぶい黄橙	A・G	内面横ナデ。凹凸が明顯。外面羅文施文後、赤彩部分横ミガキ。	D7G
61	壺	胴部上半	R L		橙	A・B・G	内面横ハケ。外面横方向に羅文施文後、ナデ。	SS33
62	壺	胴部上半	R L		黄橙	A・B・F・H	内面横ナデ。外面羅文施文後無文部横ナデ。	SD10-D7G
63	壺	胴部上半	L R		橙	C・D・G・H	内面横ミガキ。外面横方向に上から下へ羅文を施す。	C6G
64	壺	胴部上半	L R		明黄褐	A・B・D・G	内面横ナデ。外面横方向に羅文を施す。	SS33
65	壺	胴部上半	R L		橙	A・C・G	内面横ナデ。外面横方向に羅文を施す。	SS33
66	壺	胴部上半	L R		にぶい黄橙	A・B・G	内面横ナデ。外面羅文施文後、横ミガキ。	SS33
67	壺	胴部上半	L r		橙	A・B・G	内面ハケ。外面綻方向に羅文を施す、無文部ナデ。	SS33
68	亞	胴部	R L		橙	A・B・G	内面横ナデ。外面横方向に上から下へ羅文を施す。	SS33-O6G
69	壺	胴部上半	R L		にぶい橙	B・C・C・H	内面横ハケ。外面横方向に羅文を施す。	D4G

番号	器種	部位	纏文	赤彩	色調	胎土	特徴	備考
70	壺	胴部上半	L R		にぶい橙	A・B・G	内面ハケ。外面S字状結節を伴う纏文を施文。	SS33
71	壺	頸部	R L		明黄褐	A・B・G	内面横方向に下から上へS字状結節を伴う纏文を施文。	SS33
72	壺	頸部	L R		にぶい橙	B・G	内面ハケ調整後、ナデ。外面S字状結節を伴う纏文を施文。	SS33
73	壺	胴部上半	L r		明褐	A・B・C・G	内面ハケ。外面横方向に纏文を施文。	SS33
74	壺	胴部上半	R L	外面赤彩	橙	B・C・G	内面横ハケ。纏文を横方向に施文後、赤彩部分横ミガキ。	SS33
75	壺	胴部上半	R L	外面赤彩	橙	B・C・G	内面ハケ。外面纏文施文後、赤彩部分ミガキ。	SS33
76	鉢	口縁部			明黄褐	A・B・C・G	内外面横ナデ。口縁部短く折り返す。口唇部や丸みを帯びる。	B66
77	鉢	口縁部			にぶい橙	A・C・F・H	内面横ハケ。口縁部直立し口唇部丸みを帯びる。	SS32
78	高坏		R L		明赤褐	B・C・E・G	内面横ナデ。折り返し口縁線上に纏文を施文する。口唇部平坦で外方に短く突出する。	SS33
79	高坏	口縁部			橙	A・G	内面横ミガキ。外輪輪積痕下端を木口状工具でキザミを施す。口縁部短く外方にのびる。	B66
80	高坏	口縁部			橙	A・C・G	内面横ミガキ。輪積痕の下端を木口状工具でキザミを施す。	SS34・B66
81	壺	頸部	R L		橙	A・B・E・G	内面ハケ調整後、横ナデ。外面段差のある輪積痕上に輪積痕の幅に合わせて横方向に下か上に纏文を施文する。	SD7(C56)
82	壺	口縁部	R L	内面赤彩	黄橙	A・F・G	内面ミガキ。外面あまり段差のない輪積痕上を輪積痕に關係なく纏文を施文。口唇部や丸みを帯びる。	SS32
83	壺	口縁部	R L		明黄褐	A・F・H	内面横ナデ。外面段差のない輪積痕上を輪積痕に關係なく横方向に上から下へ纏文を施文。口唇部丸みをもち、端部に纏文を施文する。	SS33
84	壺	口縁部	R L		明黄褐	A・B・C・G	内面ハケ。外面段差のない輪積痕上を輪積痕に關係なく横方向に上から下へ纏文を施文する。口唇部丸みをもち、へラ状工具でキザミを施す。	SS33
85	壺	口縁部～頸部	R L		黒褐	F・G	内面横ナデ。外面横方向に纏文を施文。口唇部平坦でへラ状工具でキザミを施す。	SS32
86	壺	口縁部	R L	にぶい黄橙	A・B・G	内面横ナデ。外面横方向に纏文を施文。口唇部丸みをもち、へラ状工具でキザミを施す。口唇部直下無文部あり。	B66	
87	壺	口縁部	R L		黄橙	A・G	内面横ナデ。外面横方向に纏文を施文。口唇部丸みをもち、木口状工具でキザミを施す。口唇部直下無文部あり。	SS33
88	壺	口縁部	R L		黒褐	A・G	内面横ナデ。外面横方向に下から上へ纏文を施文。口唇部内ソグダ形。木口状工具によりキザミを施す。	C46
89	壺	口縁部	R L	にぶい黄橙	A・C・G	内面横ナデ。外面横方向に上から下へ纏文を施文。口唇部丸みをもつ。	B56	
90	壺	口縁部			橙	A・B・G	内面横ナデ。外面輪積痕上に指押さえの跡が明顯に残る。口唇部丸みをもちへラ状工具でキザミを施す。	SD4 輪積焼
91	壺	口縁部	L r		褐	A・F・G	内面横ナデ。口唇部や丸みをもちへラ状工具でキザミを施す。	SS33
92	壺	頸部	R L		明黄褐	A・B・G	内面ハケ調整後横ナデ。外面あまり段差のない輪積痕上を輪積痕の幅に合わせて纏文を施文。	B56
93	壺	頸部	L R	にぶい黄橙	A・C・H	内面横ナデ。外面や段差のある輪積痕上を輪積痕の表採に合わせて下から上へ纏文を施文。	SS33	
94	壺	胴部上半	L r		明褐	A・B・C・H	内面ハケ調整後、横ナデ。外面横方向に下から上へ纏文を施文。	SS33
95	壺	胴部上半	L R	にぶい褐	A・B・G	内面横ナデ。外面横方向に纏文を施文。	SS33	
96	壺	頸部	L R	にぶい黄橙	A・C・G	内面横ミガキ。外面段差のない輪積痕上を輪積痕に關係なく纏文を施文。	SS33	
97	壺	頸部	R L	にぶい黄橙	A・B・G	内面横ナデ。外面段差のみられない輪積痕上を輪積痕に關係なく纏文を施文。	SS33	
98	壺	胴部上半	L R		明褐	B・G	内面ナデ。横方向に纏文を施文。無文部ハケ調整後ナデ。	SS32
99	壺	胴部上半	L R		黒褐	B・C・G	内面横ナデ。外面ハケ調整後、纏文施文。	SS33
100	壺	頸部	R L		橙	A・B・G	内面横ナデ。外面纏文施文。	SS33

番号	器種	部位	縞文	赤彩	色調	胎土	特徴	備考
101	甕	頸部	R L		橙	A・B・G	内面横ナデ。外面横方向に縞文を施す。	SS33
102	甕	頸部	R L		灰褐	A・B・C・G	内面横ハケ。外面横方向に縞文を施す。	SD10(D7G)
103	甕	胴部上半	擬縞文	にぶい黄褐	A・C・G	内面横ナデ。外面縞文施文後、ハケ。	表採	
104	甕	胴部上半	R L		橙	B・C・G	内面ハケ調整後、横ナデ。外面ハケ調整後、縞文を施す。	SS33
105	甕	胴部上半	R L		橙	B・G	内面横ナデ。外面ハケ調整後、縞文を施す。	表採
106	甕	胴部上半	L r		橙	C・F・H	内面横ナデ。外面横方向に縞文施文後、無文部横ハケ後ナデ。	SS34
107	甕	頸部	L L	にぶい黄褐	A・B・G	内面横ナデ。外面斜方にハケ調整後横方向に縞文を施す。	SS33	
108	甕	頸部	R L	にぶい黄褐	A・F・H	内面横ナデ。外面縞ハケ後、横方向に縞文を施す。縞文は太さの異なる物を擲って付加条風に見える。	SD10(D6G)	
109	甕	胴部	R L		橙	A・G	内面剥落。外面横方向に縞文を施す。縞文は太さの異なる物を擲って付加条風に見える。	SS32
110	甕	胴部	R L	にぶい黄褐	A・G	内面横ハケ。外面ハケ調整後、横方向に縞文を施す。縞文は太さの異なる物を擲って付加条風に見える。	SD1(D5G)	
111	甕	口縁部			橙	A・B・G	内面ハケ調整後横ナデ。外面ナデ、口唇部にヘラ状工具キザミを施す。口縁部内側に折り返す。	B6G
112	甕	口縁部			褐	A・C・G	内外面ハケ。口唇部丸みをもち、端部にヘラ状工具でキザミを施す。	B5G 岩鼻式無文甕
113	甕	口縁部			橙	A・E・G	内面横ナデ。外面櫛描波状文を施文するが、磨滅していく見づらい。	SS33 磨耗で不明
114	甕	口縁部		にぶい褐	A・B・G	内外面ハケ調整後、口唇部直下を横ナデ。口唇部内ソギ氣味で、端部にヘラ状工具でキザミを施す。	SS33 岩鼻式無文甕	
115	甕	口縁部		にぶい黄橙	A・B・G	内外面ハケ。口縁部短く外方にのびる。口唇部内ソギ状。	SS33	
116	壺	口縁部		明赤褐	A・B・G	内面横ナデ。外面折り返し口縁上を6本一単位の櫛描波状文を施す。口唇部内ソギ状。	覆土	
117	壺	口縁部			橙	A・B・G	内面ハケ調整後、横ナデ。折り返し口縁上に5本一単位の櫛描波状文を施す。口唇部端部に櫛描波状文を施す。	表採
118	甕	口縁部			黒褐	A・C	内面ハケ調整後、横ナデ。外面5本一単位の櫛描波状文を施す。口唇部へラ状工具によりキザミ。	SS33
119	甕	口縁部			橙	B・C・G	内面横ナデ。外面6本一単位の櫛描波状文を施す。	SS32
120	甕	口縁部		明赤褐	A・B・G	内面横ナデ。外面ハケ調整後、6本一単位の櫛描波状文を上から下へ施す。内ソギ状の口唇部に木口状工具でキザミを施す。	SS33	
121	甕	頭部		にぶい褐	B・E・H	内面ハケ調整後横ナデ、外面頭部に時計回りの6本一単位の縦状文と波状文を施す。	表採	
122	甕	頭部			褐	A・B・G	内面横ナデ。頭部に5本一単位の三連止めの連状文と波状文を施す。	SS32
123	甕	頭部		にぶい褐	A・B・G	内面横ナデ。外面ハケ調整後、6本一単位の櫛描波状文を施す。	SS33	
124	甕	頭部		明赤褐	A・B・F・G	内面ハケ調整後、横ナデ。外面4本一単位の櫛描波状文を施す。	SS33	
125	甕	胴溝上半			褐	A・B・C・G	内面横ナデ。外面6本一単位の櫛描波状文を施す。	SD1(C5G)
126	壺	胴部上半			橙	A・B・G	内面横ナデ。外面10本一単位の櫛描文を施す。東海系。	B6G
127	壺	胴部上半			橙	A・B・G	内面横ナデ。外面10本一単位の櫛描文を施す。東海系。	SS33
128	壺	胴部上半			橙	A・B・G	内面横ナデ。外面10本一単位の櫛描文を施す。東海系。	SS33
129	甕	頭部		にぶい黄橙	A・B・F・G	内面横ナデ。外面7本一単位の櫛描波状文を施す。	SS33	
130	甕	頭部		明黄褐	A・B・F・H	内面ハケ調整後横ナデ。外面ハケ調整後、5本一単位の櫛描波状文を施す。	SS33	
131	甕	頭部			褐	A・B・F・G	内面横ナデ。外面5本一単位の櫛描波状文を施す。	B6G
132	甕	頭部		にぶい黄橙	A・B・G	内面横ナデ。外面5本一単位の櫛描波状文を施す。	SS33	
133	甕	頭部			橙	B・E・G	内面横ナデ。外面斜方にハケ調整後、5本一単位の櫛描波状文を施す。	SS33

番号	器種	部位	圖文	赤彩	色調	胎土	特徴	備考
134	甕	頸部		にぶい赤褐	B・D・G		内面横ハケ。外面斜位にハケ調整後、6本一単位の櫛描波状文を施文する。	表採
135	甕	頸部		にぶい黄褐	A・B・G		内面ハケ調整後、横ナデ。外面6本一単位の櫛描波状文を施文する。	SS33
136	甕	胴部上半		橙	A・B・G		内面横ナデ。外面5本一単位の櫛描波状文を施文する。	B66
137	甕	頸部		にぶい褐	A・B・F・G		内面横ハケ。外面斜位にハケ調整後、4本一単位の櫛描波状文を施文する。	SS33
138	甕	頸部		橙	A・B・G		内面横ナデ。外面5本一単位の櫛描波状文を施文する。	SS33
139	甕	頸部		灰褐	A・C・G		内面横ナデ。外面刷毛調整後、8本一単位の櫛描波状文を施文する。	SS32
140	土製勾玉			明赤褐	A・C・F・H		径1.3×1.3cm、重量3.1g、30%残存。ナデ調整。	SS32
140	土製 筋跡車			明赤褐	A・G・H		断面長方形、直径4.5cm、厚さ1.5cm、孔径0.7cm、重量19.4g、50%残存。ミガキ調整	SS32

【凡例】

胎土 A：白色粒子 B：黒色粒子 C：赤色粒子 D：雲母 E：片岩 F：白色針状物質 G：小石 H：砂粒

3. 古墳時代後期の調査

(1) 古墳跡

毛塚32号墳 (第43・44・46～48図)

調査区中央のB～E-7・8グリッド、C・D-6～9グリッドに位置し、地形的には平坦地から斜面地に移行する台地の肩の部分に立地している。墳丘北側において第1号方形周溝墓を壊しており、前代における低墳丘墓の立地を踏襲したあり方を示す。しかし、近世になると北周溝と重複するように東西方向に延びる第4・6・9号溝跡や墳丘を横断する第10号溝跡などの区画溝の存在から、屋敷地の一部として土地利用され、大きく変貌していた様子が読み取れる。

調査着手以前は、完全に墳丘が削平され、古墳の所在についてはまったく知られていなかった。試掘調査によって新たに古墳の所在が確認されたため、東松山市教育委員会と協議をおこない、毛塚32号墳と呼称することとなった。同様に、新しく所在の確認された残りの2基の古墳跡についても、毛塚33・34号墳と編号した。

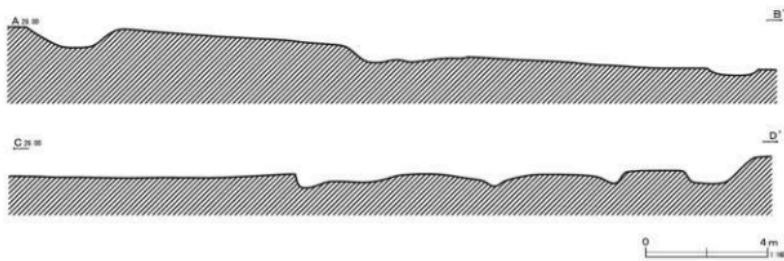
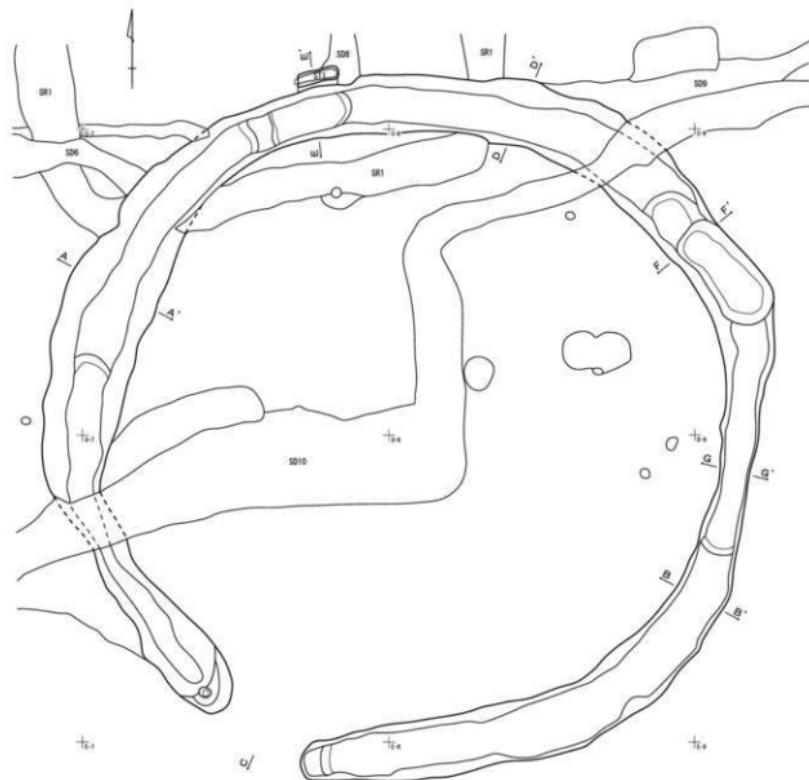
調査の結果、南西方向に開口する地山ローム掘り残しによる陸橋部をもった円墳であることが明らかとなつた。また、周辺埋葬として北周溝外縁に営まれた埴輪棺が1基検出された。古墳の規模は、墳丘

径19.2m、周溝径23.1mを測り、陸橋部を基準とした主軸方位はN-23°-Eを指す。

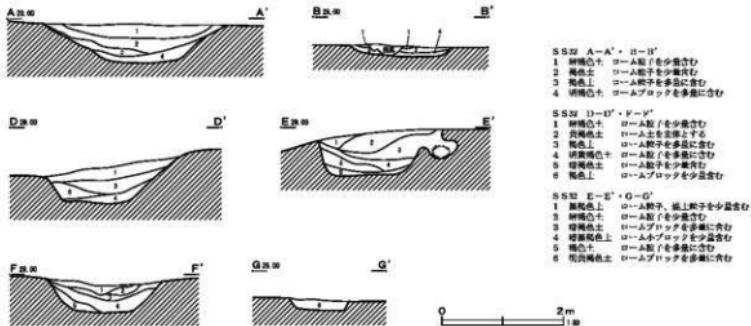
周辺における古墳の分布は、西側に第33号墳と第28号墳が一列に並び、北西側に第34号墳が近接しているのに対し、地形的な制約が大きく左右したためか、東側には古墳の分布が統一せず、東へ約180m離れた馬の背状の台地頂部に単独で第1号墳が所在しているにすぎない。

毛塚古墳群は、現状では前方後円墳の所在は確認されておらず、墳丘径42mの円墳の第27号墳が最大で、大半は墳丘径が20mに満たない小円墳によって占められている。第32号墳は墳丘径がわずかに20mに達していないが、後述するように多量の埴輪を出土し、從属的な埋葬施設である埴輪棺を付設していることを勘案すれば、有力墳のひとつに含めることも許されるであろう。

周溝は、台地平坦部側では幅2.0～3.0mと幅広く、深度も0.6～0.7mと深いのに対し、南東側では幅、深度ともに最小となる。周溝の断面形は逆台形を呈し、周溝外側に比べ、内側の側壁が急角度で立ち上がる。ただし、円筒埴輪がまとまって出土した北西周溝では両側とも立ち上がりが緩やかとなっていた。周溝底面は周溝掘削土の埋戻しによって全



第43図 毛塚32号墳(1)



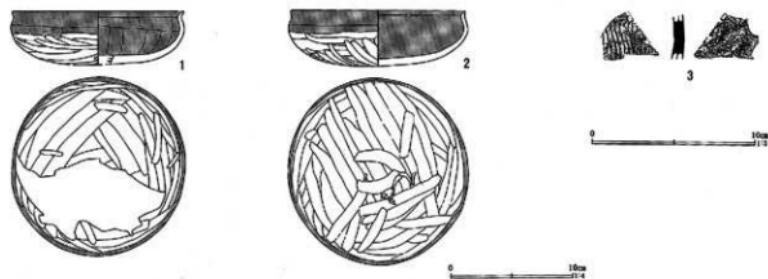
第44図 毛塚32号墳(2)

体に平坦にならされていたが、土壤状に一段深く掘り込まれた箇所や、土橋状に盛り上がる箇所が確認された。

周溝覆土は、各周溝でそれぞれ異なる堆積状況を示し、均一性は低い。基本的な土層の堆積状況は、最下層に周溝掘削土の埋戻しに起因するロームブロックを多量に含む明褐色土が堆積し、中層にはローム粒子を含む褐色土、最上層には暗褐色土や黒褐色土が堆積していた。それに対し、斜面下部の東周溝ではロームブロックを多量に含む明黄褐色土が厚く

堆積しており、斜面のため周溝の掘削が浅くなっていた可能性がある。遺物は、南東周溝と北東周溝の2箇所から底面に伏せ置かれた土師器坏が出土している(第45図)。南東周溝の底面中央から出土した1の坏は、口縁部外面及び内面に赤彩が施され口縁部がS字状に屈曲した比企型坏である。口径14.2cmと大振りで、底部中央が大きく削られていた。

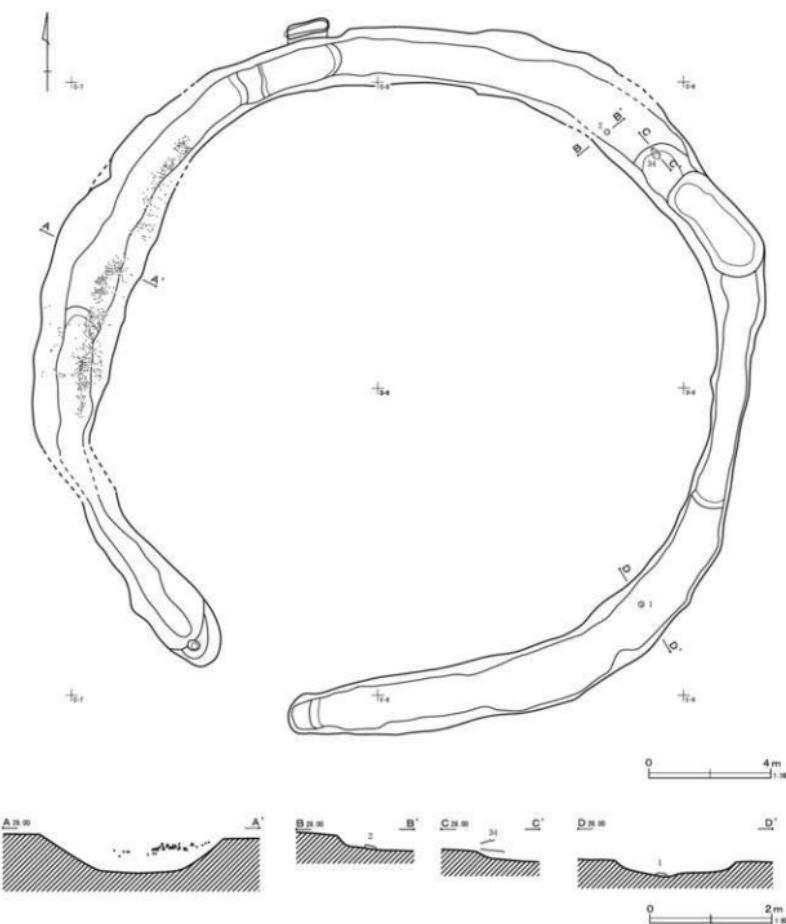
また、北東周溝から出土した2の坏は、壇寄りの底面に口縁を下に伏せて置かれていた。1と同じ口径14.3cmの大振りの赤彩された比企型坏である。



第45図 毛塚32号墳出土遺物(1)

第19表 毛塚32号墳出土遺物観察表(第45図)

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存	出土位置	備考
1	土師器坏	14.2	4.4		A FH J	良好	引赤褐	75	南東周溝	比企型坏 口縁部外面及び内面赤色塗彩
2	土師器坏	14.3	4.6		A FH J	良好	にぼい赤褐	100	北東周溝	比企型坏 口縁部外面及び内面赤色塗彩
3	須彌器壺				AG J	良好	青灰		西北周溝	外平面平行叩き目 内面當て具痕消し

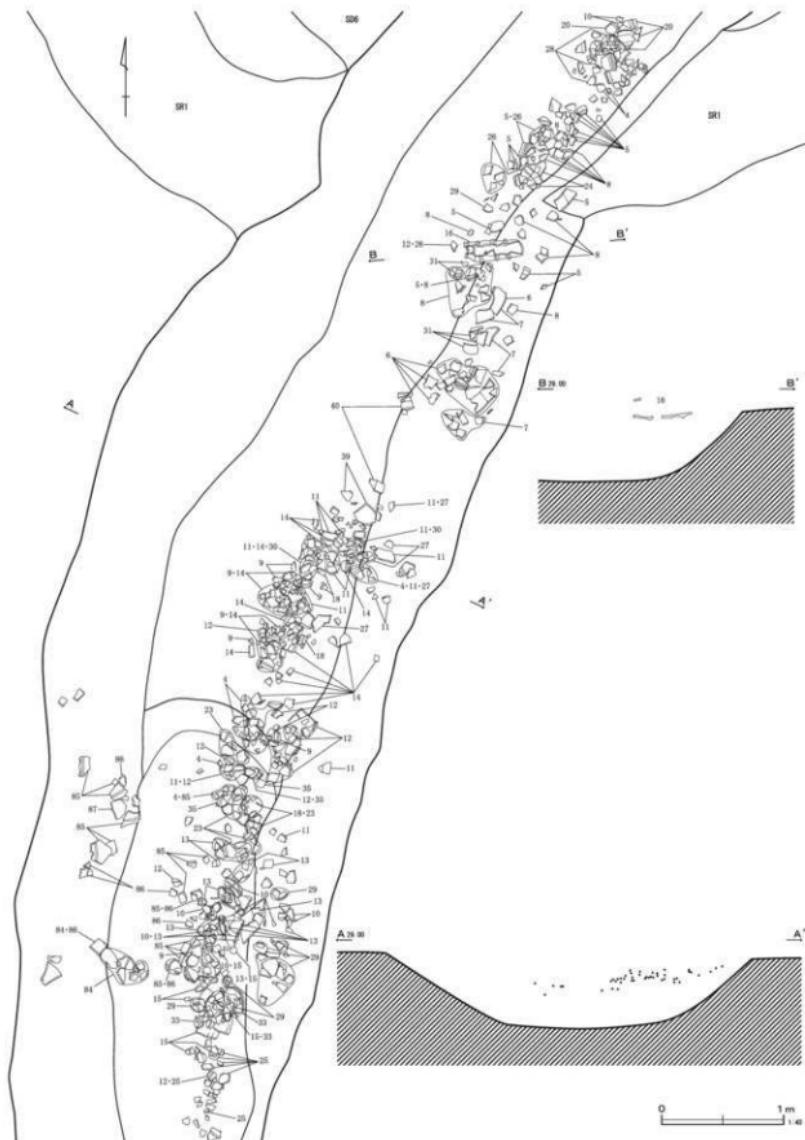


第46図 毛塚32号墳遺物出土状況図(1)

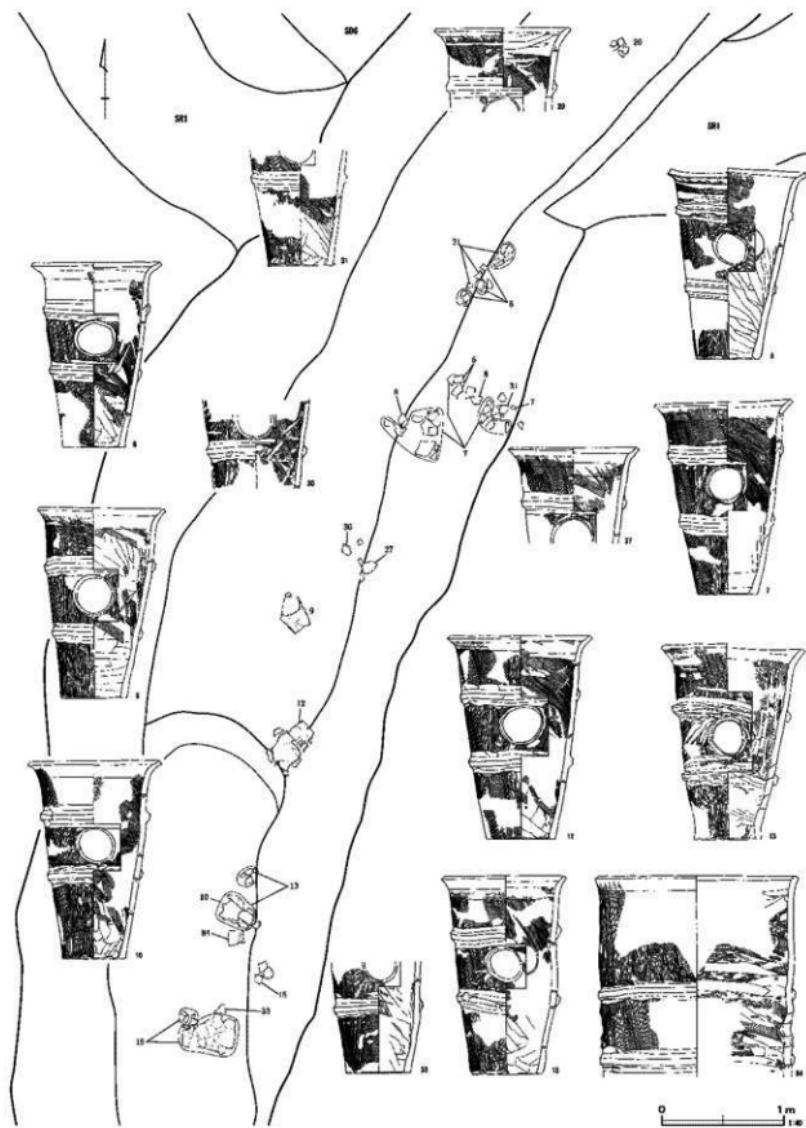
この2点は器形や法量が近似しており、比較的近接した時期の所産と考えられる。年代的には体部の扁平化があまり進行していないことから、6世紀後葉を中心とする年代に位置づけられる。この他に3の須恵器甕の胴部破片が北西周溝から出土している。外面には平行叩き目を残し、内面の当て具痕はナデ

消されている。

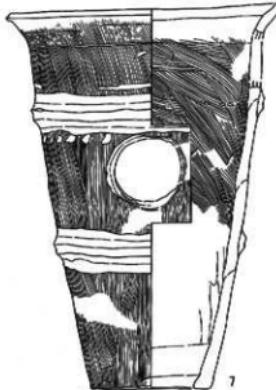
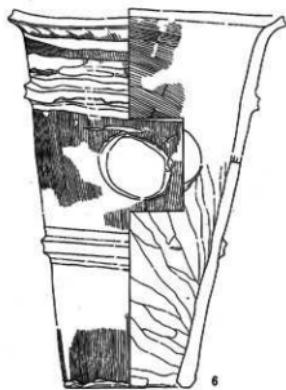
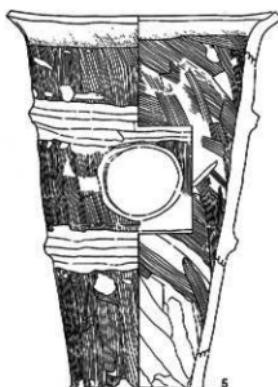
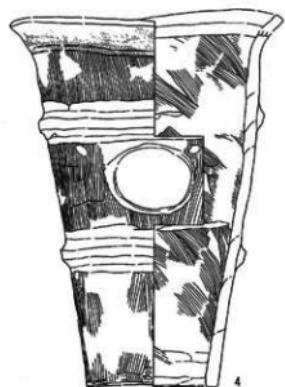
埴輪は、北西周溝の覆土上層からまとまった状態で出土した(第47・48図)。南北約10mの範囲において、多くは細片となって埴丘側から流れ込んだ状態で出土した。ただ、後述する5条窓帶の大型円筒埴輪(84~87)の破片だけは、周溝の外側から流



第47図 毛塚32号墳遺物出土状況図(2)

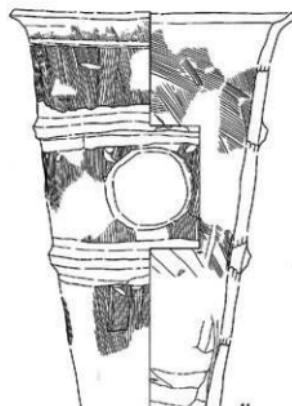
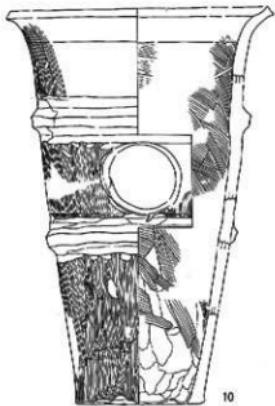
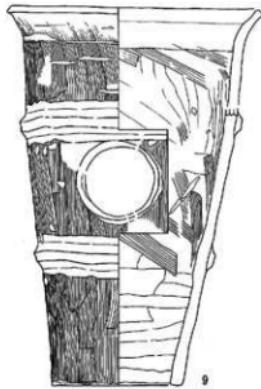
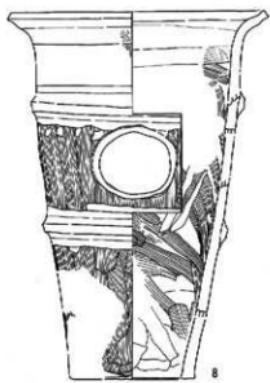


第48図 毛塚32号墳遺物出土状況図(3)



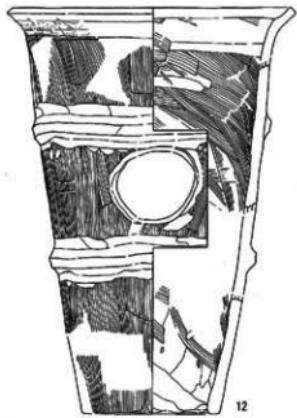
0 10cm

第49図 毛塚32号墳出土遺物(2)

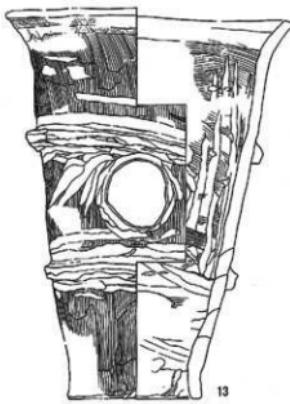


0 1cm

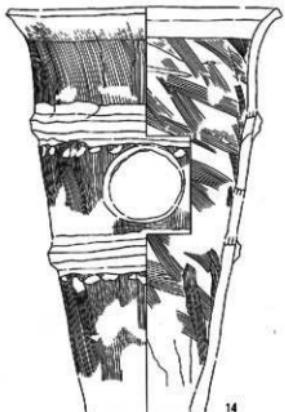
第50図 毛塚32号墳出土遺物（3）



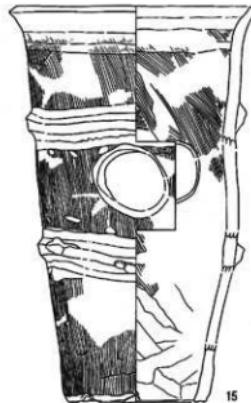
12



13



14

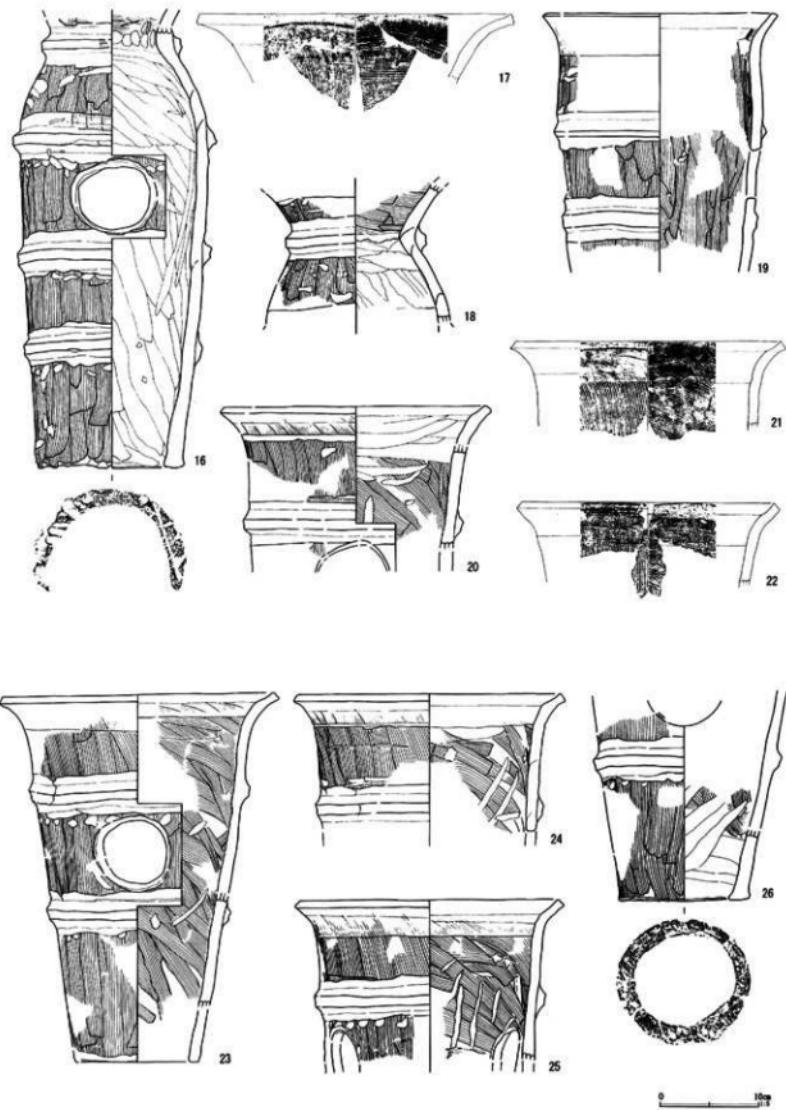


15

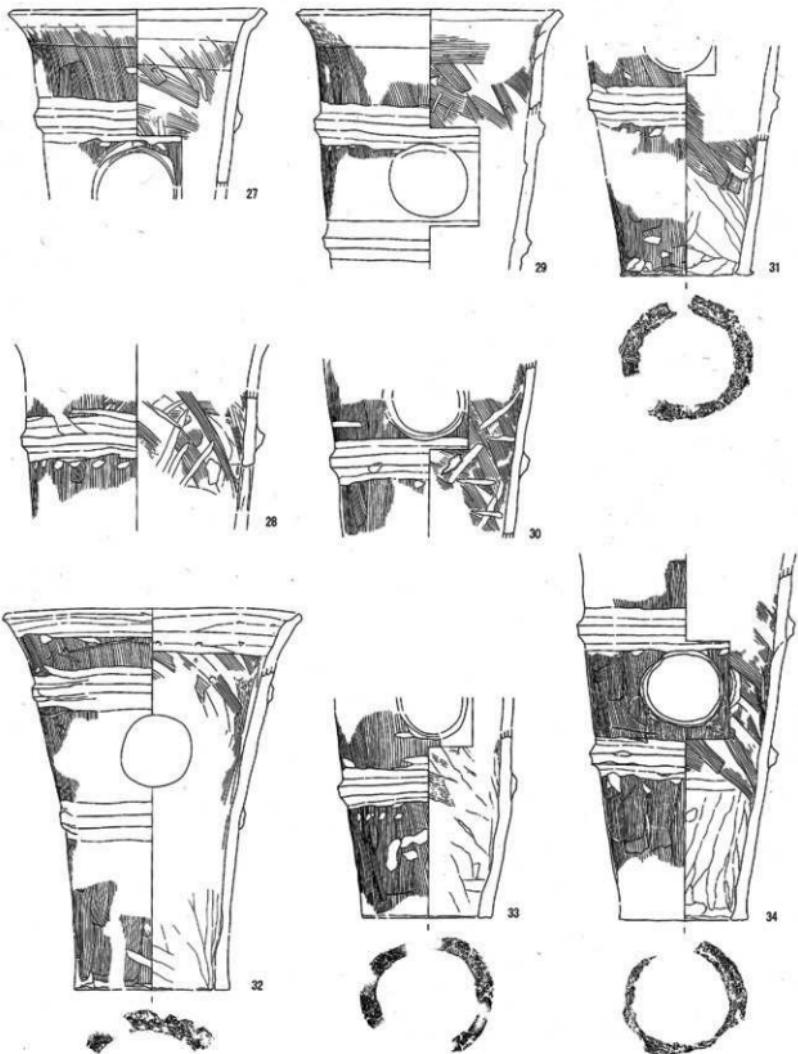


0 1cm

第51図 毛塚32号墳出土遺物(4)



第52图 毛塚32号填出土遺物(5)



第53図 毛塚32号墳出土遺物（6）

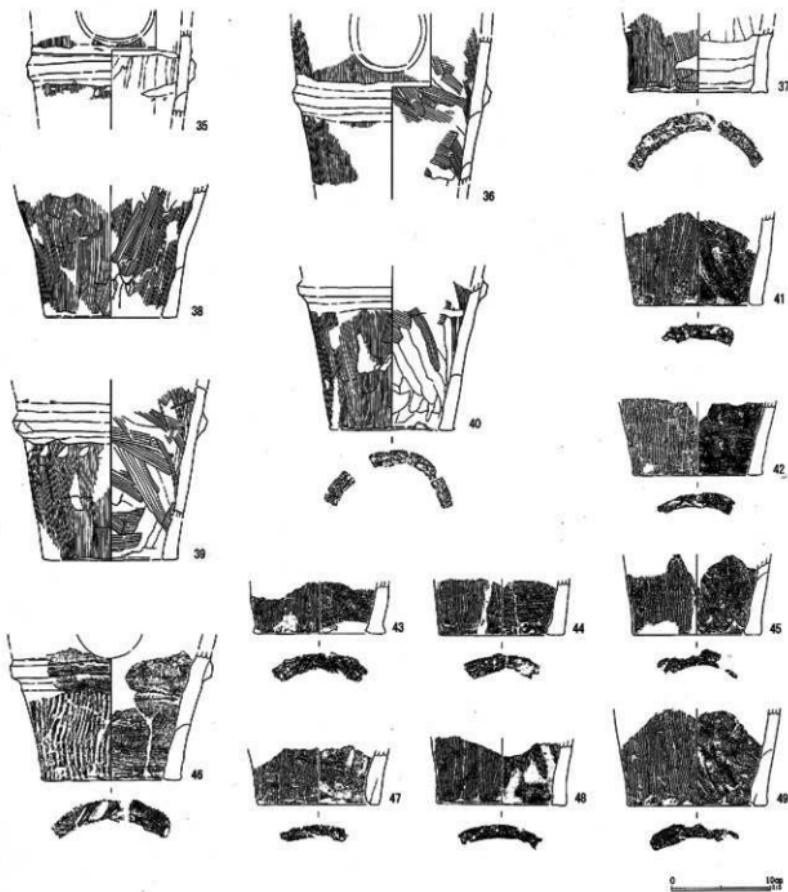
0 10cm

れ込んだ状態で出土しており、注目される。なお、周溝の他の部分では埴輪の出土量が全体に少なく、わずかに北東周溝の土師器環2の南側から34の円筒埴輪が単独で出土しているだけである。これらの点から築造当初、かなり限定的な埴輪の樹立がおこなわれていた可能性が高いと考えられる。

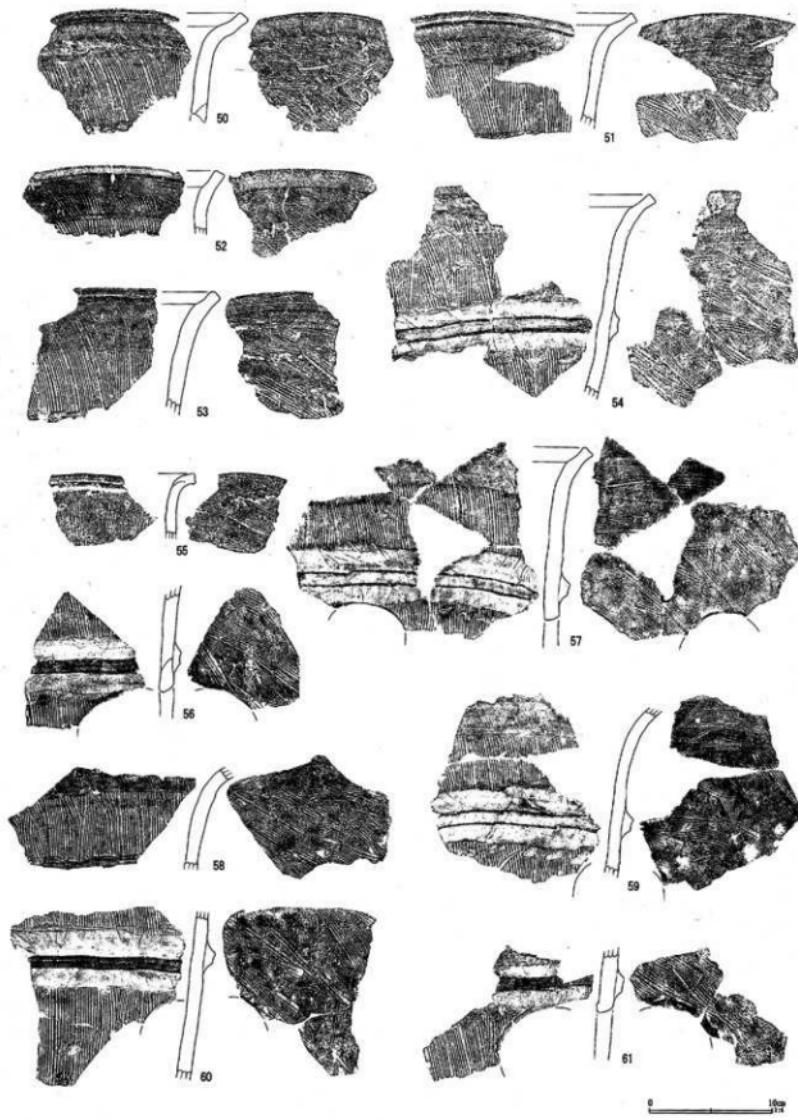
出土した円筒埴輪は2条突帯3段構成のものが主

体を占め、例外的に5条突帯6段構成と推定される大型品の破片が含まれていた(第49~58図)。また、朝顔形埴輪は花状部や頸部などの特徴的な部位から識別できたものが3点しかなく(16~18)、全体に占める割合は低いものと考えられる。

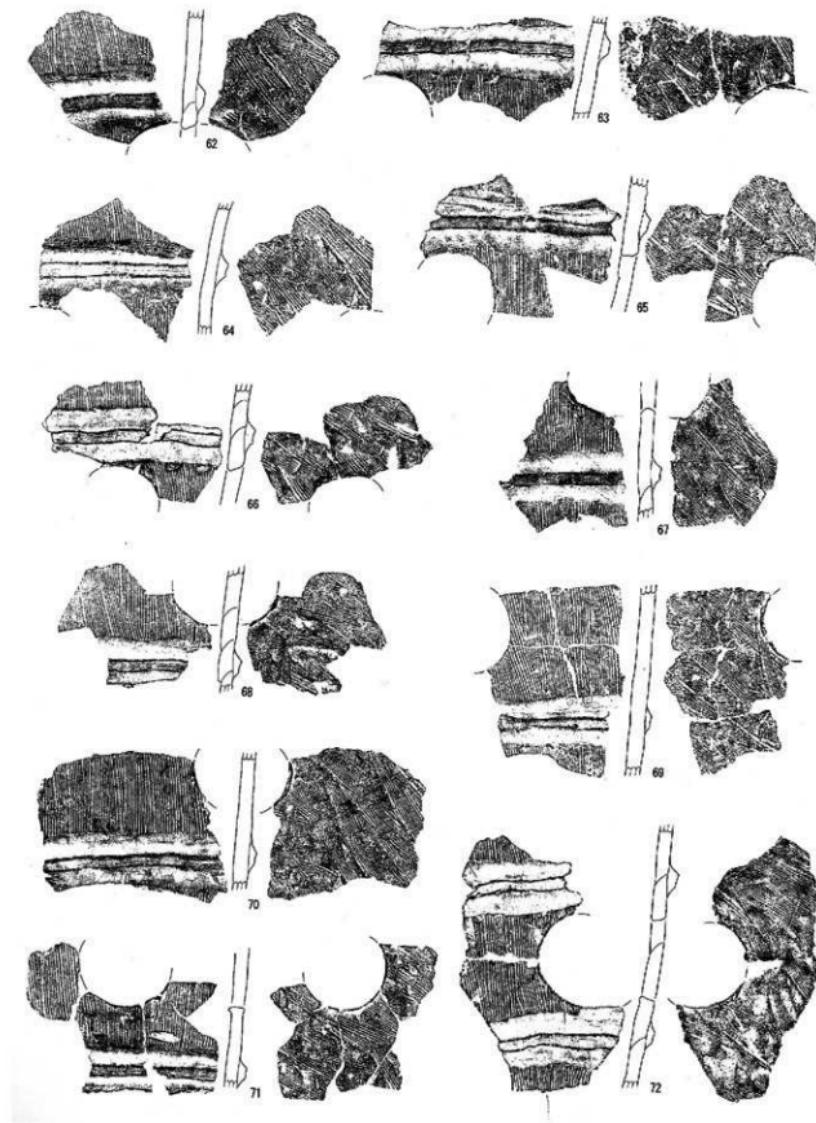
円筒埴輪の法量は、残りの良いものを中心で検討すると口径25.2~29.4cm、器高37.7~41.6cm、



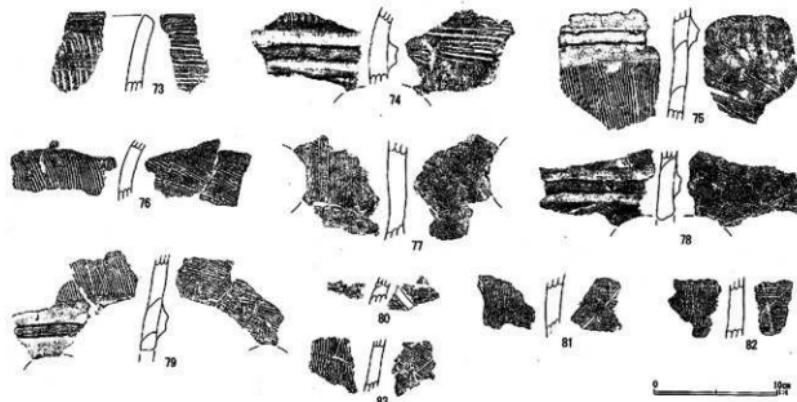
第54図 毛塚32号墳出土遺物(7)



第55圖 毛塚32號填出土遺物（8）



第56図 毛塚32号墳出土遺物(9)

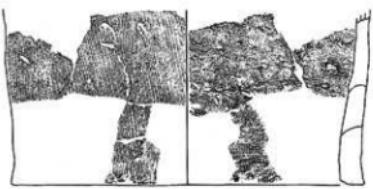
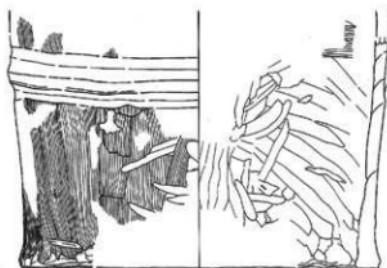
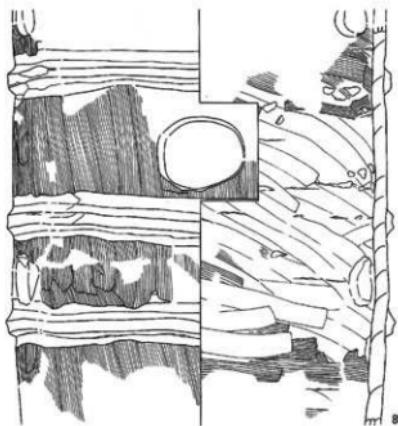
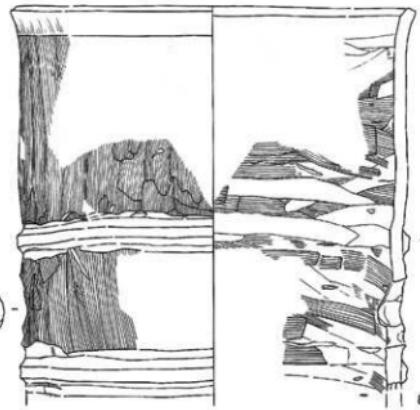


第57図 毛塚32号墳出土遺物(10)

第20表 毛塚32号墳出土円筒埴輪計測表(第49～54図)

単位(cm)

番号	口径	器高	底径	段長	段長	口縁長	口縁高	底径	第1突帯		第2突帯		通孔 幅×高	備考
									幅	高さ	幅	高さ		
									3.2	0.8	3.1	0.7	⑦ 10×9.3	
									2.5	0.6	2.6	0.7	⑨ 9×8.7	
									2.4	0.6	2.3	0.7	6.3×(7.0)	
									2.9	0.6	3.3	0.6	7.6×(8.1)	
									3.0	0.7	2.8	0.7	8.5×8.8	
									3.0	0.7	2.7	0.7	8.1×8.4	
									2.2	0.6	3.0	0.8	② 9×(8.2)	
									3.0	0.7	2.9	0.7	8.2×(9.0)	
									3.1	0.7	2.9	0.6	7.9×(9.1)	
									2.4	1.0	2.3	1.0	8.2×8.5	
									2.6	0.6	3.5	0.7	8.1×(8.4)	
									2.9	0.9	3.5	0.9	7.4×(7.6)	朝顔形
													7.6×(8.8)	朝顔形
														朝顔形
段長:		段長:		突起幅		一 高								
頸部径		頸部突起幅		高										
									2.3	0.4	1.9	0.4		
											3.6	0.8		
													7.8×8.0	
											2.6	0.6		
											2.9	0.6		
											3.9	0.8		
											2.8	0.7		
											3.0	0.8		
											3.0	0.9		
											2.4	0.6		
											2.7	0.7		
											3.0	0.8		
											2.5	0.6		
											2.3	0.4	2.2	0.6
											3.2	0.6		7.3×7.1
											2.8	0.9	3.1	0.9
											2.9	0.7		7.8×8.6
											2.9	0.7		
											2.9	0.7		
											2.5	0.7		
											2.5	0.8		



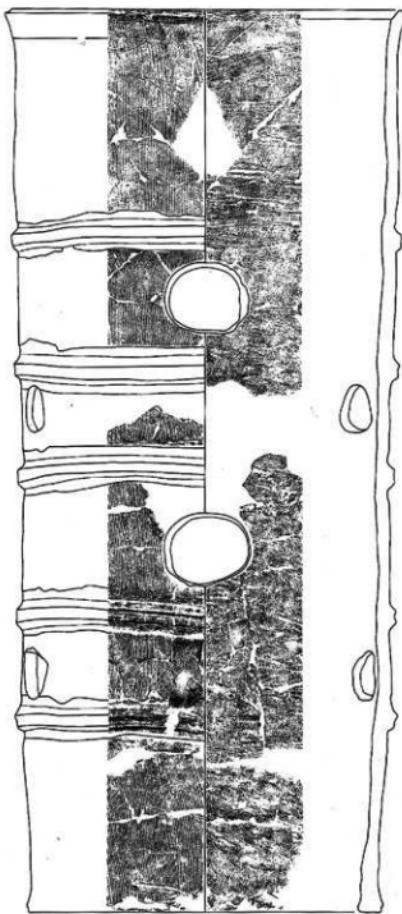
0 10cm

第58図 毛塚32号墳出土遺物 (11)

底径 12.0～14.2 cm の範囲に収まり、平均値は口径 27.8 cm、器高 39.6 cm、底径 13.1 cm である。また、各段間の長さは、1 段長 12.8～17.1 cm、2 段長 12.7～15.9 cm、口縁長 8.5～13.2 cm とやや幅があり、各段の器高に占める割合は、1 段 32.2～42.2%、2 段 29.1～41.0%、口縁 21.9～32.0% で、平均値を求めるとき 1 段 37.2%、2 段 34.2%、口縁 28.5% となり、等間隔よりも若干最下段が長く、口縁部が短い傾向が読み取れる。形態的には口縁部が大きく外反し、口縁部のヨコナデを幅広く施し、特に端部内面を強くヨコナデして底面を作る。外面調整はタテハケ、内面調整は最下段部分にヨコないしナナメのナデを丁寧に施し、中位以上にナナメハケを施す。透孔は 2 段目の上寄りに円孔を開け、穿孔部分にナデを入れて施す。突帯は断面台形を呈している。特徴としては、タテハケ調整後、突帯を貼付する前に突帯下側に連続する不整円形の擦痕がみられることがある。突帯貼り付けの「断続ナデ技法」による痕跡の可能性も考えられるが、その成因については明確でない。

84～87 の 4 点は、接合はないが同一個体と考えられる大型円筒の破片である。第 59 図に示した復元図のように 5 条突帯 6 段構成に復元され、口径 41.3 cm、器高 93.0 cm、底径 36.7 cm を測る。口縁部と最下段の幅が、他の段間よりも幅広になっている。円形の透孔を 2～4 段の各段に直交するように穿孔し、段間幅のやや狭い 2・4 段目には小さな透孔が穿たれている。

築造時期については、出土した比企型壺に大型化の傾向がうかがわれることから、第 33 号壺よりも後出することは確実であろう。しかし、円筒埴輪の形態は最下段が伸長化し始めているが、突帯を等間隔に配置する意識がみられることから、土器の年代観よりもやや古い様相がうかがわれる。ここでは 6 世紀中葉に位置づけておきたい。



第 59 図 毛塚 32 号壺出土大型円筒埴輪復元図